図説 日本女子大学の八十年

図説 日本女子大学の八十年

カットは開校式のプログラムを飾った桜楓

はじめに

日本女子大学学長
青木生子

「目白の女子大」として知られてきた日本女子大学は、二十世紀の初頭、一九〇一年、新世紀の暁鐘をうち鳴らすかのように、この年この目白の丘に創立され、本年をもって満八十周年を迎えることになりました。

創立者成瀬仁蔵先生は、時代に先んじて女子の高等教育の必要を提唱され、教育目標の第一に「女子を人間として教育する」ことをかかげられました。男女の平等を基本とした深い人間形成をめざす先生の理想は、まさに今日の、いな将来にわたって普遍の教育理念の先駆をなすものといえましょう。

この建学の精神こそ、爾来、日本の歴史のめまぐるしい変貌の中にあって、本学園が指針を失わず、常に充実、発展の道を進むことができたゆえんのものと思います。それはまた、わが国のみならず国際社会のあらゆる面で、女性の自立、向上が求められている今日、いよいよその真価を発揮しつつあります。

本学は、創立以来すでに三万六千をこえる卒業者を世に送り、各界に貢献すると共に、婦人の地位向上に大きな役割を果してきました。八十年代は婦人の年といわれております。このとき八十周年を迎えた本学園は、建学の精神を真に継承、発展させて、二十一世紀へ向っての、わが国の女子教育に寄与すべき使命を強く抱くものであります。

このたび、創立八十周年記念事業の一環として、このような本学園の精神と歩みを、『図説　日本女子大学の八十年』として、刊行できますことを、まことにうれしく思います。

ここには、学内や桜楓会などの所蔵資料として埋もれていた数々の貴重な写真が載り、中には今回初めて公表の機に恵まれたものも少なくありません。

これが単なる日本女子大の歴史のみならず、ひいては近代日本の文化史、女性史、女子教育史にいささか資するものがあるならば、それこそ望外の幸でございます。

日本の女子大学の先達として、今後ますます伸びゆく本学園に期待をお寄せ下さいまして、一層の御厚情と御鞭撻をたまわりますよう、切にお願い申し上げます。

図説　日本女子大学の八十年　目次

はじめに
学園スケッチ
成瀬校長から青木学長まで

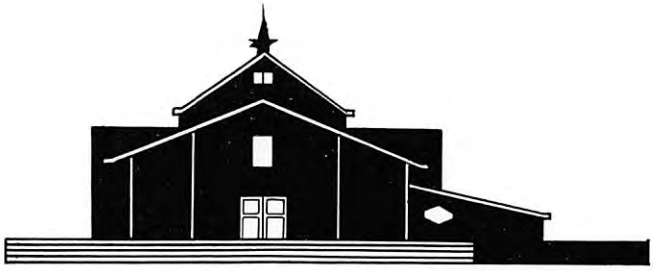
第一章　日本女子大学校の創立……22
1　創立期の学園……22
2　成瀬仁蔵先生を支えた人々……44
3　寮生活と三泉寮の開寮……51
4　桜楓会の成立と活動……58

第二章　大正前期の学園……62
1　成瀬仁蔵先生の外遊……62
2　新制度下の学園……68
3　成瀬仁蔵先生の永眠……74

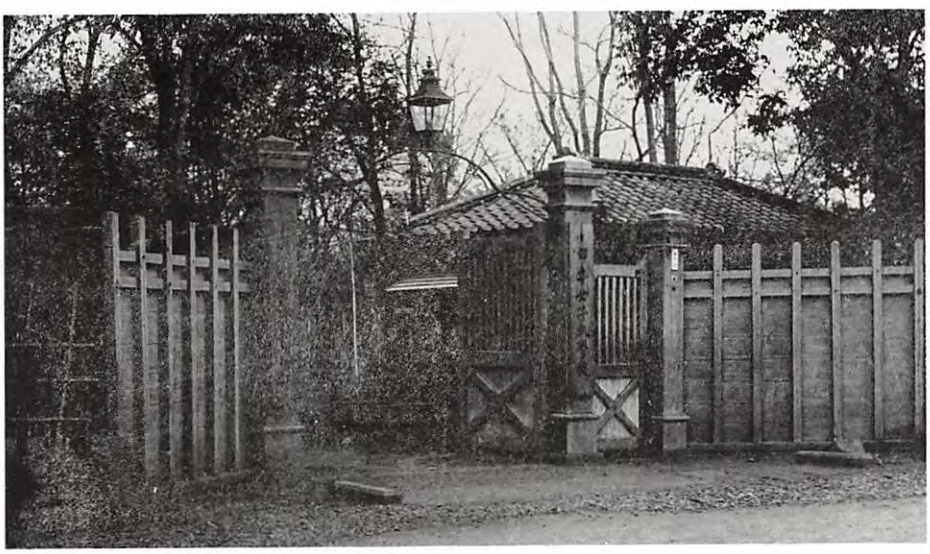
第三章　大正後期の学園……82
1　女子総合大学設立運動の開始……82
2　関東大震災と学園……88

第四章　昭和前期の学園……94
1　制度変更と学園生活……94
2　西生田校地の設定……102
第五章　戦時下の学園……104
1　学園の戦時体制化……104
2　勤労動員の強化……116
3　軽井沢への疎開……124
第六章　日本女子大学の発足……127
1　日本女子大学の誕生……127
2　学園体制の刷新と拡充……134
3　学園変動の諸相……138
第七章　学園の現状……146
1　大学の現状……146
2　附属校(園)の現状……150
3　学園の四季……158
編集後記
日本女子大学学園年表
付・日本女子大学・学部系統図
日本女子大卒業生数及女子高等教育終了者数

題字・青木　生子



明治の末年に建てられたレンガの門柱。大学校から大学へ、その苦難の歩みをともに70年余、今日もたつ。



明治34年、創立当時の正門。鬱蒼たる木があたりをおおい、地高く、水清く、気新たにして閑なる地であった……。

泉山館　昭和26年完成した本学の中心的建物。
創立者成瀬先生の号「泉山」より、その名を
とる。

昭和56年度の入学式は4月8日、花ふぶきの中で行われた。創立より数えて81回め、約千名の入学式である。

泉山館中庭　車の往来の激しい目白通りを一歩入ると、学内には静寂の一時があり、四季の花がにおう。

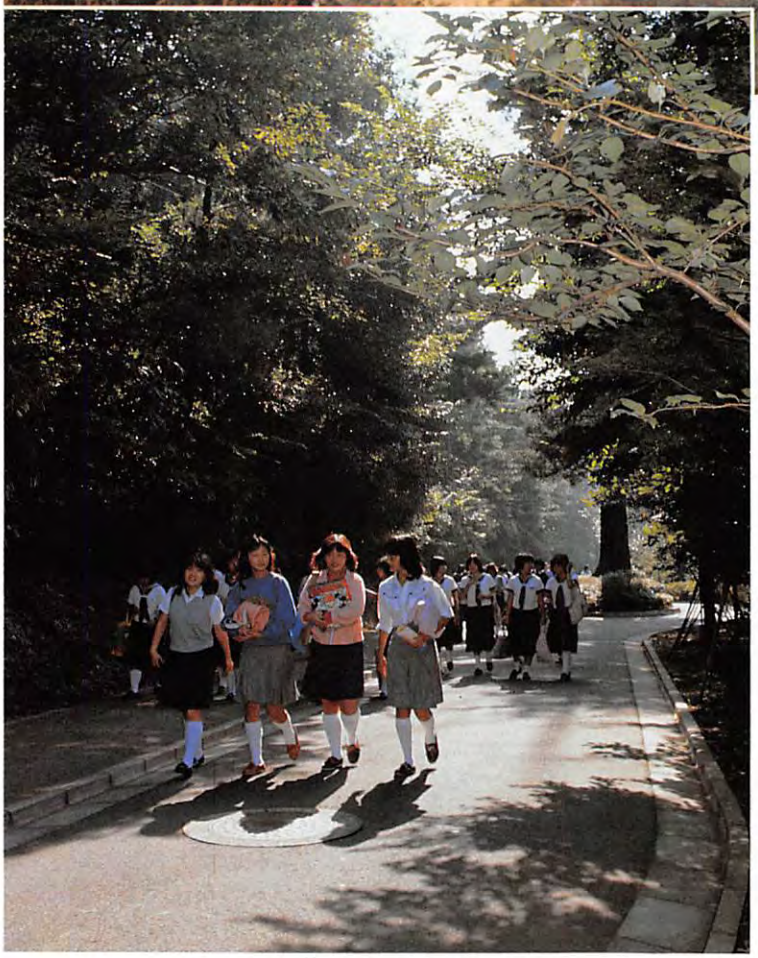
「ヴェリタス・ヴィア・ヴィタエ」
——真理は人生の道なり——図書館
入口。

泉山館中庭

ゆりの木陰　9回生の植えたゆりの木は育ち、いこいの道をつくる。樟渓館への道。

70年館　創立70周年を祝って竣工。1、2階は食堂、生協があり、活気にみちている。

広大な西生田の山ぞいに、21世紀の教育を目ざして創造された附属高校、中学の校舎がひろがる。



深い木立の道が、校門までつづく。朝夕にぎやかな声が、はじけるように木立を通り抜ける。

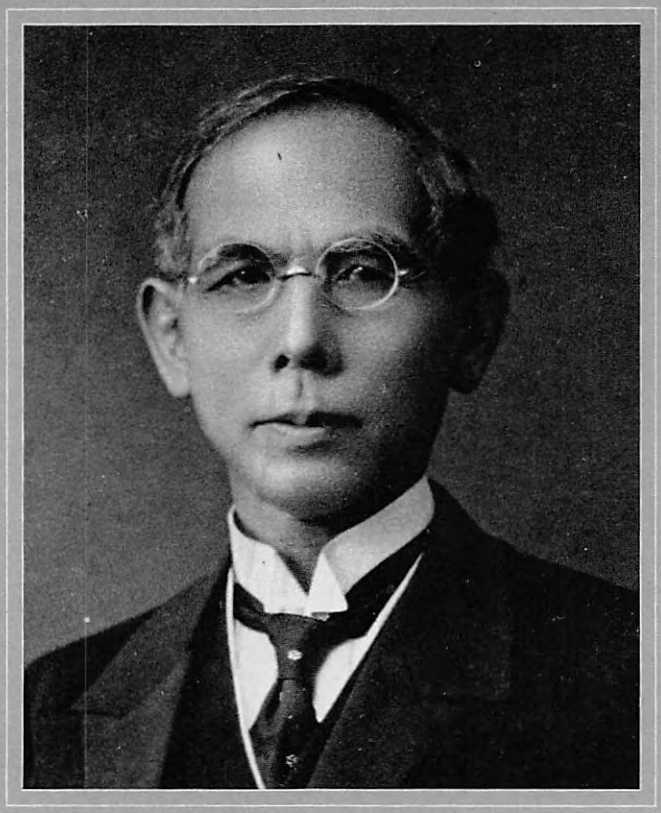
豊明小学校　道をへだてて建つ。都会には珍しく、校庭には土のぬくもりが…

豊明幼稚園　明るく広々とした保育室が並ぶ。園庭は斜面を利用して楽しい。

三泉寮　長野県軽井沢町愛宕山のふもとに、明治39年来、つづく夏期寮。（下）

学寮　寮舎から学寮へ、呼び名がかわったように様子も一変、近代的な鉄筋建築物に――。（上）

成瀬校長から青木学長まで



創立者
成瀬仁蔵先生

本学の教育の原点である三綱領は
先生の死の直前に書きあげられた。

第三代校長
渋沢栄一先生

第二代校長
麻生正蔵先生

扇面にかかれた自作の句。
青淵は、渋沢先生の号。

愛用の「論語」
縦 8cm×横 8cm。
皮表紙製。

第六代学長
上代タノ先生

第五代校長・学長
大橋　広先生

第四代校長
井上　秀先生

"Youth is a quality, not a matter of circumstances."
Tano Jodai

つゝ通
大道
廣

教育報恩
一致協力ゆき
綜合大学建設へ
井上秀子

上代先生の書かれた図書館の定礎

第七代学長
有賀喜左衛門先生

有賀喜左衛門

教育は真のヒューマニズムの中で鍛練されなければならない。それは国家を超えて通用する内容を持たねばならない。

第八代学長
道　喜美代先生

道　喜美代

希望とは可能性に満ちた将来に未来を賭けることであって、これを生かすか、生かさぬかはあなた方の態度いかんにかかっている。

第九代学長
青木生子先生

青木生子

女性の自立と、向上をますます目指して、わが学園は〝創立当初の原点に立ち帰り、明日に飛躍を〟と切に念じています。

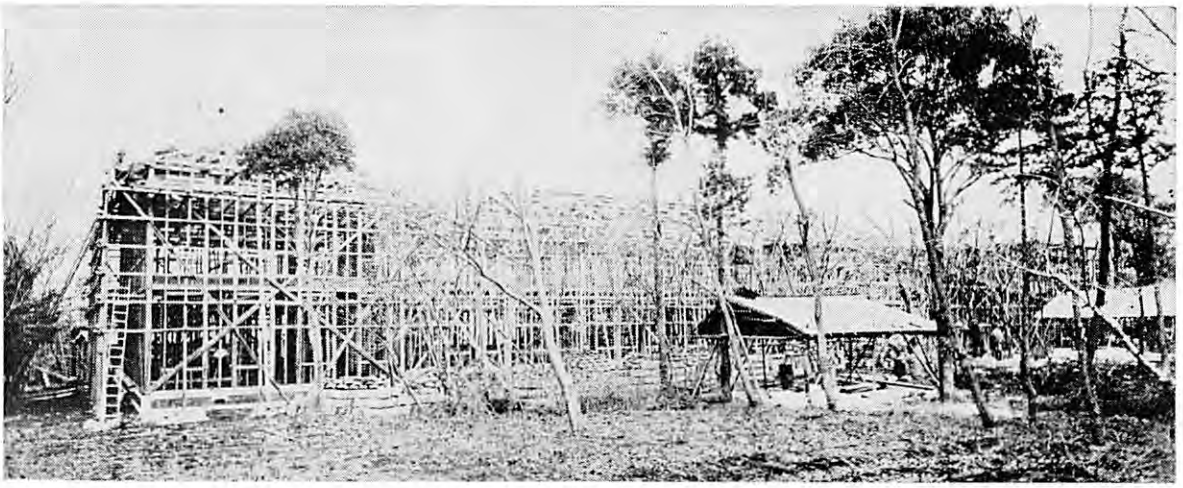
日本女子大学校歌

雲間をいづる　朝日かげ
匂ふがごとく　あたらしく
ここに生れて　日本の
文化をおこす　使命あり
女子大学の　その名こそ
永久に我等が　ほこりなれ

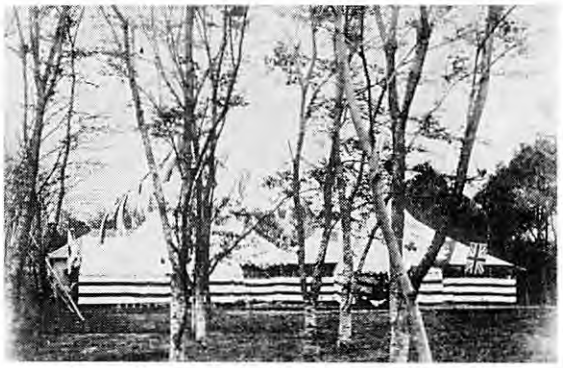
おもへば尊し　そのかみに
目白がおかの　伝統を
はじめたまひし　師の君を
御心ふかき　み教えを
浄き御業の　いま成りて
眠りますらん　安らけく

桜楓の　樹下道
みどりの風の　吹くところ
自由の鐘の　鳴るところ
自治のひかりを　かかげつつ
理想にもゆる　若人よ
声たからかに　進まばや

現在の校歌は古田夏子(現在は原田夏子)作詩。一宮道子作曲。昭和23年5月20日大学昇格記念式に祝歌として発表。以後校歌に制定。



建築中の校舎　明治33年４月，翌34年４月開校を決議した創立委員会は，清水組に建築工事を依頼。意気に感じた同組は短期間で工事を完成，鎚音の響く中での開校であった。



開校式場　二百余坪の天幕が，晴れの日の式場であった。降りつづく春の雨に，ところどころ天幕からは雨がもりだしたという。

その雨さえ感じぬほどに集まる人々の胸は，たかなっていたことであろう。

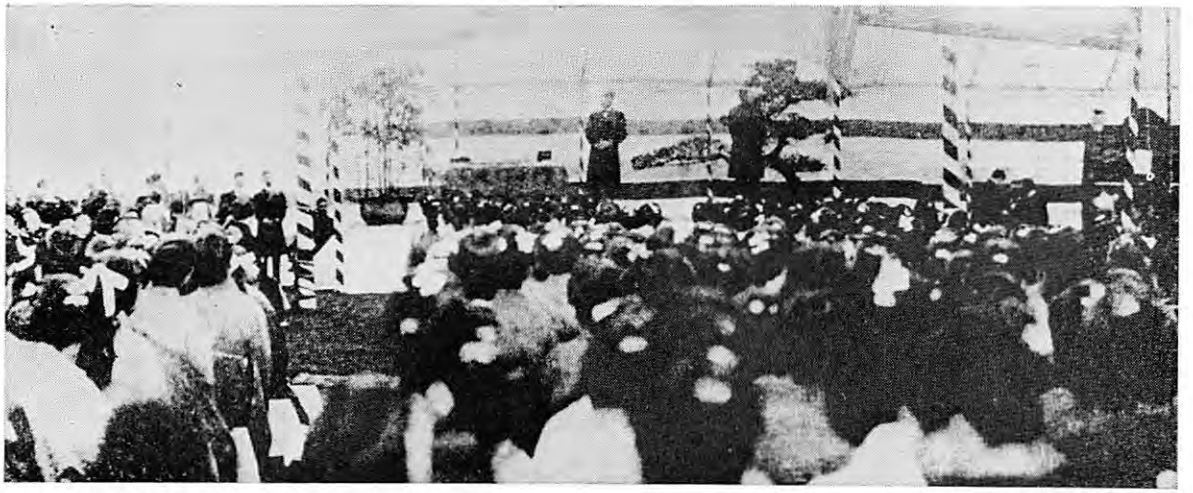
第一章　日本女子大学校の創立

1　創立期の学園

二十世紀の初頭、一九〇一年（明治三十四年）、春四月二十日、午後一時より日本女子大学校の開校の式典があげられた。

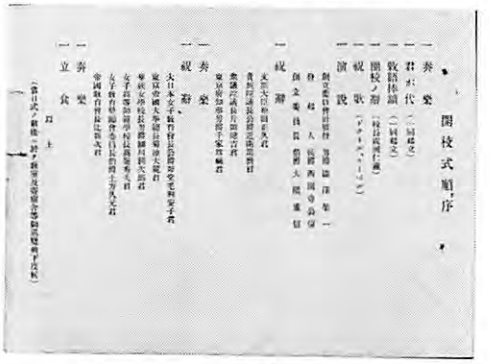
春雨が絶えまなくふりそそぎ、桜の花びらの散りしく運動場には、たくさんのテントが張られ、時の名士をはじめ、教職員及び生徒とその保証人など、千三百余名の来会者が相つどって、ここに盛大な式典がくりひろげられたのである。

日本女子大学校の創立された今世紀初頭は、まさに女子高等教育の黎明期であった。明治の初年学制がしかれ、初等教育から漸次学校教育が始まったものの、女子の就学率は一向高まらず、中等教育以上に至っては、都会の極く一部をのぞいては、ほとんど進展せず、男子に比べると女子教育は遅々たる歩みをみせていた。一八七九年（明治十二年）の教育令によって、男女の別学が規定されたが、高



開校式　「女子を人として，婦人として，国民として教育する」の熱情をもって設立準備に賭けること6年，開校の運びとなった本校を，成瀬先生は日本を代表する学校に，との自信と自負をこめて，日本女子大学校と命名した。

続々上京する入学希望者のために，「寮舎は4月8日より開かれて」待ったその日。祝辞を述べる大隈伯爵。



開校式順序

一　奏　楽
一　君が代（一同起立）
一　教勅拝誦（一同起立）
一　開校ノ辭（校長成瀬仁蔵）
一　祝　歌（マクタイ、ヘッセ）
一　演　説
財団法人日本女子大学校理事　男爵　阪谷芳郎
貴族院議員公爵　近衛篤麿
衆議院議長伯爵　尾崎行雄
東京帝国大学教授　法学博士　穂積陳重
文部大臣　松田正久
貴族院議員公爵　徳川家達
衆議院議員　伯爵　大隈重信
一　祝　辭
大日本女子教育会長公爵　近衛篤麿
東京帝国大学教授　法学博士　穂積陳重
東京帝国大学教授　法学博士　岡田朝太郎
女子教育者懇話会長　男爵　阪谷芳郎
女子教育者懇話会長　男爵　渋沢栄一
帝国教育会理事　男爵　渋沢栄一
一　奏　楽
一　立　食　口　上
（第一日式ノ終後一般ノ来賓ニ対シ学校ノ設備ヲ説明ス）

開校式祝歌　開校式に歌われたこの祝歌は，以来歌いつがれて80年，今日も創立記念日に歌われている。

日本女子大学校開校式祝歌

戸川安宅作詩
D・ケーベル作曲

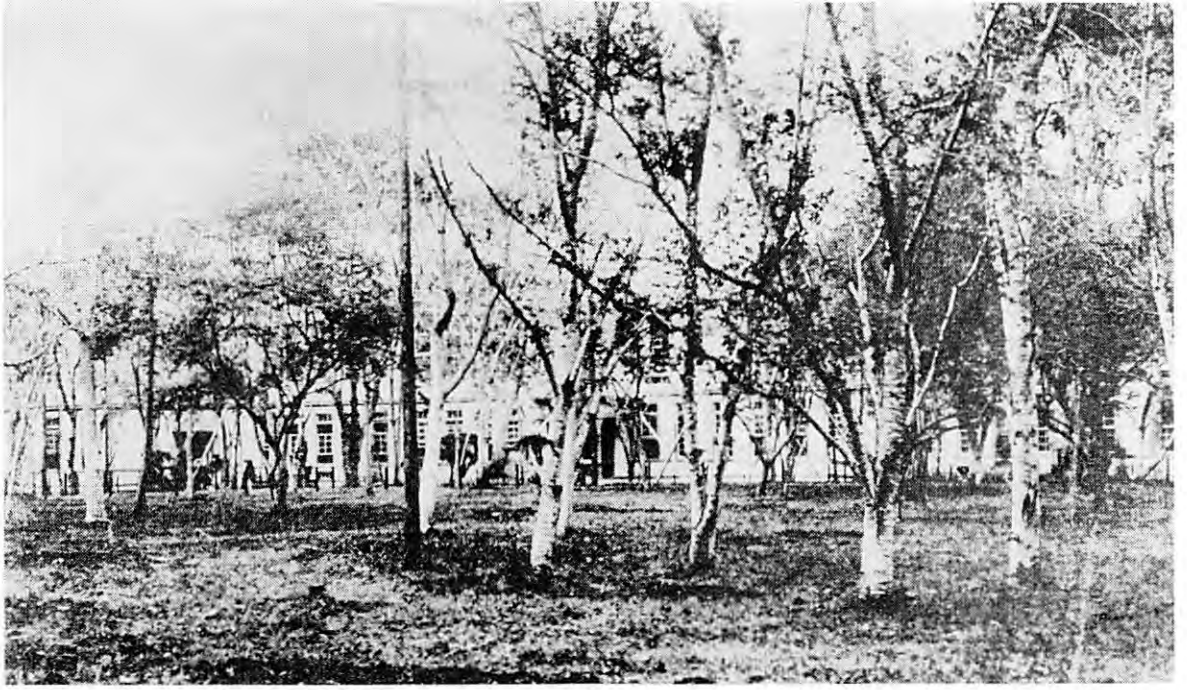
一、おさまるみよの　めぐみもて
ここにつくりしだいがくは
とよさかのぼる　ひのもとに
はじめてなりしものならめ

つくせ　をとめ
つくせ　をみな
みくにの　ために

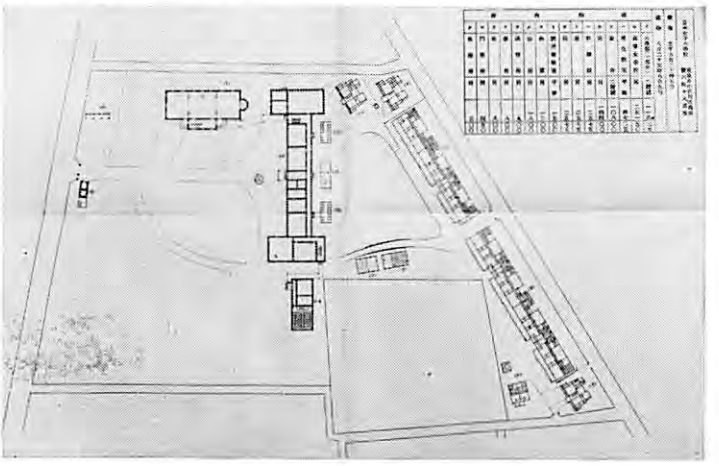
等女学校令が施行され、法的な整備がすすめられたのはさらにおくれて一八九九年（明治三十二年）のことであり、この時ようやく高等女学校を一県に最低一校、設置することが義務づけられた。この高等女学校教育の基本方針は、よく知られているように「良妻賢母主義」にあり、女子教育は高等女学校で充分であるとされ、男子の中学校は勉学するところ、女学校は躾けるところであるというのが一般の評価であった。

公教育が女子教育に対して消極的な政策に止まっている状況の中で、女子教育向上のために大きな刺激を与えたのは私立学校であった。特にミッション系の女学校は、その神の前に平等であるという人間観に基づいた教育によって、女子教育を進め、それまでの封建的な女性観をくつがえし、女子教育に新しい展望を与えた。

私立女学校の女子中等教育に果してきた役割は、さらに女子にも高等教育を与えるべきであるとする、在野の心ある二、三の教育家によって、より一段階高い教育機関の設置を促した。その内、最大の、秩序だった学校組織をもって創立されたのが、日本女子大学校であり、当時「女子大」といえば、本学のこ



校舎配置図



創立時の校舎　「目白台の中央，うっそうたる古樫の其四方を繞るもの，之を日本女子大学校とす，地高く水清く，気新に境閑なり，門を入れば幾株の老桜，路の左右に並び，巍巍たる灰白色の校舎，両翼を張て其前に横はる」……と当時の学校要覧に見える。

とを指していた。

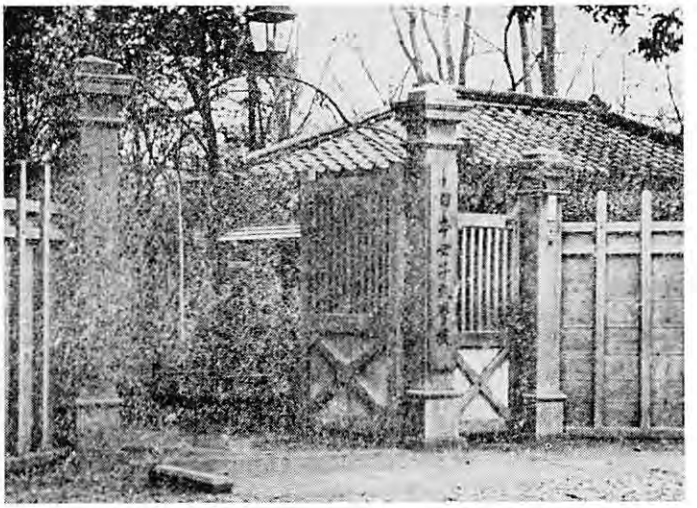
当時女子の高等教育には多くの疑問や批判が向けられていた。女子大学尚早論のような、いずれは女子も高等教育を必要とする時期がくるという考え方もあったが、一方、高等教育は女子を生意気にする恐れがある、人情に疎くなる、世に処する事を下手にする、教育は女子の身体を弱くする、幼児教育に悪影響が出る、女子に大学教育は不必要であるし、耐えられない等々があり、女子教育を進めることへの揶揄、嘲笑を含め、これらを論破しつつ、高等教育をひろめることは、並大抵のことではなかった。

しかしここに、女子高等教育の第一歩は印されたのである。

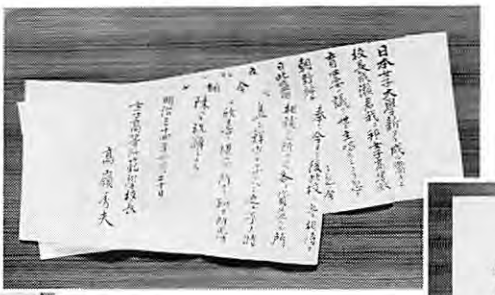
学園は、東京目白台のほぼ中央、四方に豊かな森のひろがる中に、正門から校舎に向かう道があり、その左右に幾株かの老桜があり、校舎は二棟、その後に寮舎が並び、教員の宿舎があった。校舎と寮舎の間には、花壇がひろがっていた。

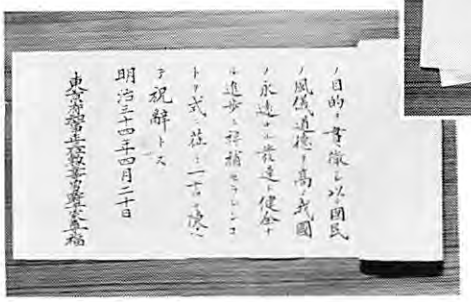
開校後数年間は生徒数も増加し、校舎も次次と増築され、敷地も遂年拡大し、学園内の様子は年毎に景観を異にするという発展ぶりであった。

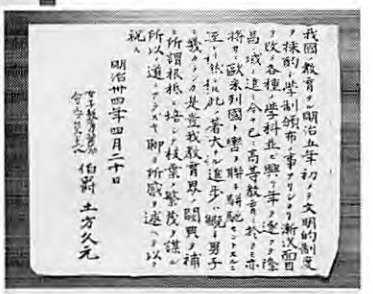
雨天体操場　「体育は物理的精神的存在者たる人間の基礎として……本校に於ては当初より重きを置き」，進歩的な実技が熱心に行われていた。



正門　門標の文字は田辺太一先生筆。その後，昭和5年彫刻家新間静邦氏が浮彫し，再生された。







文部大臣，貴族院議長，衆議院議長，東京府知事，東京帝国大学総長など多くの人が開校を祝って――

開校時の入学者数五百十名，内訳は次の通りであった。

家政学部　八四
国文学部　九一
英文学部　一〇
英文予備科　三七
計　二二二名
附属高等女学校　二八八名
合計　五一〇名

開校当初の生徒は，年齢も経歴もさまざまで，十八歳より三十四，五歳に及び，女学校卒業直後の者もあれば，すでに教員であったり，既婚者であり，母である者もあり，出身地も殆ど全国にわたっており，その多くは周囲を説得し，世論の反対に抗して，希望と熱意に燃えて郷里を出，はるばると旅をへて本校にたどりついたのであった。

こうした生徒に対し，創立者成瀬仁蔵校長は機会あるごとに，その教育方針を述べていった。その主眼点は，女子を第一に人として教育すること，第二に婦人として教育すること，第三に国民として教育することにあり，この順序をあやまってはならないと指摘した。人としての教育とは心身の能力を開展せしめ，

開校時教職員
成瀬仁蔵，麻生正蔵，小杉榲邨，塩井雨江，戸川安宅，中村梅太郎，小野鵞堂，三輪田真佐，村井知至，松浦政泰，白井規矩郎，小笠原清務，前田園子，塘茂太郎，他

開校時の規則書

人間として欠くべからざる資質を備えることにあり、智育、徳育、体育全般における、個人の特性に応じた教育によって、内発的な自立的な人間となることを、期待するものであった。

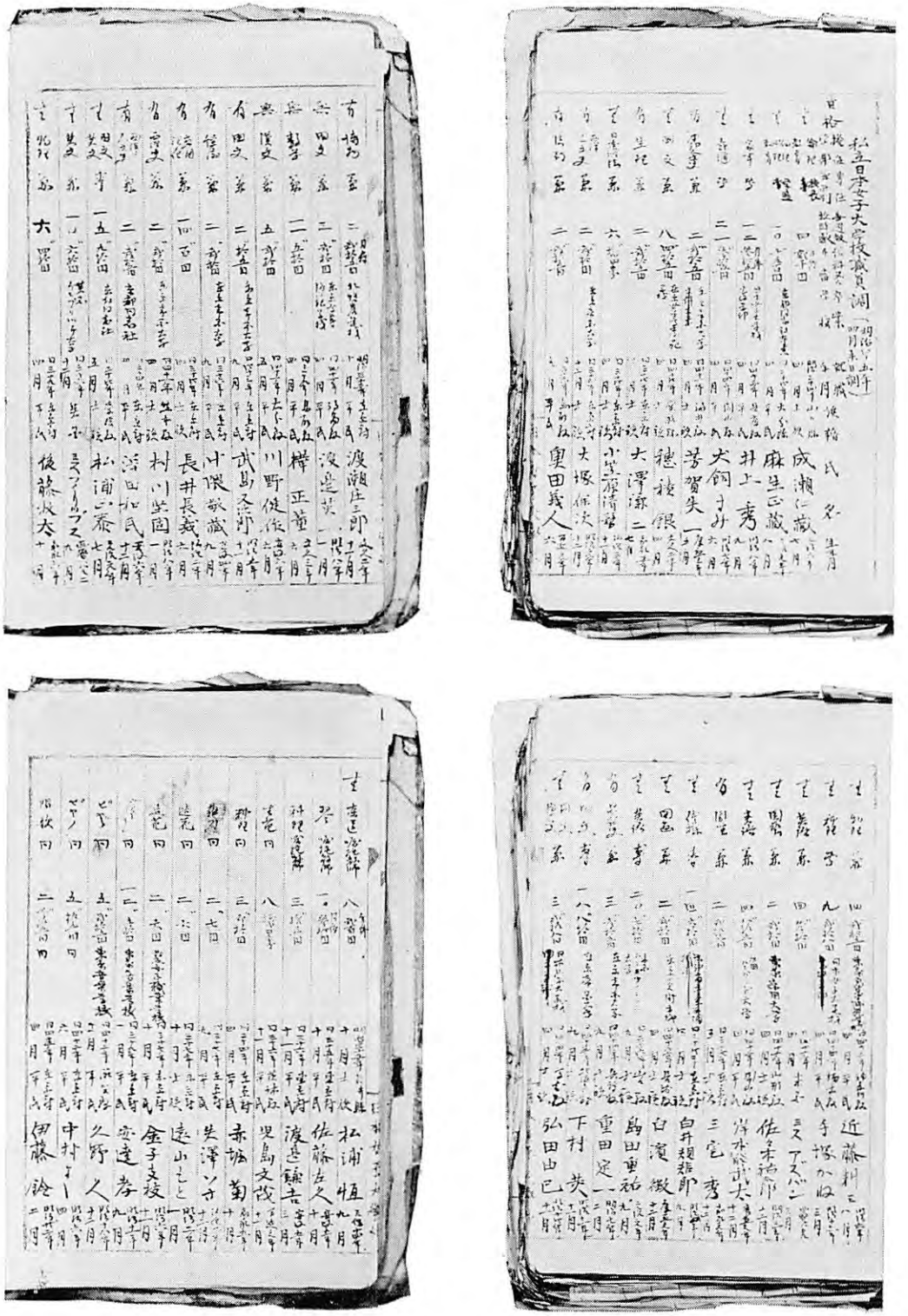
入学してきた生徒達はヒューマニズムに基づく教育観や、婦人や一国民としての自覚の主張に初めはとまどい、そして次第にその広い深い熱気あふれる講義に圧倒されていった。

日本女子大学校の教職員や講師の人々も本校の設立趣旨を了解し、女子高等教育の方針に理解があり、注入的な教授法を排し、開発的な教授法に賛同する、当時の一流の人々が選ばれ、その協力を得て、本校の教育が行われていった。

創立期は各学部が、研究と教育をそれぞれに努力を重ねながら推進していったことは勿論であるが、特に家政学部は当時の高等教育には例がなく、家政学部をどの様に構成し、運用するかは大きな創造的課題であった。

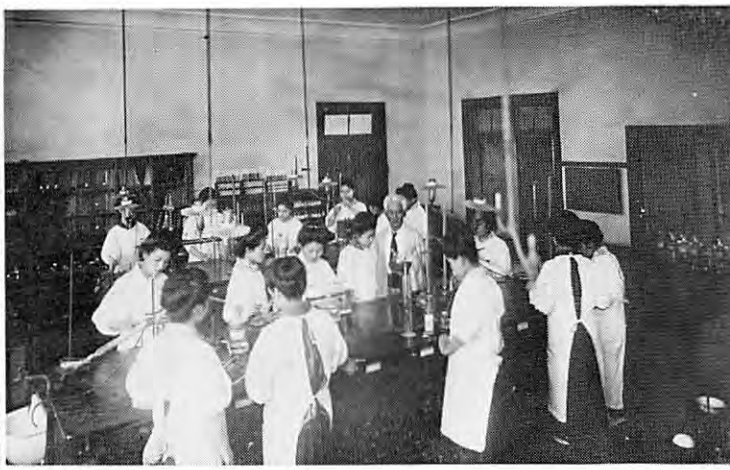
こうした問題を内包しつつ努めて多方面から、知能の啓発や品格の陶冶につとめ、広い視野と内発的な人格教育を育成しようとした。

例えば教科の講義の他に、科外講演を設定し、多様な内容の演題を用意している。一例



明治39年教職員調　当時一流の教授陣を誇っていたことがうかがえる。身分の明記が，いかにも明治らしい。

教育学部・動物実験　理科教育に主力を注ぐ目的で開かれた当学部では，一部（数学・物理・化学）と二部（博物）にわかれ，“実物実地”が重視されていた。香雪化学館は，「帝国大学工科の教室を除いては他に類例を見ない」と，長井長義博士も感心されたほど，充実した設備を有していた。



家政学部・化学実験　特別教室中，最も完備した香雪化学館実験室を使って，家庭生活に応用すべき化学上の知識と，科学的頭脳の養成に力が入れられていた。

旧物理教室内部　創立当初よりの建物。

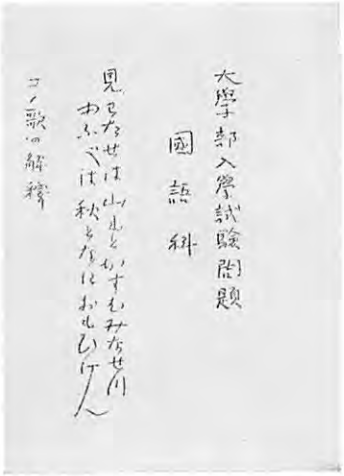
をあげると、

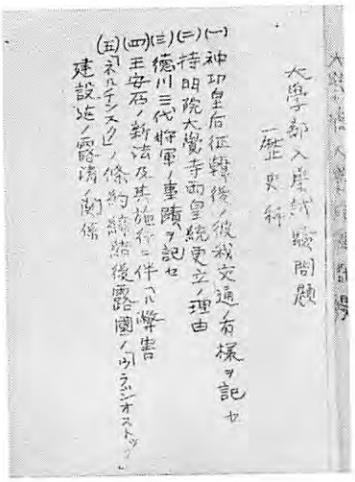
法律上の婦人　東京帝国大学教授　ブリデル
女学生の心得　東京師範学校校長　嘉納治五郎
茶道の沿革　伯爵　松浦　詮
本邦教育の進歩に就て　久保田　譲
言語学（三回）　文学博士　上田万年
面白き話（人類学大意）　理学博士　坪井正五郎
沙翁劇キング・リーア　文学博士　坪内雄蔵
個人と社会との関係を論じて女子教育に及ぶ　文学博士　元良勇次郎
倫理学の一問題　文学博士　井上哲次郎
婦人の力　島田三郎
歴史研究の興味に就て　文学博士　三上参次
家庭に於ける清潔法　医学博士　中浜東一郎

その外、来校された多くの名士に、一場の講演を依頼することも、一つの科外講演であったといえよう。

教員と生徒による研究会や談話会も開かれていった。英文学部では毎月一回文学研究会を開き、会話・暗誦・朗読・談話などを行って英語学習に役立て、国文学部でも文学会を開いて美文・和歌・新体詩の朗読を行い、両

明治三十九年度
定期入學試驗問題
日本女子大學校


大學部入學試驗問題
國語科


大學部入學試驗問題
歷史科

入学試験問題　「成瀬先生は点取虫が嫌いだった。私が三年生で，宗教的に苦しいとき，2行ほどの答案を書き，真暗闇でわかりません，と申し上げたら，その言を認めて下さった。真の教育者だった……」――大橋広談

創立当時の学生生活――成瀬先生追懐録より

大岡　蔦枝

……三十四年四月に女子大学の学生となりました。学生生活の第一学期には全く今迄とは異った教育を受けつつある事に興味を感じて、殆んど夢中で熱心に何事にもあたりました。成瀬先生より団体力とは何であるかと言ふ事を初めて実践倫理で伺ひました。

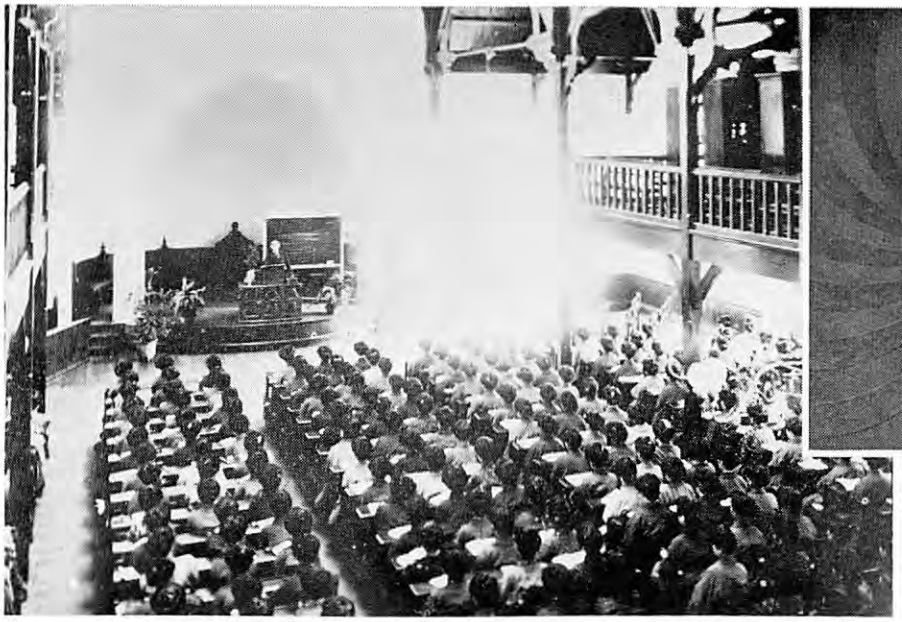
本校でさづけらるる新教育とはかかる精神的生活を学生になさしめる事だと言ふ事を深く信じました。当時私等の問柄には学校の事をとかく批評する人々もありましたが、私は成瀬先生を信じました。

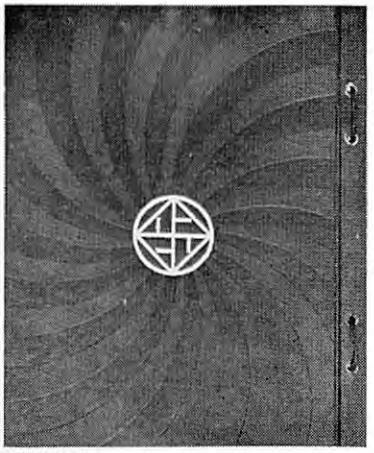
……一年の二学期末頃より勉強法についての御話を伺ひ、学問を研究する者は智識を開く鍵を得なければならぬと御説明になり、その鍵とは実験、経験、観察及び法則又は臆説等であると伺ひました。

これにあたるの能力を練り得たものが研究力を収得せる事となるのだと、御指導になりこの智識の鍵を握り得た事に依って、本校の学生生活をなしたる者と言ふ事が出来るのであると仰せられました。その研究法を学生各自に見出さしめ、又この能力を得せしめる事が本校の智育の目的でありました。

曽て高女時代には、学問と言ふ事はなるべく頭に沢山のものを知っているのが所謂学者であると思ってをった私には、此の知育の新教育方針を伺ひ得た事が、本校で得た一大福音の様に思はれました。

さて、過ぎし自分の二学期間の学習態度を省みました時、少しもそれ等の実行は出来てをらなかったのでした。私は決心して、一年に居据りをすることにしました。





実倫ノート　成瀬校長のデザインしたノート。このモチーフが，のちに校章となった。

女子大学校の精神的主柱は，成瀬校長の実践倫理であった。その講義は開校の目的をこめて熱っぽく，時間を超えて続けられた。

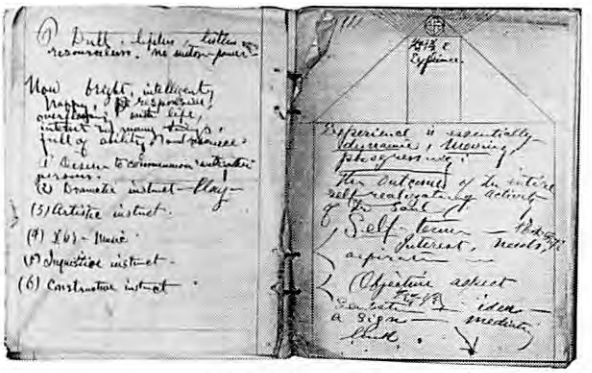
提出した実倫のカードには，校長の朱が入れられた。

学部合同の会をもつこともあった。家政学部には、研究会と談話会があり、前者は学理と実際上から家政改良に資する目的をもって、課題を分業して研究し、毎月の会合に結果を報告した。談話会は、生徒相互の親交を深め、将来にわたって一致協力して社会的活動を行うための素地をつくる目的で、毎週一回開かれていた。

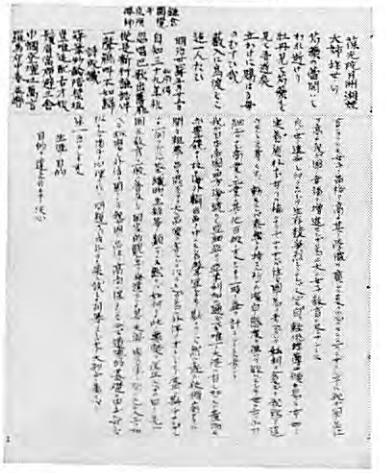
生徒は各学部に所属しているが、生徒になるべく、自修的、自動的且つ自主的に学ぶことをすすめ、他学部の科目を選択したり、聴講することが許されていたので、家政学部なら入学を許すという家庭の多い当時にあっては、選択制の導入は好評であった。

こうした本学の中心となるのは、成瀬仁蔵校長自身による「実践倫理」の講義であった。

実践倫理学 Practical ethics とは「純正倫理学 Pure ethics に対して云ふ事なり。而して実践倫理学は純正倫理学の如く、理論、学説等を主とせざるも、其の中自ら整然たる秩序あるものなり。故に先ず之を諸子に咀嚼せしめん事を要す。現今、世界各国にて最も研究の新しきものは、社会学にして、それに続くものは婦人問題、労働問題等なり。而して是等は凡て Practical ethics に含まるるもの



成瀬先生実倫ノート



実践倫理ノート　松，竹，梅，三冊にまとめられた弘田由己子（一回生）のノート。どんなに大事なノートだったか。端正な筆跡からもうかがえる。

なり。故に予が受け持つ処のものは、時々刻刻に起り来る活問題にして、須臾も研究を怠る可からざるものなり。諸子と共に直接研究すべきものなる故、学生の進むに先立ちて実行すべきものなり」とし、ここに第一に着手すべき研究課題があると指摘した。

実践倫理の講義において時には社会、国家の見地から、学問する者の責任と指導性の発揮を求め、ある時には、現実の教育に対する鋭い批判を行い、卒業を目的とする学問や、学問と生活の乖離、生涯の目的を設定し得ぬ

実践倫理の思い出

――『成瀬先生追懐録』より

……成瀬先生は時間を超越して、三時間でも四時間でも五時間でもお説きになられたのです。今の物理教室で、その当時はガス灯がなくて、物理の実験用のブンゼン・バーナーがあっただけで、そのバーナーのもとで実践倫理をせられたのです。ルーテルの宗教改革の時もこんなものではなかったかと……

先生があの楊貴妃の桜にかこまれた旧理科室の階段教室で「誰か賢婦に遇ひしや」と実践倫理に御話し下さった御声は、今もなほ聞ゆるのであります。

「心の眼を開き心の耳を開いて……真に家庭社会国家を思ひ、団体を愛し、友を思ひ……」と夕闇にすっかり包まれた旧理化教室に、私共の深き感謝にすすり泣く音と、先生の御顔がテーブルのブンゼン燈の青白い焔にてらされて、恰かも愛国の志士が国を憂ひ世を救はむがため婦人に立てよと叫ばるるお声のみが……

自転車乗り　女子大名物自転車乗りは「閑雅なる紅袴の一隊，長袖を微風に翻して」快活に，巧妙に乗り回したという。

第一回運動会　明治34年10月22日，遙かに筑波の山脈を望む王子飛鳥山，渋沢男爵別邸の庭園に於て，第一回運動会が行われた。

ことへの疑問をなげかけ、一生涯全心全力を注いで実現すべき、あなたの天職は何かと問うた。

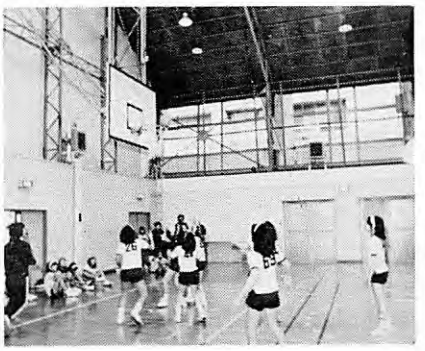
一方、自立的な人格形成について、様々な角度からその方法を述べ、自己開発を助け、生涯を通じて燃焼力を保つ、原動力と実力と方法を身につけていくことを求めた。同時にその基礎となる宗教的精神的態度の重要性が説かれた。

こうした教育をより促進するために、学生生活に、自治活動を大幅に導入した。教員の指導をうけて、自治組織は縦の会(学部毎)、横の会(学年毎)、係会、級会などの他、修養会があり、それは学校行事の運用に生かされ、目白の学園の一大特色となっていた。

本校の教育で、当時社会の注目を集めた一つに、体育教育がある。まだ一般的には女子の体育は軽視されており、特に少女期になればむしろ、うつむきがちの弱々しい姿をよしとする風潮が残っていたのであるから、体育の重視は特記されるべきことであった。

体操は四つの区分があり、普通体操・遊戯体操・教育体操・容儀体操であった。普通体操は、普通体操とスエーデン式体操を指し、遊戯体操は、テニス、女子ベースボール、ク

「袴は地上四寸位の高さにはく」のが，運動会の日のきまりだった。



そして今。どの小学校よりも早く豊明小学校ではバスケットが教科にとり入れられていた。

袴からブルマーへ，身軽になって競技は一層白熱したことだろう。

日本式バスケットボール

「バスケットボールの練習で手を痛め三角布で右手を包帯して居るのをご覧になって成瀬先生は立ち止まり、「どうした、運動会に困るだろう」とおっしゃった後から直ちに、「大隈さんは足一本やられた時に片一方で立ち上られたというから、あんたも左手で戦えばよい」といわれた……」

（家政科八回生・長谷川きぬ）

運動会随一の呼物バスケットボールは、成瀬先生が外国から直輸入、改良創案されたもので、日本式バスケットと呼ばれる。

「六，七尺の布を手にして現れ……前後に星形を処々に作る」辰宿列張であろうか。辰宿とは，星座の意味であるという。

「朝来参観者陸続として詰め掛け，午後に到りては満場立錐の地もなき程にて，殆んど三千人余れり」（明治37年３月「女学世界」）

わたつみ　そのほか「菊花の満載した籠を頭上に載せ……マーチによって花を来賓に呈しながら退く」花売りも，大評判であった。

ロッケー、ホッケー、バスケットボール、テザボール、スカーフ、縄飛び、追羽子、千鳥競走等をふくんでいた。教育体操とは、自転車運動と薙刀であった。自転車は当時は貴重品であり、まして女子が乗ることなど考えられない状況であったが、あえて体育にとり入れられ、十余輛が練習用として備えつけられていた。薙刀は武甲流の師範から指導をうけていた。容儀体操としてとり入れられたのは、フランスのデルサート式体操であった。

これらにみられるように、日本古来のものがある一方で、欧米の体育もとり入れ、かつ日本式バスケットのように独自のやり方に改良したものもあった。

体育の重視の発露が、運動会であった。開校した年の、第一回の開催から毎年行われ、春秋二回のこともあり、次第に有名となり、東都の名物の一つとなって、二千人、三千人と人が集まるようになり、多い時は入場者五千人を越えることもあった。

運動会は単にお定まりの競技を行うのではなく、様々の出し物が年々考案され、演出され、幼稚園から大学まで参加した。自転車のマーチやゲームはやはり注目の的であった。

同時に運動会の準備は、裏方（例えば料理）

十月廿二日　王子花島山滝摩男學別邸内ニ於テ第一回
運動會ノ催ス

(一) 唱歌（長の秋）　祝賀生徒　一同
(二) 旗送ノ競爭　高等女學校　一年級
(三) 提灯競爭　〃　三年西組
(四) 紙鞠競爭　家政學部　一年級
(五) 百足競走　高等女學校　二年級
(六) 唱歌（月の姿）　〃　三年東組
(七) 登校支度競走　〃　五年西組
(八) 越坂競爭　〃　五年東組

(九) 唱歌（秋鶴）　〃　二年級
(十) 鞠送ノ競爭　英文學科　一年級
(十一) 御伽籠競爭　國文學部　一年級
(十二) 氣球烟合競爭　高等女學校四年級
(十三) 輪投ノ競走　英文學部　二年級
(十四) 陸上短艇競走　國文學部　一年級
(十五) 十島競走　家政學部　一年級
(十六) 青月旗取競走　高等女學校三年西組
(十七) バスケットボール　國文學部
(十八) 職員競走　家政學部　英文學部

(十九) 唱歌（秋の月）　生徒　一同
(二十) 軽氣球打揚　ス上

(十一) 盆鞠競爭　〃　三年西組
(十二) 和歌組合せ競走　國文學部　一年級
(十三) 個人競爭　高等女學校三年東組
(十四) 裁縫競走　〃　五年西組
(十五) 唱歌（去年の今夜）　〃　五年東組
(十六) 盲唖競走　家政學部　一年級
(十七) 手毬あやつり競走　高等女學校五年西組
(十八) 丸拾競走　國文學部　一年級
(十九) 翻譯競走　英文學部　一年級
(二十) 青月旗伏せ競走　高等女學校三年西組

『目白生活』より――滝本種子

……私共の学校の運動会は、東京市中の年中行事の一つとなってゐるとは、どんなに張り合いのあることであらふ。十月初め、愈運動会があるといふことがいひ出された。「質実に」といふ声が校内の隅から隅まで行きわたる。先生を顧問や相談役として、生徒の小さい頭の中から、校庭一ぱいにひろがる分量のはたらきをあらはすのだからうれしい。

「寿向三千人前。」「菓子三千人前。」

もう全校の料理係りは懸命のお手際である。

……お客様が次第〳〵にみえる。迎へて送って迎へてゐる間に、入場券はすぐに一万近くを数へる。「こまりました、もう場所がぎしぎしだ」幹事がこぼす。

後方の建物は香雪化学館

木植え　「第二回の創立記念日なれば…年々来るべき此の日を祝するに，虚飾を避けて質実有効の会合たらしめんとは，一同の念頭に浮びたる考えなるが，此たびは各自手づから一株の樹木を植へて後年のかたみに残さんとし…」（学報より）

に至るまで教職員、学生生徒一致協力して、夜を徹しての活動であり、責任と連帯を体験する機会でもあった。

現在、毎年四月二十日の開校記念日に、記念樹を植えることが年中行事となっているが、記念樹の最初は、桜と楓であったという。しかし記録に残るのは、第二回の創立記念日の時のものである。「学報」第一号の記事によれば、創立記念日を虚飾を避けて質実有効の会合にしたいということから、各自が一株の樹を植えて、記念樹とすることにし、桧・杉・山茶花の苗千二百余株を求め、植えたという。その時、木植の歌をうたったが、以後毎年のように作りかえられてうたわれている。

後には、大学部、附属高等女学校、豊明小学校と、別々に植樹をするようになり、植樹も最上級生が植えて記念とすることが長くつづいたが、一九六六年（昭和四十一年）から新入学生となって、歌も一定してきている。

長い年月の間には、枯れたり、移しかえたり、わからなくなっている記念樹もあるが、幸いにも大きく育って、憩の木陰をつくっている木樹もある。学園の変貌をどのように見ているか、聞いてみたい気がする。

＊ 各回生とその記念樹

1回生　楡，杉，山茶花など1200本
2回生　高野槇，白つつじ
3回生　桜，楓
4回生　松
5回生　そてつ
6回生　楓
7回生　楠
8回生　泰山木
9回生　ゆりの木
10回生　泰山木
11回生　銀杏
12回生　ヒマラヤ杉，松
13回生　金鉾蘭
14回生　泰山木
15回生　おがたま
16回生　松
17回生　もち
18回生　榧
19回生　木蓮
20回生　山茶花
21回生　肉桂
22回生　銀杏
23回生　朴
24回生　椎
25回生　桜，楓
26回生　黄楊
27回生　月桂樹
28回生　唐椎
29回生　緋紺桜
30回生　楓，もみじ
31回生　公遜樹
32回生　桜，楓
33回生　桂
34回生　山桜
35回生　野村もみじ
36回生　緋桜
37回生　桜，楓（西生田）
38回生　桜，楓（西生田）
39回生　桜，楓（目白）
40回生　楓二本（西生田）
41回生　山桜，若松，若杉（西生田）
42回生　植樹あるも不明，（昭和19年）
43回生　（昭20）　不明
〃　〃
48回生　（昭25）　〃
新制1～5回生　不明
新6回生　桜
〃7回生　桜
〃8回生　八重桜
新9回生　八重桜
〃10回生　白木蓮
〃11回生　泰山木
〃12回生　こぶし・桜
〃13回生　夏つばき
〃14回生　ぶんご梅，紅しだれもみじ
〃15回生
〃16回生　岳南桜
〃17回生　桜
〃18回生　ひめみずき
〃19回生　八重桜
〃20回生　桜
（以下略）

43～48回生については，どこにも木植えの記録がない。ちょうど昭和20～25年，敗戦前後の混乱に学園もまた，見舞われていたのだろうか。

そてつ　5回生植樹，図書館の守護神のように，たくましく常磐の葉をひろげる。

木植の歌

塩井　雨江作詩

一、
真木の若木を今日植へて
見れば緑のゆかしさよ
常磐に繁る学びやの
千代の栄えの末見へて

二、
真木の苗垣今日つくり
見れば嬉しき我が心
仰ぐ我れ等が学びやの
常磐の門の末見へて

ゆりの木　9回生植樹，四季おりおりの美しい表情を見せる。心なごむ葉かげ。

「自治自制の精神を以て切磋琢磨の功を積み本校永久の基礎たる校風や寮風を開拓され，桜楓会を組織して其根柢を培養し……」成瀬校長の告辞に送られて，第一回の卒業生120名が巣立っていった。
上・家政学部一回生55名
下・英文学部一回生6名

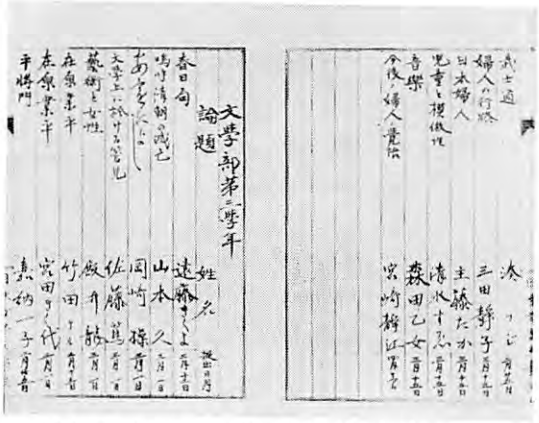
一九〇四年（明治三十七年）専門学校令による認可を得、翌年、財団法人組織となり、学園の基礎が確立した。

次の年、幼稚園及び小学校が付設されることとなり、ここに幼稚園から専門学校段階までの一貫教育が可能となった。ただし、幼稚園は現在まで、小学校は一九一七年（大正六年）度まで、男子生徒の入学を受け入れている。附属の各校、園においても、教育精神や方法は同じであり、精神的雰囲気と自動的、自律的な活動をすすめ、自ら学習し研究することを奨励した。したがって、各教育段階においてそれぞれに研究、教育に工夫がこらされ、上級生は、同時に自治自動の生徒活動の中心となり、特色ある校風をつくり上げていった。

附属校が実習の場となる教育学部も一九〇六年（明治三十九年）に増設された。教育学部は家政学部や文学部に対し、理科的教科に重点をおくことが目的であったが、後に家政学を主とするものに変っていく。教育学部のおかれた豊明館と隣接した豊明図書館も、この時落成した。豊明図書館は講堂と兼用で、今日の成瀬記念講堂の前身であり、階上が書架及び閲覧室であった。

西園寺侯，東京府知事千家尊福，久保田文部大臣の祝辞，生徒総代の謝辞とつづき，式は終った。
上・国文学部一回生59名

卒業証書　柳（橋本）八重氏



当時（九回生）の女子大生の好みがうかがえる……

その頃の授業

柳八重子（一回生・国）談より

一番お話して下さったのは戸川安宅先生、女性では三輪田真佐子先生、中島歌子先生、三宅花圃先生、塩井雨江先生は少しあとになります。中島先生は黒ちりめんの羽織で粋な姿でした。それから麻生正蔵先生の心理学、博物館の鑑定などをしていた小杉榲邨先生、こういう先生方の中にもきびしい真面目な先生と、さばけた先生がありました。戸川先生など机の上に乗って、結跏趺坐の恰好をして見せたりしました。この後、だんだん組織立って来ますが、特殊講義なども何回かありました。この中で印象の深かったのは、坪内逍遙先生、上田万年先生、美術史の大塚保治先生などです。講義に幻燈が入ったものだから皆、喜んだ。国文、英文、家政科を問わず特に聞きたい人が出られた。

附属高女　裁縫　縫方，裁方にわかれ週4時間，1年から5年まで履習。教室で学んだものを帰宅後修正。完成して提出させるため実習といった。

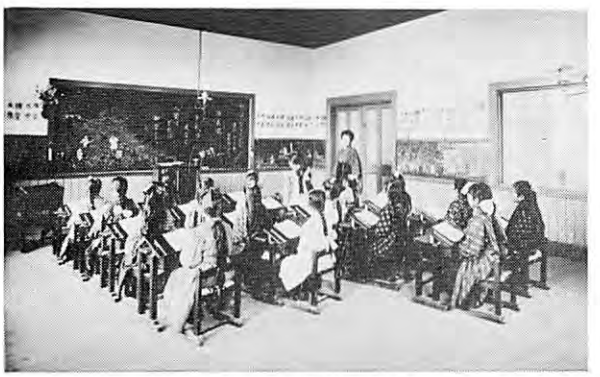
理科　毎時間ごとに印象を新たにし，自動的精神を養うことを目的として，教室は各学科別であった。

さらに一九〇七年（明治四十年）四月、国文学部は文学部と改称され、日本文学関係の時間を減少して、和・漢・洋にわたる文学を学ばせ、新たに人文史の講義を導入し、内容を刷新した。翌年には、当時の最新の設備をもって、香雪化学館が設立され、特に実験実習に大きく役立つこととなった。

内部充実がはかられていく一方、大学教育の社会的拡張が意図され、『女子大学講義録』を刊行し、通信教育事業をはじめ、英文雑誌『ライフ』（後に『ライフ・アンド・ライト』）を発行し、英語教育及び海外事情への理解を深めるよう、学内外で使用された。

かくて、一九一一年（明治四十四年）、創立十周年の祝賀会を迎えることとなった。現実には入学希望者の減少があり、社会的にも女子高等教育に対する非難が、依然として強力にあり、苦難の時であるにも拘らず、『日本女子大学校の過去・現在及び将来』と題された、この時の記念出版には、将来への抱負が熱く語られている。

日本ししゅう　将来家庭の主婦としての準備も，教科内容として重視された。



「種々の係りが置かれ生徒は必ず何かの職務を尽す事となって居り，運動会や父兄会など折々の活動は実に目覚ましく…」学校評判記

自学自習を重んずる，当時としては進歩的な教育が，学園一貫して行われていた。

どろんこ道のそばの学校

花井稲子（19回・国）

私が小学校へ入学した頃（明治40年）、学校の前の通りには自動車もバスも通っていませんでした。都電の終点は「江戸川」（今の大曲）で、そこから25分歩いてくるか、人力車でなければ通えず、学校の近くの方が多く、遠い人は寮に入りました。

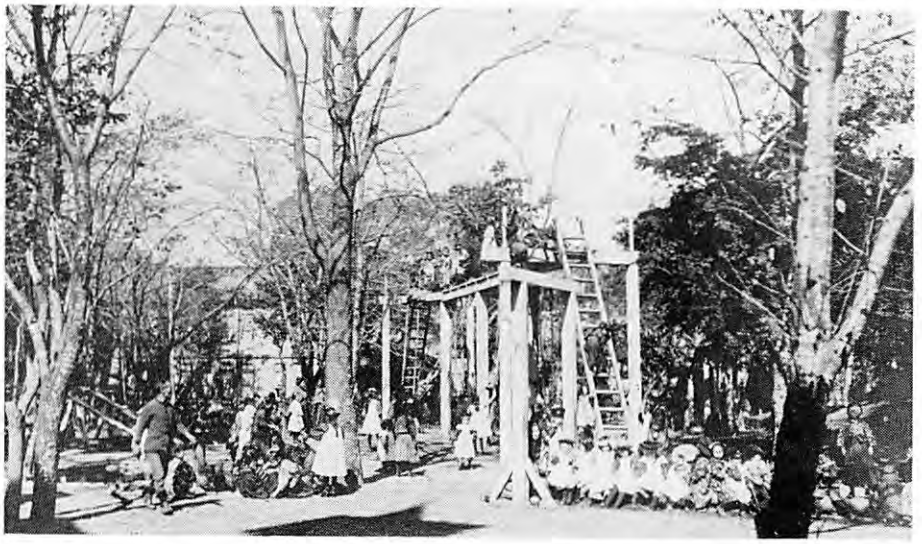
授業では粘土が楽しく、かまもありおひな様もやきました。

学校の通りにはお百姓が荷車に野菜をいっぱい積んで通っていて、雨がふると、道がどろんこになりました。たくさん通る時にはぎしぎし云って、先生のお話が聞えないくらいでした。

附属豊明小学校

校舎　明治38年12月竣工の二階建，表門を入ると左手にあった。39年開校，男子１名，女子10名の一年生

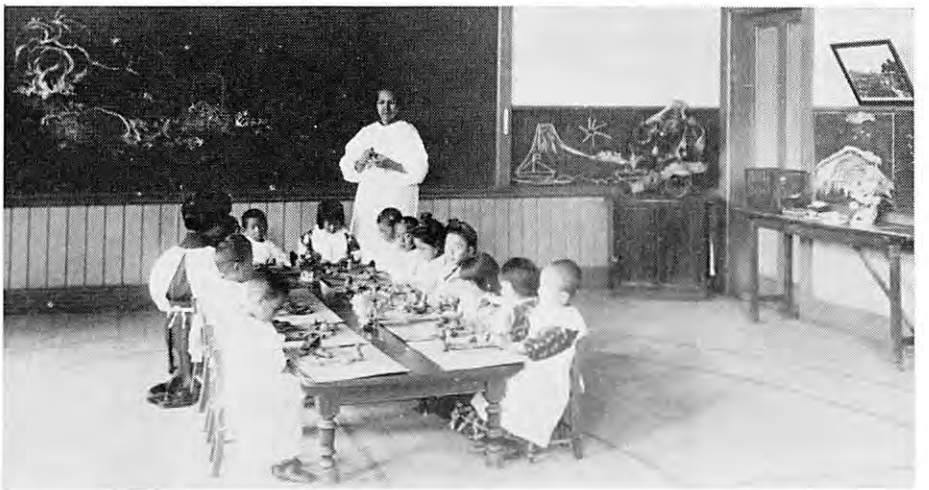
自然観察　「あらゆる天然，実物に接して実際の境遇を作り，広く知識を宇内に求めて」授業は展開した。



校庭　豊明館前築山付近，ブランコ，はしご，遊動円木があり，小さな池がかたわらにはあった。

附属豊明幼稚園

園庭　明治44年，閉鎖した曙寮に隣接して移転。芝生，築山，花壇など，恵まれた自然環境の中にあった。



教室　モンテッソリー式の保育法を取り入れ，積木部屋，粘土部屋と，教室別に先進的な保育が行われていた。

保育　ひな祭，端午の節句，お月見……四季おりおりの行事がとり入れられ，豊かでのびやかな保育がつづいた。

故郷の泉山　成瀬先生の心のふるさとでもあったのか，その名をとり泉山と号された。

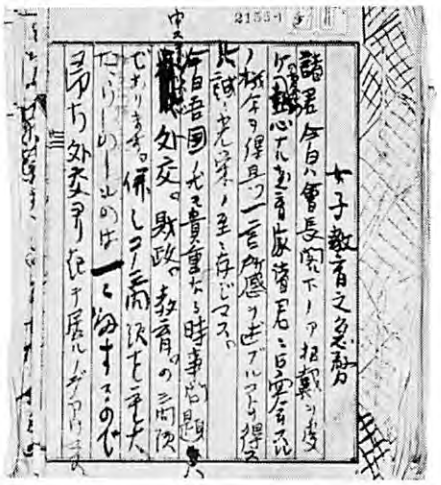
結婚当時の先生ご夫妻

若き日の先生
沢山保羅氏との親交から，受洗されたころの先生であろうか。

2　成瀬仁蔵先生を支えた人々

創立者成瀬仁蔵先生は長州藩支藩の藩士成瀬小左衛門、同歌子の長男として、一八五八年（安政五年）六月二十三日、山口宰判吉敷村（現在の山口市吉敷）に生れた。家は代々藩の祐筆をつとめ、漢学の素養深く、教育家の家柄でもあった。長ずるにおよび、藩学憲章館に学び、家塾を助けた。家庭的には恵まれず、六歳の時祖母、母を失い、継母を迎えた。姉久子が結婚後、十五歳にして、弟晋を、続いて父を失った。先生は若くして、「生と死」の問題に直面せられたのである。

一八七五年（明治八年）山口県教員養成所に入学、一年後卒業して小学校長となった。その頃同じ吉敷藩の出身者で、熱烈なキリスト教伝道者として教会自給論を唱えて著名であった、沢山保羅に会い、その信仰にいたく動かされ、出郷し、大阪浪花教会（組合教会派）において受洗した。同教会と梅本教会の提携によって設立された、梅花女学校（現在の梅花女子大学の前身）の主任教師となり、女子教育者としての第一歩をふみ出された。儒教的な女性観の中で成長された先生は、キ



明治23年，「吾天職」は「女子教導者ナリ，創業者ナリ」と記した先生は，24年「女大学ヲ設立スルコト」とはっきり記され，盟友麻↗

↘生正蔵を得て『女子教育』出版へと歩きだされていった。菊版254頁。

創立事務所日誌　多くの名士を尋ね歩かれたあとが，そこにはある。

リスト教の信仰によって神の愛に、聖書に、新しい人間観を見出し、宣教師の婦人達の献身的な姿に動かされ、日本の女子教育の向上を願って、活動を始められたのである。

一八七九年、同じ教会に属する士族出身の服部満寿枝と結婚。先生二十歳、夫人は十八歳であった。後、最初の著作『婦女子の職務』を出版され、教職を辞して、牧師となり、郡山・新潟などにおいて、熱烈なキリスト教の伝道活動を行った。新潟では、新潟女学校を興し、男子校の北越学館の創設にも加わった。

一八九〇年(明治二十三年)、飛躍を志して米国にわたり、先ずアンドヴァー神学校に、ついでクラーク大学に学んだ。宗教学・社会学・教育学などを学びつつ、日本に女子高等教育機関を設置するため、女子教育の研究に次第に没頭していった。大学など教育機関はいうまでもなく、盲唖教育など心身障害者の諸施設に至るまで、広く教育の実状を視察、一八九四年（明治二十七年）一月に帰国した。

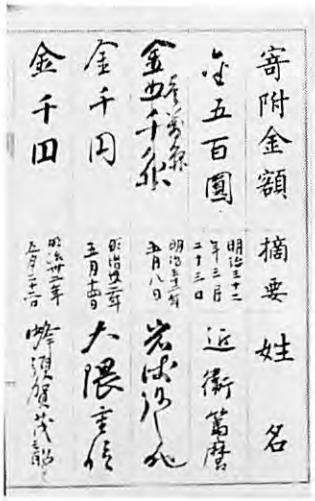
また、宗教的にも次第にキリスト教の信仰から脱していったようである。

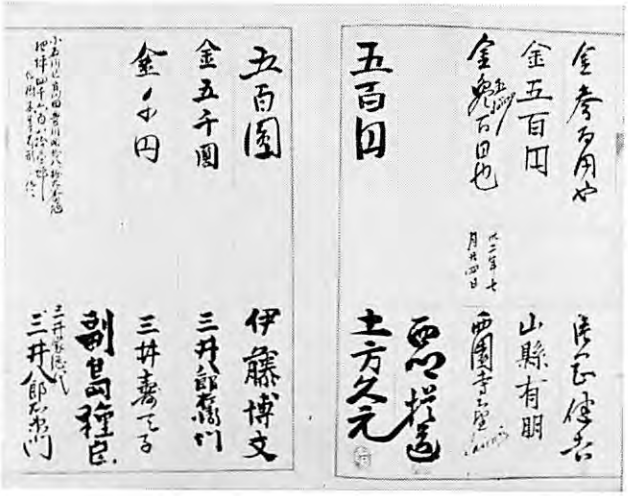
帰国後、懇望されて、梅花女学校校長となり、一時はここに大学設立を構想したが、当

日本女子大学校寄附金簿

明治30年3月24日，第一回発起人回が開かれた。この頃の先生のメモには，寄付金集めの苦労を偲ばせる計算書がめっきり多い。

「時勢の悪しき為め追々遷延し困難を増し天下ニ対シ学生ニ対シ友人ニ対シ気の毒千万……小生の責任のみ重し」当時の手紙より……。





明治三十三年、三井家から敷地の提供があり、設立の曙光がさしこんできた。目白台五千五百余坪―女子大学発祥の地となったのである。

初の計画の通り、新しく大学を興すこととし、新潟以来の友人であり同志社の教員であった麻生正蔵の助けを得て『女子教育』を出版、世論を喚起し、一八九六年（明治二十九年）より本格的な女子大学設立運動に入った。

最初は先生の身近なところから活動を始め、同郷の大阪府知事内海忠勝、梅花女学校の父兄である大和の豪農土倉庄三郎らの紹介によって、大阪の実業家広岡浅子、大和出身の弁護士北畠治房などに援助を求め、次第に計画をすすめていった。

援助者の助言もあり、中央政界の賛成を求めるべく、まず、伊藤博文を訪問し、つづいて近衛篤麿、西園寺公望、島田三郎、大隈重信、渋沢栄一、森村市左衛門、三井三郎助、住友吉左衛門などなど、政界、財界の多くの人々をくり返し訪問し、その意あるところを述べた。勿論、当時として女子高等教育機関の設置など、理解を得ることは容易でなく、誤解をうけ、非難されることも多かったが、信念と熱意をもって、あたっていったのである。

一八九六年（明治二十九年）『日本女子大学校設立之趣旨』を作成、翌年三月、第一回発起人会と第一回創立披露会をようやく開催す

……普通教育に於てもその影響する所頓に活気を添へ来りしと雖も独り女子教育に至りてはそれが発達普及の策を…

当時の新聞の切り抜き　先生の遺品の中から発見されたスクラップブックに，はられていた切り抜き。

日本女子大學校設立之趣旨

日本女子大學校設立之趣旨

明治二十七八年の役は宇内を震蕩し帝國をして世界強國の一たるの實を顯はさしめたりと雖も是れ單に帝國が世界の舞臺に立て天の使命を演ずるの開幕たるに過ぎざるのみ此の美麗なる山河と高貴なる歴史とを有する帝國がその任務を完ふするの前途尚ほ遼遠にして進行すべき事業打續すべき國利勘しとせず長くも上聖天子戰後の國家經營問題として國防殖産及び教育の三大事業に精念を勞させ給ひ億兆赤聖意を奉體し勉勵精進日も足らざるの秋あり普通教育に於てもその影響する所頓に活気を添へ来りしと雖も独り女子教育に至りてはそれが發達普及の策を講じ以て上

（五月十一日紙上）

◎女子大學設立地　については發起中にも二説あり大隈伯岩崎男等は主として大阪説を唱へ澁澤氏等は東京説を主張し未だ何れとも決せざる由、因に記す同校設立に對する寄附者の重なるものは岩崎彌之助氏一萬圓、同久彌氏五千圓、大隈伯五千圓、其他二三千圓づゝのものなりと

（五月十一日紙上）

◎女子大學設立寄附金募集（東京電話）　日本女子大學の發起者は世間不景氣の爲め寄附金募集を見合せ居たるが今回愈〻着手する事となり一昨日帝國ホテルに於て大隈、岩崎、澁澤、小鞠、土倉其他の委員相會し委員丈の出金額を取極めたれば其他多少に關らず募金に着手する都合なりといふ

（五月十日紙上）

◎大隈伯其事業に係る女子大學校の件に就き目下九州漫遊中の伊藤侯と當地に會して懇談を遂げんとて住友、鴻池二氏に托して伊藤侯の出先に其都合を尋ねしめたりと而して伯自ら曰く伊藤が承諾して愈〻相會する日には又〻一種の媒介者が驟立つて有らう、されど女子大學の設立は天下公共の大事業なり一部の媒介家に其目的を阻害さるゝは遺憾なりと

る段階となった。五月には大阪で、十月には神戸で、同様な披露の演説会が開かれた。

しかし日清戦争後の世情は、政界、財界において事多端にして不振であり、高等教育の構想は、具体化しなかった。だが、着手した活動を中止することは出来ない。創立委員の奨励により、時勢の如何を問わず、ともかく計画を進めることとし、資金の収集に奔走された。その間、建設地を、先生の縁故の深い関西から、東京に移すことが決定され、三井家から目白台の五千五百余坪の地（現在地）を寄付され、ここに女子大学校を開設することが本ぎまりとなったのである。

こうして五十八名の発起人、三十二名の創立委員、七百余名の賛助員の、強力な援助と奨励、五十三名の教職員の協力によって、日本の女子教育の向上を期して、日本女子大学校が誕生した。

開校後も、賛助の人々から、華山寮（樺山資紀氏）、豊明館、豊明寮（森村市左衛門氏）、茶室（松浦詮氏）、軽井沢三泉寮（三井三郎助氏）、香雪化学館（藤田伝三郎氏）、晩香寮（渋沢栄一氏）などの寄贈や貸与をはじめ、度々の寄付金や寄贈品をうけ、女子教育普及のための講演旅行にも参加されるなど、様々の形

土倉　庄三郎

西園寺　公望

大隈　重信

近衛　篤麿

広岡　浅子

森村　市左衛門

内海　忠勝

北畠　治房

三井　三郎助

で援助をうけている。

こうした協力の背景には、多彩な顔ぶれの評議員を中心に、東京周辺の教育家を集めての教育研究会「毎月会」（一九〇六年、明治三十九年七月より）の開催など、本校を中心とする教育や思想の交流活動があったことも、みのがせない。

評議員

近衛　篤麿氏
設立計画発表と同時に、東京に於ける第一の賛成者となり、創立委員として助力された。

大隈　重信氏
早稲田大学を設立された氏は、明治29年、紹介状を手に訪問された成瀬先生に、援助を快諾。創立委員長として援助された。

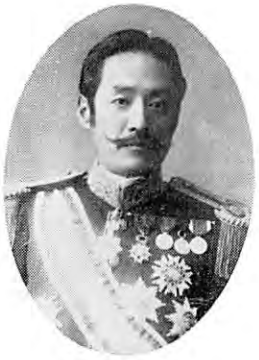
西園寺　公望氏
明治29年、女子大学設立の具体案を聞くや、趣旨に賛同。諸方に紹介の労をとられ、設立に大きく力を尽された。

土倉　庄三郎氏
先進的な教育論をもち、梅花女学校時代、成瀬先生と知り合う。援助資金五千円を寄付、その計画を力づけられる。

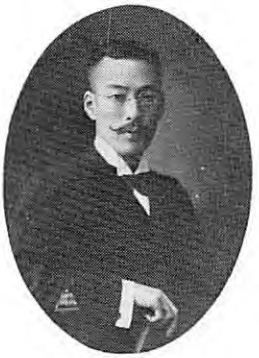
森村　市左衛門氏
有力な発起人で、明治37年寄付された三万五千円を基に教育学部、小学校、幼稚園併置される。

三井　三郎助氏
目白台の所有地五千五百坪を寄贈される。軽井沢三泉寮も氏の提供による。

広岡　浅子氏
創立資金五千円を寄付、東奔西走、諸方の援助

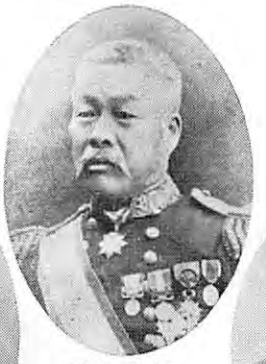

岩倉　具定

岩崎　弥之助


住友　吉左衛門

児島　惟謙

久保田　譲


樺山　資紀

村山　龍平

岡部　長職

蜂須賀　茂韶

を求められる。関西財界の女傑とうたわれる。

北畠　治房氏
広岡夫人の紹介で、設立計画発表と同時に強力な賛成者となられる。

内海　忠勝氏
当時大阪府知事、成瀬先生と同郷のよしみで最初の発起人として先生を力づけられる。

児島　惟謙氏
設立計画発表と同時に賛成。発起人、創立委員評議員として尽力される。

住友　吉左衛門氏
西園寺氏の紹介で賛同、創立委員、会計監督として創立に、尽される。

岩崎　弥之助氏
女子教育に理解深く、発起人、創立委員、監事として尽力される。

岩倉　具定氏
創立発起人、評議員として尽力される。

樺山　資紀氏
邸内の一部を譲渡される（本校では樺山村と命名）。創立委員、評議員。

久保田　譲氏
創立委員。成瀬先生重体の折、三綱領の執筆を先生に提言される。

蜂須賀　茂韶氏
発起人、創立委員、評議員として尽力される。

岡部　長職氏
創立委員、評議員として助力される。夫人も桜楓会補助会員として協力される。

村山　龍平氏
関西方面の有力者に紹介の労を取られ、陰に陽に女子教育発展の大目的のために尽力される。

大倉　孫兵衛氏
評議員として尽力される。曙寮は夫人が匿名で

広瀬　実栄

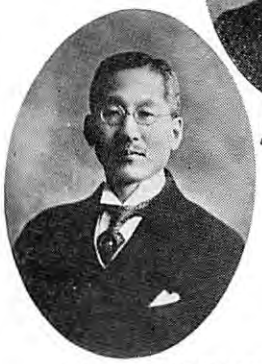
広海　二三郎

村井　吉兵衛

大倉　孫兵衛

奥田　義人

和田　豊治


森村　市左衛門(開作)

藤田　平太郎

井上　準之助

久原　房之助

寄贈された寮舎。

村井　吉兵衛氏
評議員として活躍される。学生によく講演され親しまれる。

広海　二三郎氏
発起人、評議員として助力される。

広瀬　実栄氏
森村翁と共に第一次拡張時に尽力され、夫人も桜楓会のために協力される。

和田　豊治氏
大正11年評議員に。女子総合大学設立のために尽力される。

奥田　義人氏
明治36年～大正2年に至る十年間、法制学を講義され、大正6年、東京府知事時代評議員に。

久原　房之助氏
大正六年評議員に就任、昭和10年まで女子総合大学の実現に尽力される。

井上　準之助氏
大正14年、女子総合大学実現を前に、大蔵大臣の氏を評議員に迎え、経済的助力を頂く。

藤田　平太郎氏
同時期、評議員に。昭和15年まで尽力される。

森村　市左衛門（開作）氏
先代市左衛門氏の死後、評議員に、熱心な理解者として尽力される。

江口　定條氏
大正11年評議員に。女子総合大学実現のために力を尽される。

阪谷　芳郎氏
評議員、理事として教育機構並に財政に関し渋沢栄一氏に代りこれを処理、指導され、西生田移転事業についても力を尽される。

古河　虎之助氏
大正15年評議員に。昭和15年まで女子総合大学実現に尽力される。

渡辺　英一

服部　他之助

塘　茂太郎

創立時，精神面。勉学面において，生徒に大きな影響を与え，親しまれていた。

三井　高修

阪谷　芳郎

三井　八郎衛門

松浦　政泰

江口　定条

古河　虎之助

三井　八郎衛門氏
創立発起人。三井家総代として日本女子大学校の東京開校に際し、多大の援助を与えられた。

三井　高修氏
三郎助氏亡きあと、評議員、理事として就任。軽井沢成瀬先生像を製作される。

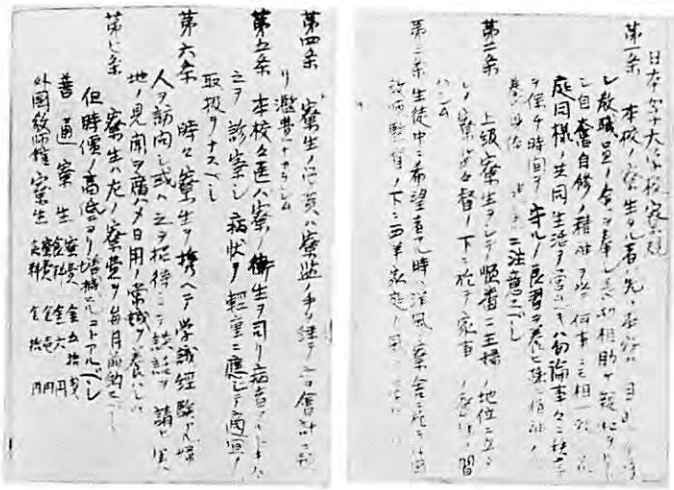
松浦　政泰氏
創立当初から教授に就任、校長、学監を助けて本学発展のために尽す。英文学部主任、高等女学校主事。学生の信望が厚かった。

3　寮生活と三泉寮の開寮

本校の寮舎は、単に寄宿するところではなく、教育実践の場として出発した。

成瀬仁蔵先生は在米中、宣教師レヴィット氏方に寄寓して、夫人を中心としたあたたかな家庭の生活に触発され、帰国後出版した『女子教育』の中で、寄宿舎論を展開し、家族的

創立当時の寮舎　明治34年開校と同時に建てられた三棟八寮の寮舎群の一つ。成瀬先生宅に隣接した内寮。その後内寮は現寮地区に移り，昭和３年姿を消す。



寮規　明治33年11月，東京都知事宛提出の「日本女子大学校設置許可願」の文書として，「校規」とともに提出されたもの。

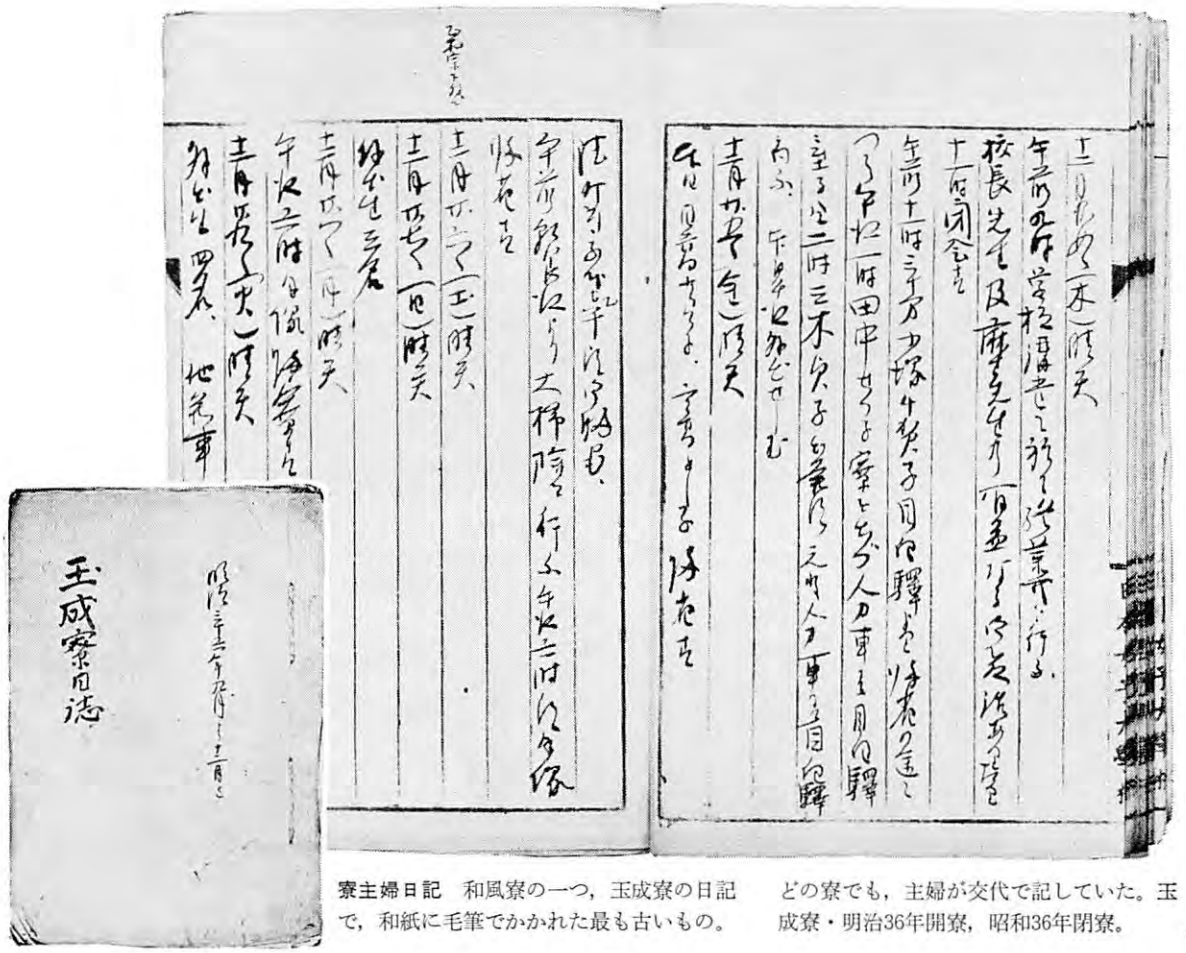
寮舎を構想、日本女子大学校の寮舎に実際化した。

各寮は一名の寮監、二十名の寮生、一名の補助員（女）で構成され、大体の寮規に従うものの運用は各寮の自律・自動にまかせられた。一寮に二人ずつが主婦となり、主として寮の経済から献立をたて、整理、衛生、体育、風儀、交際に至るまでの総てを監督し、任期は一～二か月であった。他の寮生もそれぞれの係に分属して責任を果した。園芸係や文芸係もあり、寮生活をなごませると共に、交際会は互に寮生を招待したり、時には学校関係者も迎え入れて、経験をつませるなど、さまざまの試みがなされていた。

寮舎は本学教育の特色でもあり、学成らずんばという学生の意識もあって、夏期休暇中も残留する者が多く、創立後三年位から有志が集って一つの寮を形成するようになった。

それが夏期の修養寮となり、家政研究の場ともなった。寮舎が教育実践の一つの核となることで、東京在住の者も入寮を希望するようになっていった。

ここに三泉寮の誕生がある。成瀬先生は創立以来の過労が重なり、その静養に一九〇四年（明治三十七年）と翌年の夏、信州軽井沢

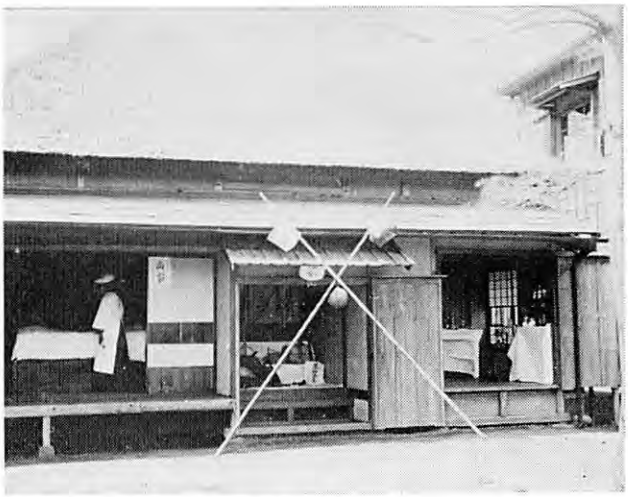


寮主婦日記　和風寮の一つ，玉成寮の日記で，和紙に毛筆でかかれた最も古いもの。どの寮でも，主婦が交代で記していた。玉成寮・明治36年開寮，昭和36年閉寮。

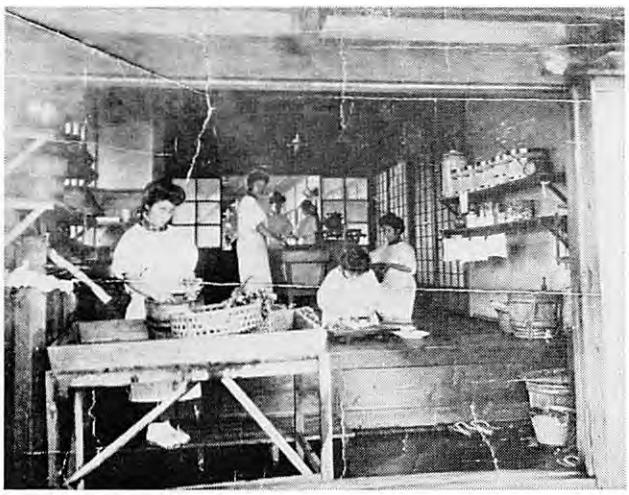
の三井家別邸に滞在されたが、米国の夏期学校の例も併せ、夏期寮を静寂な軽井沢で開催することが出来たらと希望を洩らされた。これに賛同して、三井三郎助氏は別邸の敷地内に一棟の寮舎を建て、提供されたのである。

一九〇六年（明治三十九年）夏、当時の三年生有志は、主婦係など係組織をつくり、それぞれに準備を整えて、初めての軽井沢へ向った。三泉寮と命名された寮は高原の静澄な大自然に擁せられ、小鳥の多い、時にはリスの遊ぶ、静寂な地にあった。寮生は自然観察、読書、瞑想、思考に集中し、互に人格的向上をめざして寮生活を送った。

この年以来、毎夏三年生（一九一七年以降は三、四年生）が前期・後期にわかれ、二週間ないし三週間の予定で寮生活を送ることとなった。年と共に生活の研究、実習よりは、自らの生命の意味を問い、今後の生き方を模索するための精神的、求道的な寮生活の色彩を帯びた。ここに臨む学生は、あらかじめ校長の訓話を受け、相応の心構えと準備をもって三泉寮につどい、教員と生徒、あるいは友人との間にあらためて人格的接触をはかり、その後の学生生活の活力ともしたのであった。

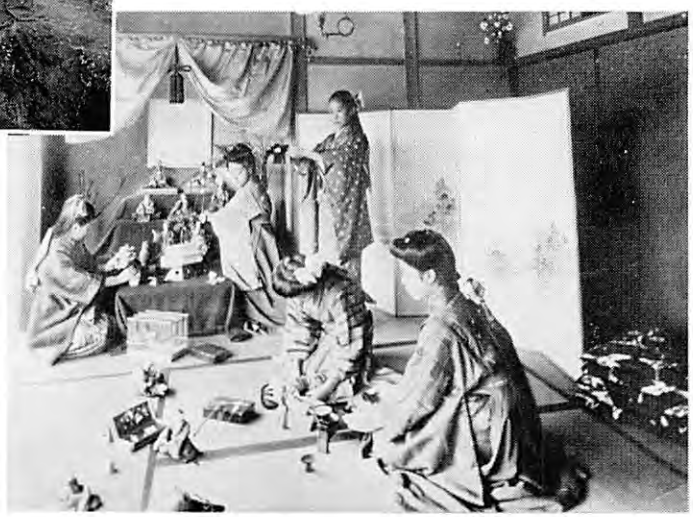


寮病室　明治39年，現在の寮舎地区雑司ヶ谷に建てられた。病人がでると校医が診察した。



明治44年頃の和風寮　炊事場　各寮とも一応の標準に従い独自の献立をたて，材料を寮舎共同購買会から購入，寮生が交代で炊事した。

寮内の小川　現在の学寮の正門前を流れる，いささ川。メダカが泳ぎ，のちに浄平橋と名づけられた石橋がかかっていた。現在は暗きよ。



ひな祭　創立当初は文芸係，後に趣味係が中心となって行われた年中行事の一つ。七夕祭，月見の会，忘年会，豆まき……寮生相互の親交を深めていた。

寮の草取り　寮生活に欠かせない大切な共同作業が，毎朝の掃除だった。時おりの大掃除，草取りも連体感を強め，勤労の喜びとなった。整理係の責任で行われていた。

ある日の寮舎——広瀬さき（5回・家）談

寮では、火事の練習は盛んで、毎月ありました。審判に回るほうの寮舎と、練習の寮舎があって、秘密裡にいつ火事をやるということをきめて、ジャンジャン鐘の合図で始めるのです。まず火元を確める。それをやらないと一点引かれるというふうで。暗闇にいくつもの提灯が出て、ものものしくやるのです。

一度は、成瀬先生が本当の火事かと思われ、サーベルを持って金山にかけつけられ、大笑いになったこともございました。

玉成寮

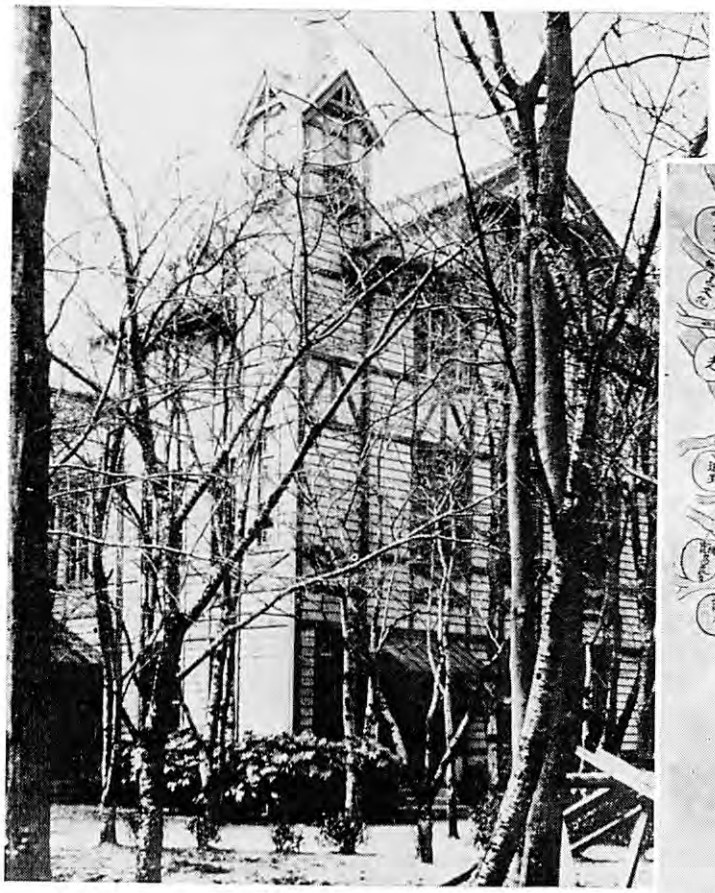
三泉寮への道　から松の並木道に素朴な「三泉寮」の標札が見える，往時の寮入口。静かな美しい大自然の中で，師の教えを仰ぎ，友と語らいながら「如何に生きるか」を思案し，瞑想の日々を過ごした寮。本学建学の精神が投影した場所である。

昭和54年建物を改築，完成後もひきつづき，学生，生徒，桜楓会員のための夏季寮として，重要な役割を果している。

開寮　明治39年８月27日。成瀬校長揮毫の「三泉寮」の額が掲げられ，校長，三井三郎助夫妻，１回生４年生等が参集。

三泉寮カテージ　後方に愛宕山，寮の象徴である大もみの木のある丘のふもと，木立に囲まれた三泉寮のカテージ。

表玄関　大正11年増築され玄関近くに主婦室。応接室等，2階に50畳敷の講堂がある。昭和53年解体まで，寮の中心であった。



桜楓館　明治38年９月25日開館。木造三階建，一階に実業部，二階は事務室，客間，研究室，編集室，三階に地方会員のための宿泊室があった。

桜楓樹　明治37年１月，成瀬校長の書き表した桜楓会の活動を示す，理想樹。

4　桜楓会の成立と活動

日本女子大学校の第一回生は入学時より、校長をはじめ多くの人々の熱意あふれる指導の下に、本校の教育精神を生かした校風の樹立に努力したが、卒業後も生涯にわたって自発的な活動と向上を願って、同窓会組織をつくることとした。

三年次の終りに相談会を開いてその組織を桜楓会と名づけることにし、以後、度々の会を重ねて、目的や組織を検討していった。

一九〇四年（明治三十七年）第一回生の卒業を迎える正月に、成瀬仁蔵校長は桜楓樹の構想を示してその理想と使命を説いた。日本女子大学校、社会、世界的潮流に会員の研究と協力が加わって、桜楓会という活動が大きく伸び、広がる状況が描かれている。

同年四月十日、第一回の卒業式の翌日、発会式が行われた。一般の同窓会とは質を異にする、強力な活動体が生れたといえよう。

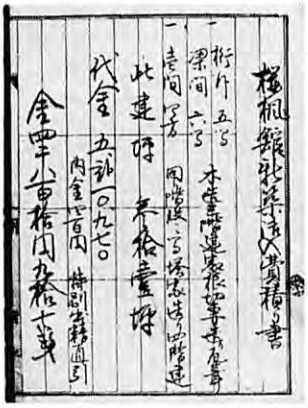
母校内に本部があり、支部は九州、広島、大阪、名古屋、長野、仙台、山形、北海道におかれた。この連絡紙として『家庭週報』を発刊した。事業は家庭部、教育部、社会部の三つにわかれ、家庭部は家庭改良を、教育部

園芸部　「各寮に花園を割当て，学校の花園を各学級に割り当てて毎日交代に世話」をしていた。鉢植え，果樹の世話もしていたらしい。

牧畜部　独立自営，実地経験の実をあげるため発足した実業部の一部，牝牛を飼い乳をしぼり販売。養鶏，養蜂も計画されていた。

バザー　母校事業発展のための募金集めに，よく行われた。第一回は明治40年４月，売上げは図書購入費として母校に寄付された。

家庭週報　明治37年6月25日発刊，女性の手で企画，編集，出版されたものとして，あるいは最初のものか。



桜楓会館の新築見積書

花もみち　明治38年5月14日発行，学報，週報の「足らざるを補」うために発行された。A5判。

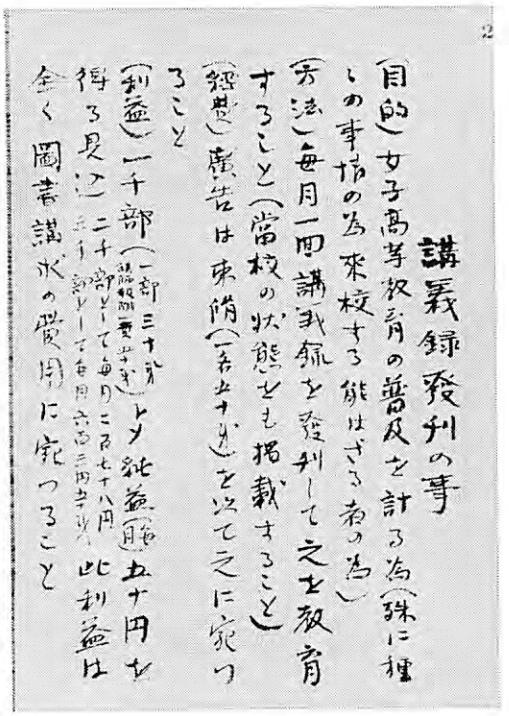
は教育問題をとりあげ、社会部は実業部活動を行った。実業部は経済的品性の陶冶と組織力、創造力を養い、奉仕活動の精神を身につけるものとして重視された。

桜楓会の使命感に燃えた活動をみて、三井寿天子(三郎助夫人)氏は桜楓会館の建設を申し出られ、木造三階建（一階は実業部、二階は主として事務室、三階は宿泊室）が翌年九月に完成、活動がより容易となった。さらに広岡浅子氏の発議で、創立委員の夫人達により桜楓会補助団が、翌年五月に成立した。

桜楓会の活動は、母校と密接な関係をもっているので、母校の発展のための事業を第一に、募金運動をはじめ、バザー、文芸会、講習会、実業部、通信教育など、各方面に活動を展開した。

募金運動はその時期時期の母校の事業に対応して行われ、第一回のバザーは、豊明図書館の充実をはかるために、母校生徒の協力も得て、一九〇七年(明治四十年)四月、三日間にわたって行われた。同時に文芸会が開かれ、四内親王、各宮妃をも迎え華やかに行われた。この時の記録は『三つの泉』と題して、桜楓会略史をつけて発刊されている。

このバザーの出品準備の際に行った技術講


講義録發刊の事

(目的)女子高等教育の普及を計る為(殊に種々の事情の為来校する能はざる者の為)

(方法)毎月一回講義録を發刊して之を教育すること(當校の状態をも掲載すること)

(經費)廣告は東京(一名五十銭)を以て之に充つること

(利益)一千部(一部三十銭)トシ純益(毎月)五十円を得る見込(二千部トシテ毎月ニ百七十八円五十銭トシテ毎月六百三円半収入)此利益は全く圖書講求の費用に充つること

女子大学講義録　大学拡張運動の一つとして，桜楓会が日本女子大学通信教育会を設け，2か月に1冊発行。2か年で卒業の，通信教育用冊子。明治42年4月5日，第一冊めが発行された。会費月50銭。第一回申込者6762名，全修了者1906名であった。

習会が好評であったのを契機として、英語を加えて、以後毎年夏期講習会を開くようになった。当時は講習会など稀であったので、本学や桜楓会員の紹介で多くの人々が受講した。実業部は学内の者の経済に資することが多く、通信教育は本校発行の『女子大学講義録』の編集、発送など、運用については桜楓会が協力、その機関誌『家庭』の編集発行も行った。

桜楓会の名は――

「桜の花の匂ふ如き心に紅葉の美しい色を加へ、更に、行の実をならせて三つの特色、真善美を表徴しよう」と、成瀬先生は卒業生の同窓会を桜楓会と名づけた。

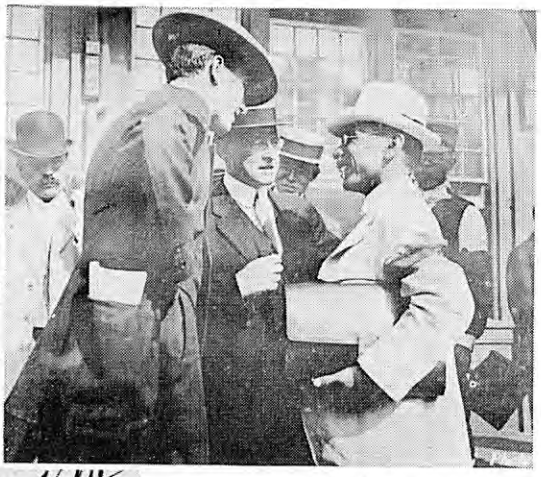
第一回総会は明治三十七年四月十日、第一回生による一年有余の準備期間を置いての発足だった。

「会員の交情、知識の交換、一致団結して事に当る美風の養成、本校事業の進歩発達を助成する」

――規約二条――

大正元年11月19日
夜2時認
成瀬生

……御報告申上
度事は沢山有之候へ共何分当
国に於る人々へ義理を欠かぬ位
の事も六ケ敷次第何レ帰朝の上…



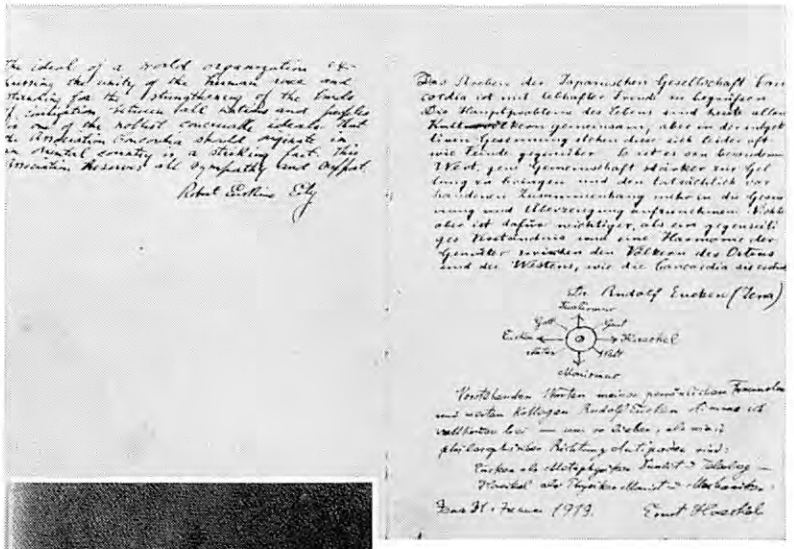
大正元年9月26日，ロサンゼルス到着の成瀬先生。明治天皇の喪に服されて，腕には喪章が……いかにも律気な先生らしい。

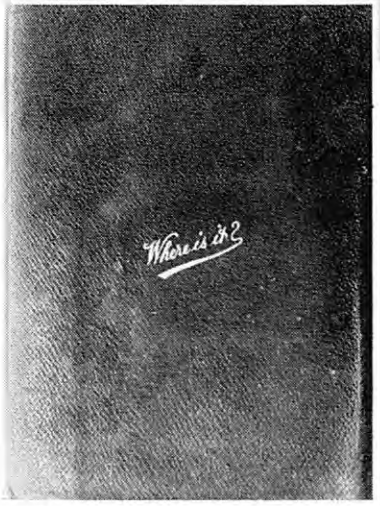
第二章　大正前期の学園

1　成瀬仁蔵先生の外遊

創立十周年を迎えて一応の教育基礎が固まった、一九一二年（大正元年）八月、成瀬仁蔵先生は外遊の旅に立たれた。外遊の目的は二つあった。一つは欧米の女子教育の実状の視察であり、第二は帰一協会の代表者として、著名な人々の賛同を求めることであった。

帰一協会は同年六月に設立されたばかりであるが、その中心となっていたのは成瀬先生自身であった。その設立理念の発芽は、新潟在住時代であり、アメリカ留学時代にほぼ明確になってきたとみられるが、その考え方の基本は、いかなる宗教、思想も、一つの調和に帰するというにあった。特に第一次世界大戦前後の複雑な世界状勢は、国家、社会において、対立、分裂、矛盾をはらんでおり、この時こそ、総合融和を求める、宗教的思想運動の必要性があると認識し、その活動を始められたのである。帰一協会は渋沢栄一・姉崎





帰一協会署名ノート　欧米旅行中，著名人にその運動についての感想を求められ，ノートへの記入をこわれた。
感想記入者　162名

近年，このノートの存在が再評価され，閲覧を申し込まれる各国研究者も多い。

帰一協会設立の辞

「頭脳も発達し眼界も広くなった今日に於て見れば，違った宗教は決して矛盾しては居らぬ。真相に於て一致を発見することはむずかしくない」新しい，宗教観の芽ばえであった。

帰一協会趣旨，意見書，並に規約

正治・浮田和民・森村市左衛門・成瀬仁蔵を幹事とし、井上哲次郎をはじめ三十九名の知識人を会員として出発した。毎月例会を開き、時に国内外の名士を迎えて、思想の交換を行い、同志を機会あるごとに欧米に送り、その趣旨を広めていた。

成瀬先生は欧米巡遊に際し、各国の一流の宗教家、学者、教育者、実業家、それも多くは初対面の人々を訪問し、百七十余人の賛同者を得、感話と署名を得て、翌年三月帰朝した。その間、各地で講演を行うなどの活動も重ね、アメリカにおいては米国帰一協会設立の具体的計画も成立した。

この帰一協会の精神は、女子教育と分離しているものではなく、成瀬先生の教育の内的な動力であり、生命であった。従って、女子大学の教育精神について語れば、自ら帰一協会にふれ、帰一協会について語るとき「わが日本女子大学校は今後世界の大学、世界の学者と相提携して進みたい。帰一協会として相提携すると同時に、大学が相提携して世界を救いたい」と述べ、帰一的精神の交流の場の一として、日本女子大学校を構想していた。

この運動はさらに国内にむけて、より宗教的色彩をもって「自助団」の結成となり、学

天心自念身心盈
天命感応創新生
天真爛漫自流露
天賦人格竟熟成

をその心として，成瀬先生は修養会を天心団と命名，校内会員は毎日曜日朝6時から修養会を開いた。

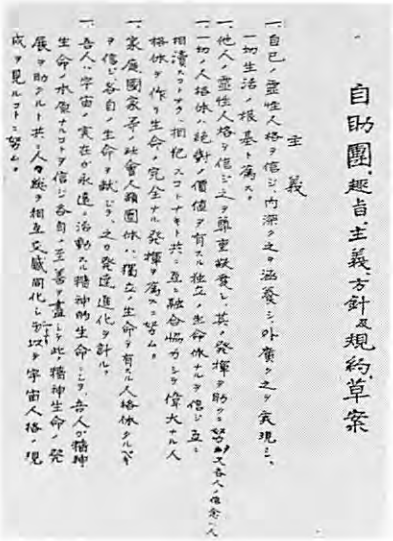
I live my daily life
according to the following
sentiments.

天心自念身心盈
The contemplating-way of love
is sweet and true.
Thereon we shall breathe only harmony-
and shall sing the song of life in
all its fulness and in all its good-
ness.

天命感應創新生
He (or she) desires to serve the Law, always
finds love's contemplation-way.
He (or she) who is pure in heart always
sees the divine vision.
Because the Law is supreamely just
and justice is the foundation of
Humanity, order, and life.

天真爛漫自流露
Not one holy day, but seven.
Worshiping, not at the call of a bell
But at the call of my Soul.
Singing, not at the Beat's Sway,
But to the rhythm in my heart.
Loving because I must.
Giving because I cannot keep.
Doing for the joy of it.

天賦人格竟熟成
It is for you and for me to build our
life structures
Upon the rock of our own
harmonious contemplation
Verily, it is the rock of enduring
Power and everlasting strength



自助團趣旨主義方針及規約草案

主義

一自己ノ靈性人格ヲ信ジ、内深ク之ヲ涵養シ、外廣ク之ヲ実現シ、一切生活ノ根基ト為ス。

一他人ノ靈性人格ヲ信ジ之ヲ尊重敬愛シ、其ノ発揮ヲ助ケ、[illegible]

一一切ノ人格体ハ絶對ノ價値ヲ有スル独立ノ生命体ナルヲ信ジ互ニ相濟ヘラルヲ、相他スコトナキト共ニ互ニ融合協力シテ偉大ナル人格体ヲ作リ生命ノ完全ナル発揮ヲ為ス事ヲ努ム。

一家庭、國家、[illegible]ノ社會人類團体ハ、獨立ノ生命ヲ有スル人格体ナルヲ信ジ各自ノ生命ヲ獻ジテ、之ノ発展進化ヲ計ル。

一吾人ハ宇宙ノ実在ガ永遠ニ活動ル精神的生命ニシテ、吾人ノ精神生命ノ本源ナルコトヲ信ジ各自ノ至善ヲ盡シテ此精神生命ノ発展ヲ助ケルト共ニ人々相互ノ感化ニ[illegible]ツテ宇宙人格ノ現成ヲ見ルコトニ努ム。

「吾人ハ宇宙の実在ガ永遠ニ活動スル精神的生命ニシテ，吾人ガ精神生命ノ本原ナルコトヲ信ジ」—自助団の主義より。

修養館　元寮舎であったが校内に移され，参考館となる。のちに修養館に改められ，宗教関係図書，瞑想室をもち精神的な支えの場となった。

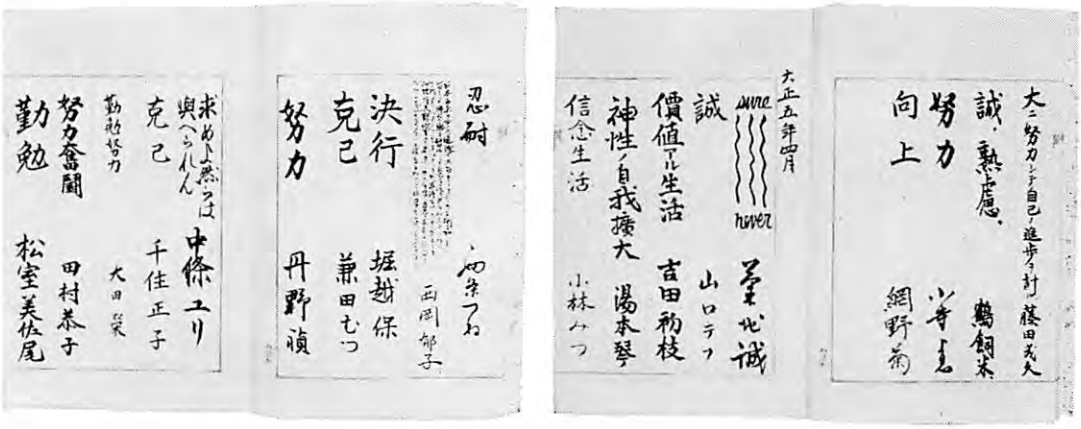
内においては、桜楓会員及び最上級生の一部を中心とした「天心団」の成立（一九一六年、大正五年九月）となった。先生は天心団の署名簿を作り、団員としての覚悟のできた者、一人一人に署名せしめ、かつ各人に白紙のノートを与え、自分自らの信仰と思索にもとづいて、書きつけねばやまぬものを書き記し、自らの生きた経典を作ることを求められた。その翌年には一つの徽章を作り、その精神を表示した。こうした精神修養の団体を核にして、学内の精神的雰囲気を作られようとしたのである。

同じ、一九一六年四月の新入生から、入学時に宣誓式をあげ、一人一人が宣誓の言葉を書くようになったのも、その精神教育活動の一端のあらわれであった。形をかえて、現在まで続いているが、入学に際して今後の生きる姿勢を問われて、新入生の書きつける宣誓の言葉は、それぞれの時代の若い人々の心を反映するものとなっている。

また折にふれて、信仰について、自己の信念形成について、将来の精神生活について、語ったり、書くことも求められ、進級の条件として提出することも続けられていった。

当時、「修養館」と命名された建物には、信

宣誓式　心を決めた者が一人一人署名して入団する，天心団のきまりが，宣誓式へと発展，入学時の行事となる。
――昭和3年の宣誓式風景

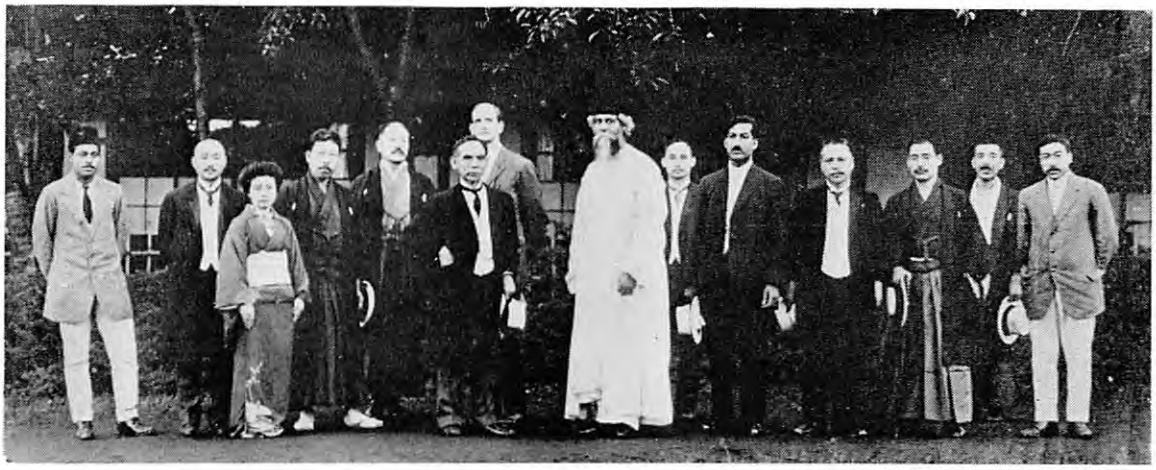


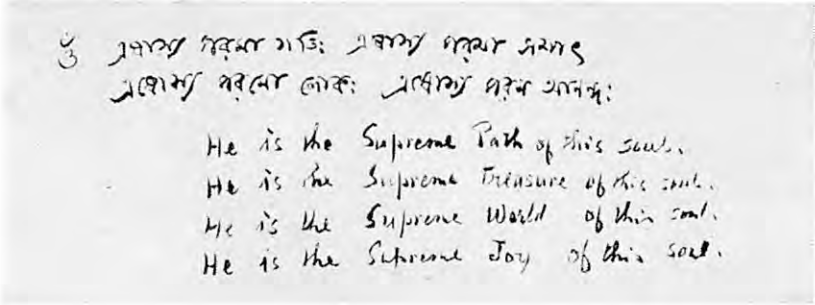
大正5年，はじめての宣誓式の署名。中条（宮本）百合子，網野きく，田村（大原）恭子，丹野（野町）てい……の名がみえる。

念涵養や宗教研究の場として、瞑想室、研究室、講話室があり、実践倫理に引用される、数々の思想や倫理などの著書を中心に、多くの図書が集められていた。

同じ年に、アジア人で初めてノーベル文学賞を得た、インドの詩人、ラビンドラナート・タゴールが来日したが、成瀬先生は、かねてタゴールの著書を読まれて、思想的に共鳴するところがあり、本学での講演を依頼された。日本女子大学校の講堂で、タゴールは講演と共に、他の場では行われなかった、自著『ギタンジャリ』の一節を朗読するなどされ、さらに七月には軽井沢三泉寮の夏季寮の招待に応じた。約一週間の滞在中、本学学生に瞑想を指導し、また瞑想を共にした。第一次世界大戦の戦火の渦まく欧州の状況と軽井沢の静澄な自然との対応は、タゴールを深く動かすものがあった。

「夏を此処に来て、心の修養に集中する年若い婦人方の群に加わって、不思議に私の心の中には共鳴の喜悦を覚える」「思うに、ここに於て結んだ諸子との霊の関係は、永遠無限に私の心に深い印象を与えるものとなるだろう」の言葉を残して、タゴールは去っていった。





ওঁ এষাস্য পরমা গতিঃ এষাস্য পরমা সম্পদ্
এষোঽস্য পরমো লোকঃ এষোঽস্য পরম আনন্দঃ

He is the Supreme Path of this soul.
He is the Supreme Treasure of this soul.
He is the Supreme World of this soul.
He is the Supreme Joy of this soul.

タゴールが大正5年来校した時本学に残した直筆の文字。サンスクリットをベンガル語に直した上の2行は4つの部分から成り，下の4行はその英訳。ウパニシャッド中の神への讃辞。

忘れ得ぬことは，タゴール翁との未明の瞑想会であり，それが大きく私の人生を支配していたのを痛感しています——14回生。

お帰りの前夜の晩さん会で，タゴール氏はインド国歌を自分で歌われ……私ども学生は君が代を歌い…14回生。写真は2回目の来校時。

創立十周年ごろの本校　五千坪の地所は一万七千坪に，
三百坪の建物は三千坪に，五百人の生徒は千三百名に…

① 幼稚園　② 寮
③ 豊明館　④ 桜楓館
⑤ 体操室　⑥ 高等女学校
⑦ 東教室　⑧ 香雪化学館
⑨～⑩ 寮　イ～ヘ 寮

自治生活計画表

「この自治生活によって自分の意見を述べることに慣れてきました。発表することは自分の頭の中の内容を明瞭に組み立てることで，現実社会生活に役だち……」14回生

2　新制度下の学園

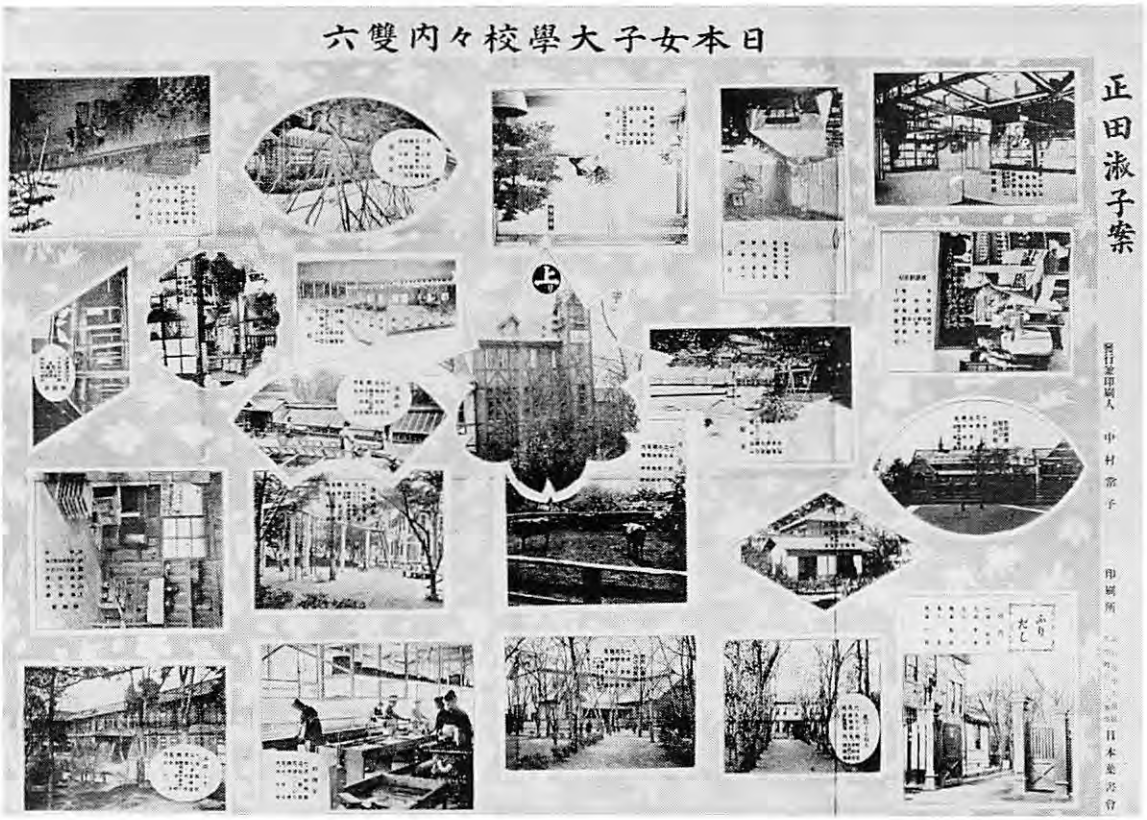
一九一七年（大正六年）は、日本女子大学校の歴史に一つの画期をもたらした。四月より学科編成が大幅に変更され、桜楓家政研究館が落成し、校旗が制定され、夏の軽井沢では成瀬校長の山上十回講義が行われたのである。

新しい学制によって、五年間募集が中止されていた文学部が国文学部として復活すると共に、かつての教育学部も編成がえして、師範家政学部が生まれた。

これら学部の新設を含め、この期の学制改革の主眼は、科目選択制度の大幅な採用である。すでに成瀬校長は、政府の教育調査会委員に選任された一九一三年頃から公にこの主張を述べ、『新時代の教育』の著書によって、総合的教育論を世に問うたが、その中でも選択制採用を主張している。

具体的には必修科目と選択科目にわかれ、必修科目はすべての学生が各学年を通じて取るべき全体必修科目と、指定した学年のみ必修である部分必修科目とにわかれていた。

全体必修科目は、本校教育の理念を知り、人格陶冶のための「実践倫理」と、自他の幸



学園双六　そのころの学園生活をしのばせる双六。正田淑子創案，桜楓会発行。

福の基礎となる身体の錬磨として位置づけられた「体育」の二つであった。部分必修は、一年生が心理学・国語・英語を、二年生は倫理学と英語、三年生は倫理学を取ることとなっている。

選択科目は1主専攻科目、2副専攻科目、3自由選択科目にわかれ、主専攻科目の決定が、学生の所属学部を決定することを意味した。

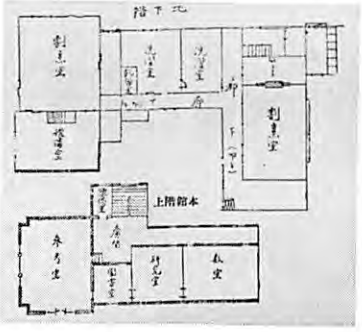
科目は文科系・理科系・実学科系の三科に分かれ、その各科には部がおかれ、各部にはいくつかの科目が分属している。

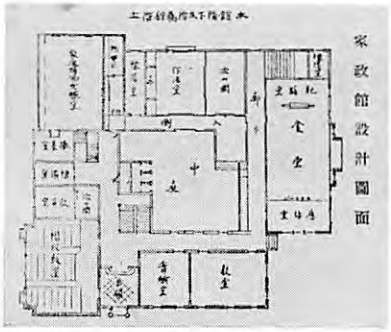
文科は、教育学部・哲学部・国文学部・英文学部・文学部・史学部・社会学部・美術部の八部がおかれたが、国文学部・英文学部のみに主、副専攻科目が開設され、順次広げていく計画であった。理科は数学部・理化学部・博物学部の三部とし、理化学部に副専攻科目のみをおいた。実学科は家政学部・師範家政学部・体育部・農芸部・商業部の五部をおき、当面は家政学部に主、副専攻科目を設置し、師範家政学部は特に、課程を規定して、科目を開設することとした。

同時にこの学制では、教授時間の縮小と修業年限の伸縮がはかられた。学生の側からい

桜楓家政研究館内部

桜楓家政研究館　ゴチック様式を加味した二階建。万一の火災をおそれ煉瓦造りの威容を誇っていたが……





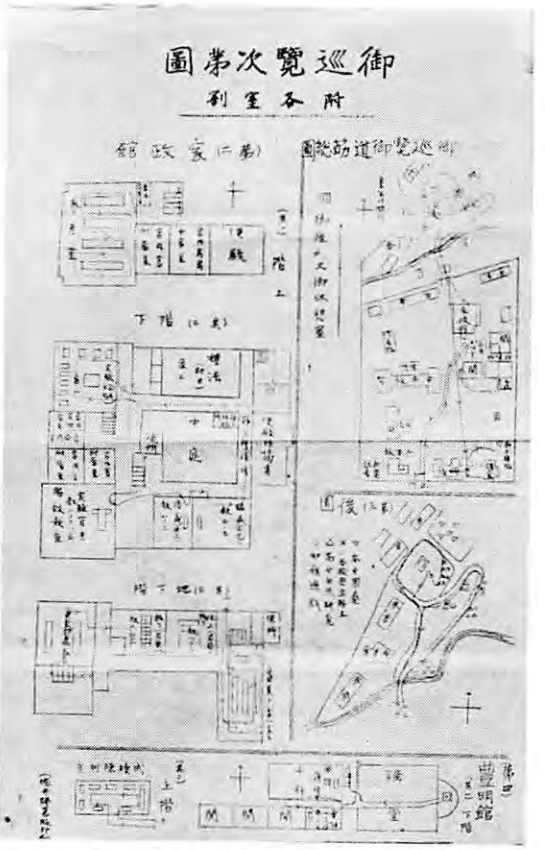
設計図　建築費総額六万円。そのうち四万五千円余は桜楓会員による，母校への愛情の結実だった。

えば、週十九時間から二十五時間の範囲で科目を選択し、自学自習を大幅に行うよう求められた。修業年限も通常は四年間の在学期間であるが、学力、体力共に優れた者は三年間でも卒業を許可することにした。

この選択制度の採用は、創立以来部分的にこれまでも行ってきたものを、組織的に徹底させたものであるが、その精神は、先生の宇宙の生命は悉く選択制度の下にあるという認識と、いかに選択するかを真に考えることは同時に信念を形成せしめることであり、選択制度は信念生活によってはじめて生きる制度であるという考えの上にたっていた。

新制度となった、四月六日、皇后（貞明皇后）の行啓があり、この行事にむけて校旗が制定され、建築をすすめていた桜楓家政研究館が落成した。

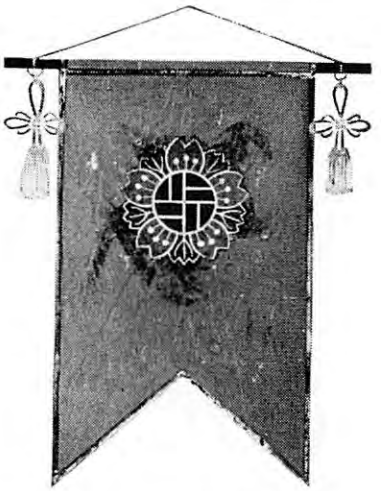
家政研究館は、教育調査会に、一九一五年（大正四年）付議された新大学令の中に、公私立大学が官立と同様認可され、女子にも大学教育が可能となることが含まれており、文字通り大学となることを希望していた本学にとって朗報であり、大学にふさわしい研究所又は研究機関の必要性が生じ、そのための建築であった。同時に創立十五周年の記念であり、



皇后陛下の行啓　大正六年四月五日，新築なった家政館をご休息所に校内をご巡覧。

大正天皇の御大典の記念建造物でもあった。家政研究館には、種々な実験室や参考室、研究室が設けられ、家政学研究の中心的役割を果すものであった。

夏の軽井沢三泉寮の十回にわたる山上講義は、成瀬先生の本学生徒に対する精神教育のクライマックスとなった講義である。本講義は、宗教性を基礎においた精神的自立の涵養を説いたものであり、講義を受けた者は、最上級生及びその指導者であったが、その波紋は大きく広がり、本校の精神教育の粋を示すものとして、小冊子とし、後々繰返し読まれ



——校旗の原案——

地は赤塩瀬、円金銀べた縫、中央の紋章は桜楓を示した銀である。皇后陛下の行啓に際して制定、新調された。図案は成瀬校長が考案し、井上秀、平野はま子が相談にあずかった。

桜と楓は、春秋の美を表わすと同時に春の生成、秋の収穫を意味し、地色の緋色は、剛、勇気、愛情、勝利を表わす。

金色の輪は、日輪である。

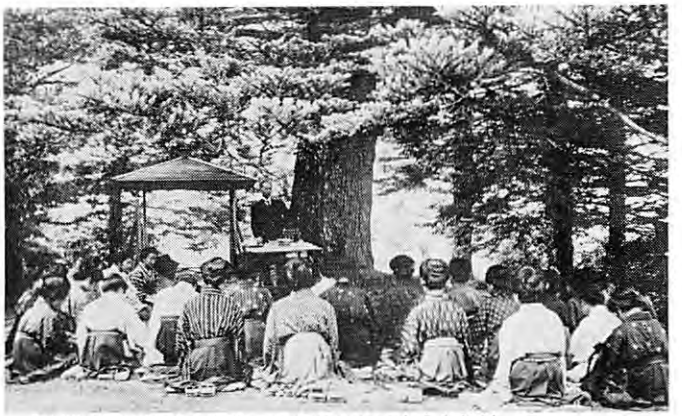
山響

軽井沢三泉寮
十五回生の歌

一、朗らかに明くる高原の朝
鳥も来なきてこの日を讃ふ
天が下なる森羅万象は
憂になげく蔭もなげなる

二、偉なるかな樅の喬木
汝いつの世にかここに生れし
幾春秋をここに耐へ来し
今ぞ我等が祈の木蔭

「実に精神的空気を造らんとの目的で山上に来た」……の一言で，山上十回講義ははじめられた。



「時間空間の障害を除き，目に見えない実在と接触」するために，大もみの木の下の講義はつづく。

各回の講義の終わりには，その内容にふさわしい詩が朗読され，会を一層もり上げていた。

――三泉寮の思い出――

「何といっても軽井沢で校長先生と共にした樅の木の下での修養会は、忘れられません、その時の写真を眺めては、にぶる自分の心にむち打ったものです」――13回生

「激しい雷雨の中、大樅の木の下で行われた最後の結論会、大きな鉄槌で打たれたような激しい心の脱皮、そしてその大きな苦しみの中から生まれた歓喜等、今でもありありと思い出します。」―23回生

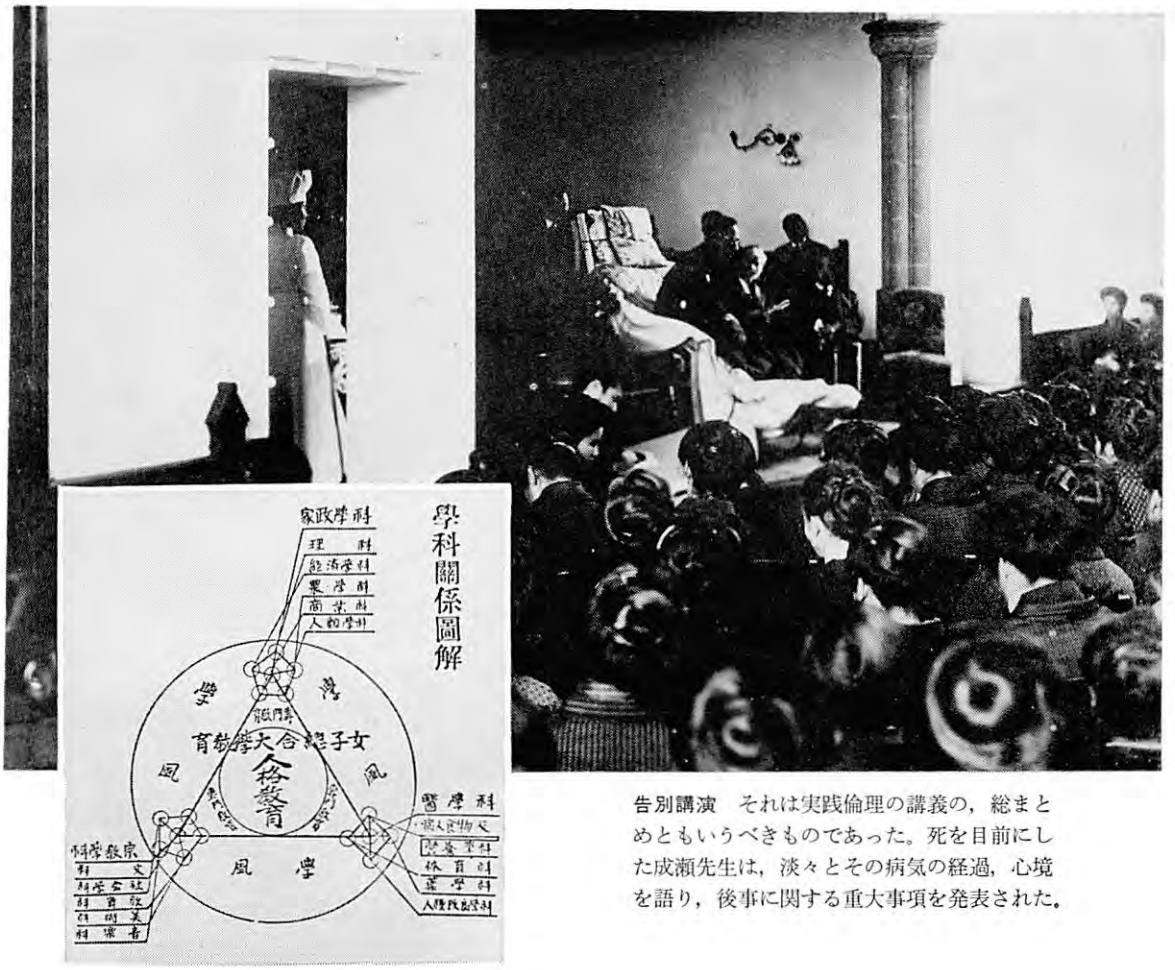
「軽井沢という大自然の中で、あの澄んだ空の美しさ、あの山上の大樅の木の下に円座して承った成瀬先生のお話はありがたかった。」――13回生

てきている。

総じてこの時期は、宗教心や精神性の陶冶が求められ、各自の人格形成への教育が、実践倫理を通して、自治生活や寮生活の中で、展開された。

自治生活は縦の会(学部)、横の会(学年)、級会、修養会、瞑想会、係の会などさまざまに設けられ、指導者の助言を得ながら、その会の目的、責任、使命などにそくして、どのように活動するか、またその間に自他の認識と協力の訓練を得て、その学生生活をより高めることに向った。

指導者とは、学生の教育や自治活動の際に学生の相談相手として、あるいは学校との連絡のために、各学部とも、各学年、各級ごとに一名または二名おかれたもので、指導者には、寮監の場合も同様であるが、本校の卒業生の中から、学生指導に当る者が選ばれて、その任についた。この指導者制は本校の教育理念をより深く徹底させる意味で、ほとんど創立時より行われ、本校の特色ある教育体制であった。



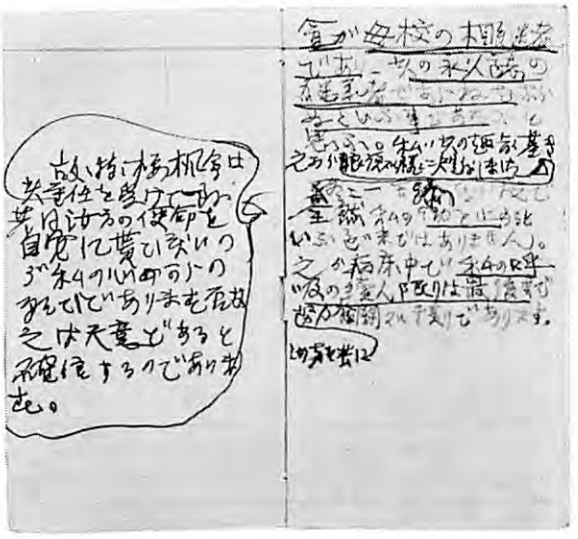
告別講演　それは実践倫理の講義の，総まとめともいうべきものであった。死を目前にした成瀬先生は，淡々とその病気の経過，心境を語り，後事に関する重大事項を発表された。

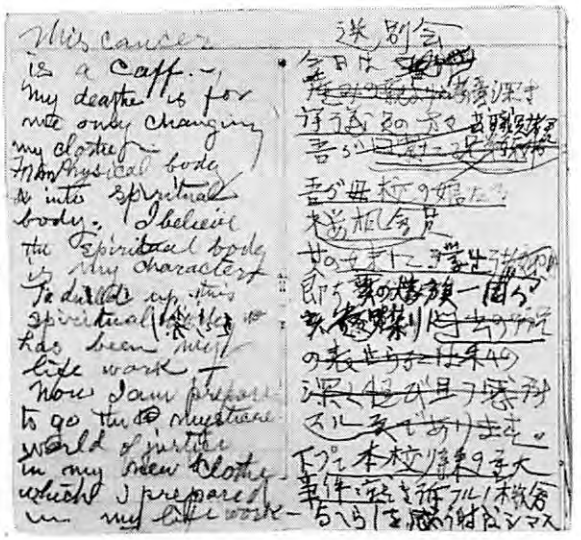
3　成瀬仁蔵先生の永眠

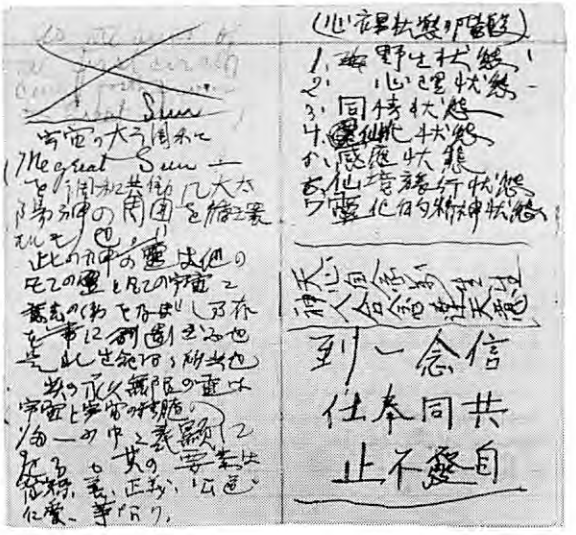
教育調査会につづいて、臨時教育会議委員であった成瀬仁蔵先生は、一九一八年（大正七年）『女子教育改善意見』をまとめられ、女子教育の理想像を描き公表された。この著作においても、人間教育を基礎とした、婦人教育、国民教育を、女子教育に求められ、欧米の模倣に終らない、日本の國情と日本の将来の見通しの上に立った教育論を展開し、現代の要請に鑑み、まず、家政学科・宗教学科・医学科の三学科を設置した女子大学構想を述べられた。女子総合大学教育の学科の関係を示す理想図は、上図のように描かれている。

家政学科（理科）のねらいは「直覚的神秘的賦性を健全に発展せしめ、科学的頭脳を啓発し、熱情的勢力を善導し、家庭問題、社会問題の合理的研究、家族制度の真髄の保存醇化、国家功率荒廃の匡救、家庭消費経済の有効、家庭副業の組織的組合、児童母親の保護、国民休養の指導によって一般健康の増進等、社会の改善進歩に貢献し得るところの知識技能を養成」することにあった。

宗教学科（文科）は「国民性の美質、即ち国民精神生活の後天的美を保存醇化し、精神的







その日の講演メモ　「死は永遠の旅の一つの波に過ぎぬ，それでは皆さん左様なら」と結んだ先生はその言葉のまま，不滅の三綱領を残された。

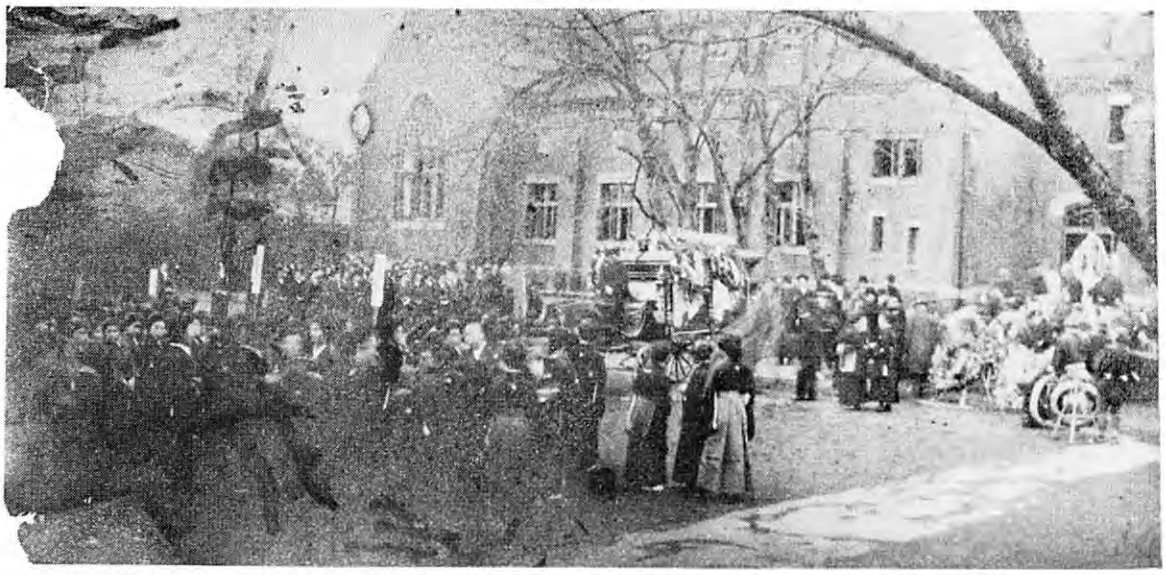
麻生学監　「私は成瀬校長にとって，なくてはならぬ右腕であった」——麻生学監は女子総合大学完成という成瀬先生の夢をついだ。

荒野を開拓し、物質文明の弊害を矯救し、国民の信念を覚醒し、児童の信念を涵養し、社会救済事業を指導し、婦人団体の組織を指導するに足るべき母親教育家指導者を養成」するものであった。

医学科は「慈愛と犠牲との念に富める其の稟性を発展せしめて、男子医師の短所を補ひ家庭社会国家の健康状態を改善上進せしめんとする」にその目的があった。

以上女子教育の改善論の実現の場は、まず日本女子大学校にあるわけで、その第一歩のために、同年七月には基金募集の計画が発表された。

学校の内外において、多忙な日々を送られ、過労の状況であられた先生は、九月頃から内



永生を信じ「葬儀と呼ぶを避けよ，僧侶・牧師を迎うるの必要なし」の成瀬先生の遺言どおり，花に飾られた先生のひつぎは，講堂に於て学校関係者との告別を行った——

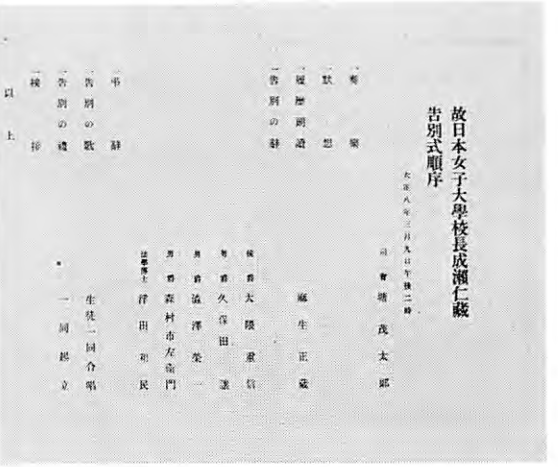
臓に異状を自覚されたが、周囲の者にも告げず、活動を続けられていった。しかし、一九一九年(大正八年)一月十七日、遂に臥床されるに至った。診断は肝臓癌の疑があり、医療の力の及ばぬものである、とのことであった。先生はこれを聞かれ、入院を拒まれ、病床で評議員会を開き、今後の事について評議、一月二十九日、その決定を公表することとした。

一月二十九日、病床から安楽椅子によられたまま、医師、看護婦がつきそい講堂に入り、大隈重信、渋沢栄一氏等の評議員、全校教職員、四百余名の桜楓会員、七百名の大学部生徒、百名の高等女学校五年生の列席の中で、告別講演が行われた。

先生の一言一句を聞き洩らすまいとする厳粛な雰囲気の中で、不治の病気にかかり、告別講演を開くに至った事情と有限の肉体を離れて、無限の生命に入る心境を語られた後、学校組織を総合大学に進める必要性、精神教育をより堅固に確立すること、後継者は桜楓会員であるべきこと、当面、第二代校長に麻生正蔵氏がつかれることなどを述べられた。

間にその要点の朗読を入れて、一時間二十分の演説を、重病であることを感じさせない熱意あふれる態度で終られて、おえつの声の

先生なきあと四月七日，第十六回生の卒業式が成瀬先生の写真をかこんで行われた。悲しみ深い卒業式であった。



故日本女子大學校長成瀬仁蔵
告別式順序

大正八年三月九日午後二時

一 奏樂　司會者　茂太郎
一 默祷
一 經歷朗讀　麻生正蔵
一 告別の辭　横倉太陵　桑信
　　青木久保田　憲
　　東倉益澤　榮一
　　東野森村市左衛門
　　法學博士　澤田　哲民
一 弔辭
一 告別の歌　生徒一同合唱
一 告別の電　一同起立
一 祝祭
以上

別れの式を，告別の式と呼んだのも，当時にあってははじめてのことだった，といわれる。

看護の記――　仁科　節（五回生・国）

二月廿六日

……午後は一回生諸姉の発議にて昨夜依嘱したりしといふ塑像家高村光太郎氏来訪せらる。氏は夫人千恵子氏（卒業生）病気のため代理として見舞はれたる格にて先生に御面会その御風貌に接するの機を作られたるなり。

三月一日

「……一日でも名残りを惜しむ人々の為に、もたして置いて貰いたいようにも思ふし、併し又一面には少しも早く安らかな眠りに就きたい」と先生が仰っしゃると……

告別の歌

一　限りしらぬ過去世より
　　終りあらぬ未来遙かに
　　継えず流れつ浪うてる
　　ああ不壊のいのちあり

二　哲人覚円にて
　　今ぞ仮舎のきぬ脱ぎ捨てつ
　　光明の裡に故郷へ
　　やすらかにたち給ふ

病床での数分間の会見の印象を，十四年の歳月をかけて昇華，制作された胸像。
「高いものに憧れ，いつもはるかをみつめている」成瀬先生の風ぼうが，よくとらえられているといわれる。

成瀬先生胸像　高村光太郎作

高村光太郎の妻智恵子が，女子大学校の卒業生であることもあって桜楓会では成瀬先生の胸像の制作を，青年彫刻家光太郎に依頼。

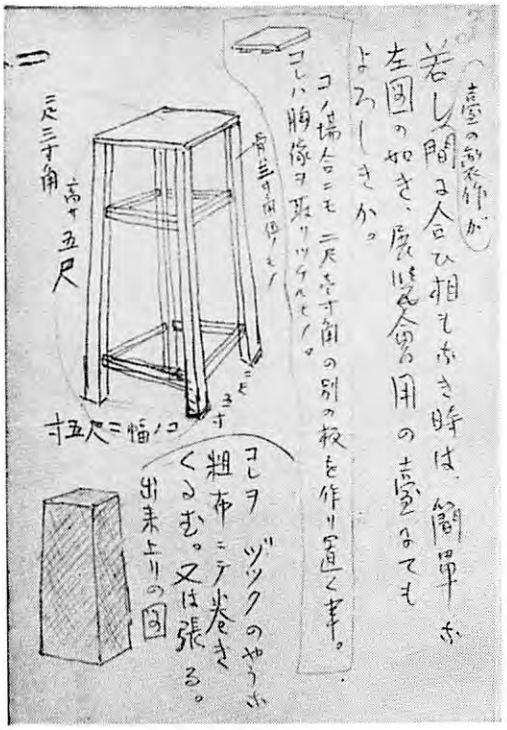
充ち満ちる講堂をあとにされた。

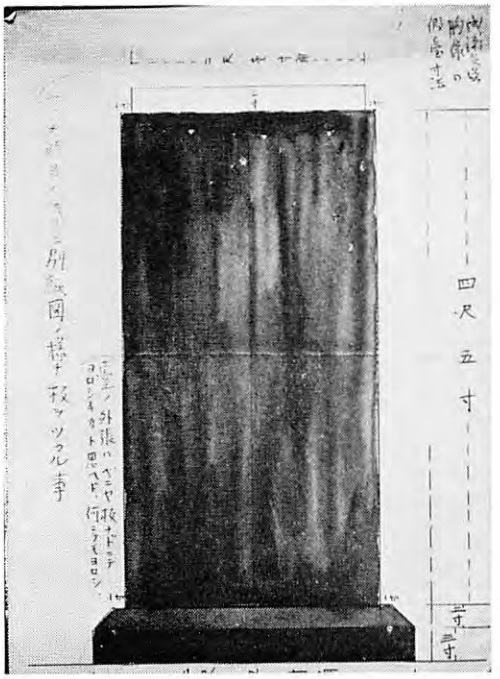
其後しばらくはむしろ元気を回復され、皇后の御下賜品を受け、折から来日したコロンビア大学のデューイ博士夫妻との旧交をあたため、その他、おびただしい先輩、友人、知己の訪問や卒業生の見舞を、周囲の心配をよそに、喜んで受けられた。先生のお言葉を希望する者には、床上で筆をとられた。

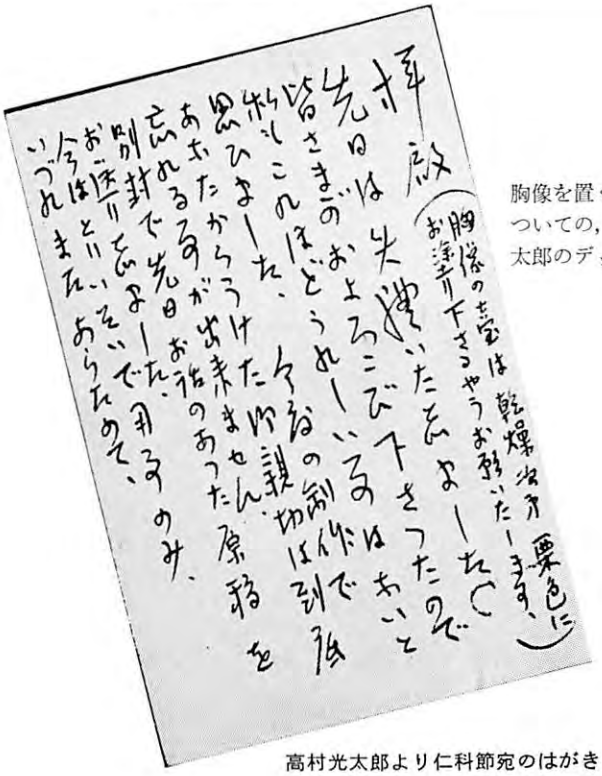
この間、久保田譲評議員のすすめにより、日本女子大学校の綱領を残すこととなり、二月上旬「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三標語を大文字で力強く書かれた。日本女子大学の教育の三大綱領がこれである。

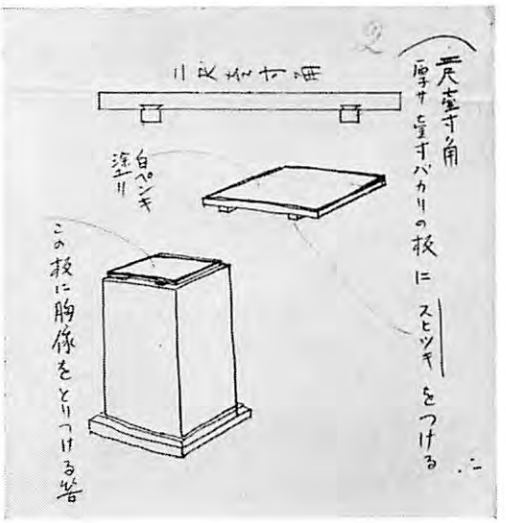
二月下旬より病状は急速に悪化し、最後の時は知らせて欲しいという希望によって、三月三日、その事実を告げられると、惜別の辞を枕辺にはべる人々に述べられ、「全く安心だ」「総て満足だ」の言葉を最後に、三月四日午前八時二十分、永眠された。享年六十歳。

告別式は九日、先生の帰一の思想により、既成の宗教的儀式の形をとらず、花環のあふれる式場に二千余名の弔問の人々を迎えて行われた。東京豊島区雑司が谷墓地に葬られ、一九二一年(大正十年)、渋沢栄一、西園寺公望氏の書になる、墓碑が建てられた。









胸像を置く下台についての，高村光太郎のデッサン．

高村光太郎より仁科節宛のはがき

大橋了介・画
成瀬校長宅の図。

時間があれば，だれでも喜んで迎え入れられた応接室。

成瀬先生の人となり——

長谷川きぬ（八回生・家）

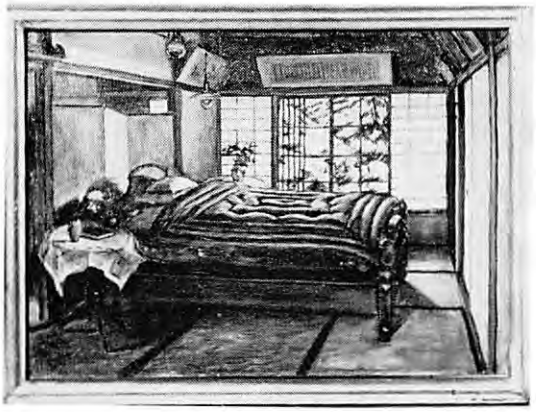
先生は毎月収入の半分以上、本を買って仕舞われたので玉木先生はいつも困っておられた。ズボンにもつぎが当ててあり桜楓会員が先生に還暦のお祝いに洋服を差上げた事があった。

佐久千代子（一回生・家）

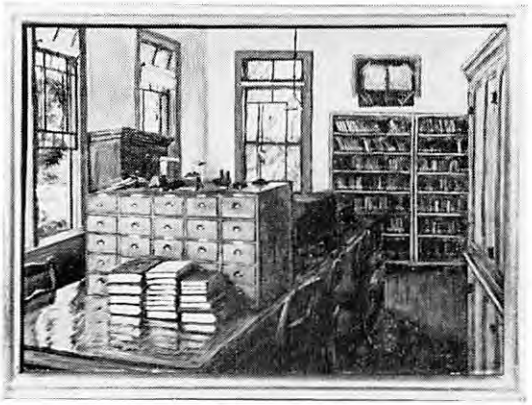
先生のお話のし方は決して能弁とは申し難い、いわば雄弁でお腹の底から絞り出す。話に熱が籠って来ると、眼光炯々と輝き長いお口のヒゲが針の立ったように見えて来る……言葉のくせは「ソウナケランニャナラナイ」そうでなくてはならぬの意味。私共はよく真似をした。

山崎静江（一回生・国）

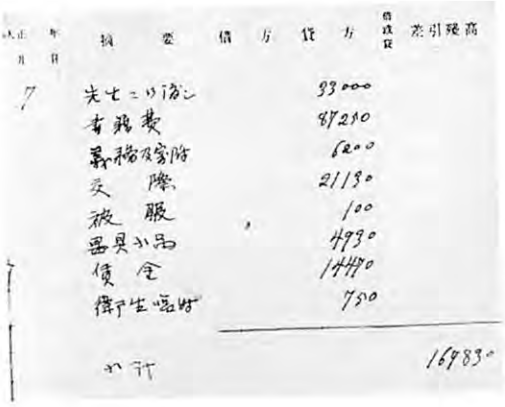
その頃の御外出などはいつも自転車でした。或日校門の所で、先生の自転車が道のくぼみのために横倒しに倒れました。先生も転落なさったので塵を払っておあげしようかと、かけ寄りますと、「地がホゲチョッタのでね」



質素な私室。



おびただしい蔵書に囲まれた書斎。



大正 年 月 日	摘要	借方	貸方	借或貸	差引残高
7	先生ニツ分		33000		
	書籍費		8720		
	義務教育費		620		
	交際		2113		
	被服		100		
	器具小品		493		
	債金		1440		
	御子生活費		750		
	小計		16983		

先生の家計簿　丸善の大得意だった先生は、収入のほとんどを本代にあてていた。（大正７年）

書見台　考えをまとめるとき、成瀬先生はよく室内を歩き回られたという、歩きながら本を読むために、自身で考案された書見台。

と起き上って腰をさすったり塵を払ったりなさる様子が、少年のように実におかわいらしくていつも友達と語り草にしたことでした。

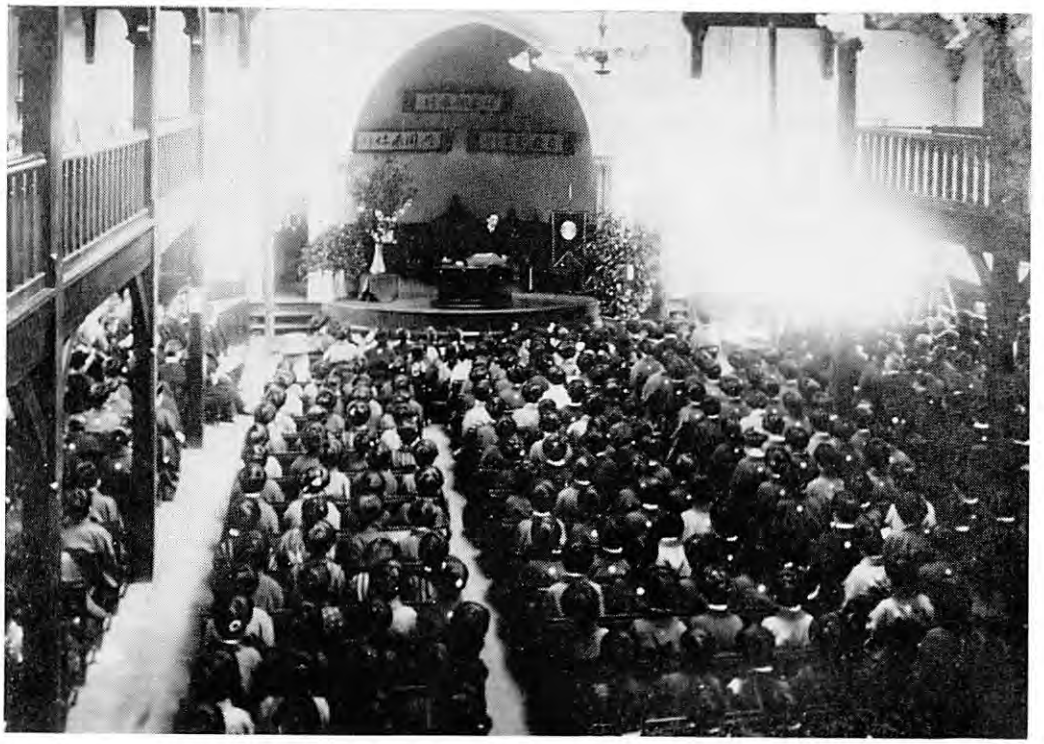
荒川かず（八回生・文）

富士寮に先生宅に通ずるという非常ベルがあった。試に一寸いたずらをしたことがある。所が先生は直に仕度をされ高張提燈を持って来られた時には、どんなに叱られるかとお叱り言葉を待ったが、「何事もなくてよかった」と微笑を洩らされただけであった。

瀬野　信（一回生・国）

特別体操を必ず見においでになり、「わしがやる」とおっしゃって上衣を脱ぎ、板の間にねられたこと印象深し。

甘いものがお好きだったのか，大福もちをよくあがられたという。いまも成瀬先生のお墓参りの帰り，群林堂で大福を買い帰る桜楓会員も多い。



麻生校長就任式　「成瀬校長の留守番を努めているという気分が抜けないのであります」―麻生校長の就任の挨拶より―

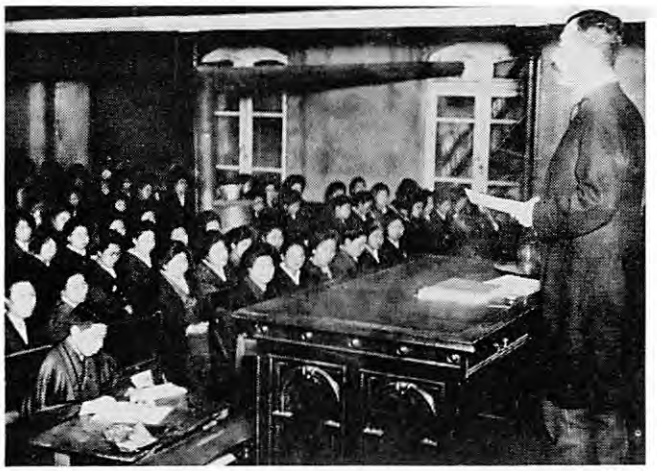
第三章　女子総合大学設立運動

1　女子総合大学設立運動の開始

一九一九年(大正八年)四月、麻生正蔵先生が第二代の校長として就任された。創立以来、成瀬先生と一体となって本校の発展に力を尽くしてこられた方である。

その第一の課題は、女子総合大学を設立することであった。この運動は、すでに成瀬先生が発表された、女子総合大学の理想像を基礎に、告別講演で述べられたように、家政学科から漸次文科・医科に及ぼす十年計画を出発させることであった。すでに桜楓会は基金募集運動を進行させており、宮内省よりも御下賜金があり、告別式の前日には、成瀬校長功労を表彰する「女子高等教育問題講演会」が開かれ、故人の畢生の宿志であった女子総合大学実現のために、及ぶ限りの声援をすることが、東京女子高等師範学校長湯原元一外発起人と、会衆者千六百余名をもって、決議されていた。

「女子高等教育問題講演会」 姉崎正治博士，内ヶ崎作三郎博士は成瀬校長の功績を讃え，その遺志・女子総合大学の実現への助力を訴えられた。



成瀬氏功労表彰 女子高等教育問題講演會（傍聴随意）

一、日時 大正八年三月八日午後
一、場所 神田區美土代町青年會館
一、開館 午前十二時
一、開會 午後一時

第次

一、開會の挨拶
一、演設

東京女子大學學監 文學博士 湯原元一
貴族院議員 文學博士 澤柳政太郎
立教大學校長 安井哲子
早稲田大學教授 元田作之進
醫學士 內ヶ崎作三郎
文學博士 姉崎正治
帝大文科教授 子爵 蜂田柔吉
金子堅太郎

一、決議文朗讀
以上

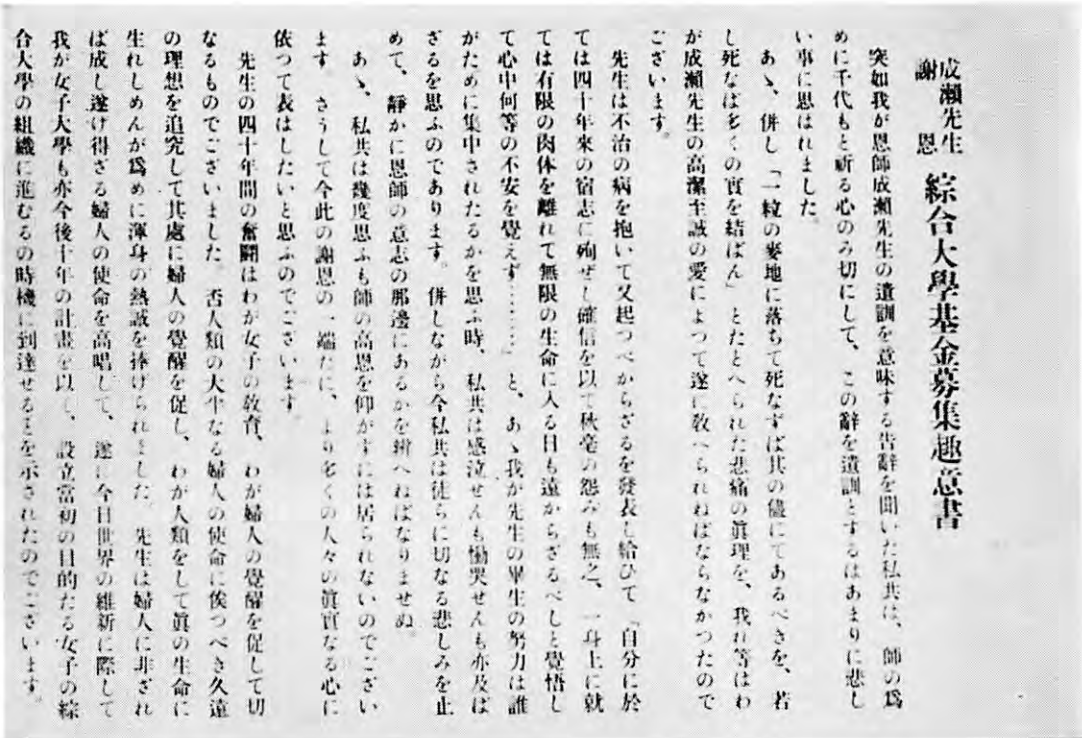
告別講演後，急拠計画された成瀬先生功労表彰会は，そのまま涙の追悼会に。

第一次世界大戦後の大正デモクラシー思潮の広がる中で、女子教育界も活気をみせはじめ、中等教育への進学率も高まり、大正初めに、二万五千余人しかなかった高等女学校生徒も、大正末年には三十万人の増加をみせ、男子中学生よりも在学生数が多くなってきていた。従って高等教育への進学者も増加し、一九二〇年代の後半には、女子高等教育振興問題が議会に提出され、女子教育関係者はもちろん、世論もまた好意的となってきた。

明治末期に国立、私立をあわせ十校しかなかった女子高等教育機関は、この期に四倍に増加し、一九三五年(昭和十年)には、四十六校になっている。この間の新設校の中には、職業や技芸的教育を目的とするものがあり、各種学校の増加と共に、女子高等教育も多様化をみせてきて、進学者に対応してきている。

女子の高等教育欲求の高まりの中で、日本女子大学校への志願者も増加し、特に師範家政学部は中等教員の無試験資格を有していたこともあり、希望者が多く五倍以上の競争率をみせた年もみえる。

この中で一九二一年(大正十年)、社会事業学部が開設された。本校は社会的活動に前々から非常な関心をよせ、特に桜楓会を中心に、



成瀬先生謝恩　綜合大學基金募集趣意書

突如我が恩師成瀬先生の遺訓を意味する告辭を聞いた私共は、師の爲めに千代もと祈る心のみ切にして、この辭を遺訓とするはあまりに悲しい事に思はれました。

あゝ、併し「一粒の麥地に落ちて死なずば其の儘にてあるべきを、若し死なば多くの實を結ばん」とたとへられた悲痛の眞理を、我れ等はわが成瀬先生の高潔至誠の愛によつて遂に教へられねばならなかつたのでございます。

先生は不治の病を抱いて又起つべからざるを發表し給ひて「自分に於ては四十年來の宿志に殉ぜし確信を以て秋毫の怨みも無之、一身上に就ては有限の肉体を離れて無限の生命に入る日も遠からざるべしと覺悟して心中何等の不安を覺えず……」と、あゝ我が先生の畢生の努力は誰がために集中されたるかを思ふ時、私共は感泣せんも慟哭せんも亦及ばざるを思ふのであります。併しながら今私共は徒らに切なる悲しみを止めて、靜かに恩師の意志の那邊にあるかを辨へねばなりませぬ。

あゝ、私共は幾度思ふも師の高恩を仰がずには居られないのでございます。さうして今此の謝恩の一端たに、より多くの人々の眞實なる心に依つて表はしたいと思ふのでございます。

先生の四十年間の奮闘はわが女子の教育、わが婦人の覺醒を促して切なるものでございました。否人類の大半なる婦人の使命に俟つべき久遠の理想を追究して其處に婦人の覺醒を促し、わが人類をして眞の生命に生れしめんが爲めに渾身の熱誠を捧げられました。先生は婦人に非ざれば成し遂け得ざる婦人の使命を高唱して、遂に今日世界の維新に際して我が女子大學も亦今後十年の計畫を以て、設立當初の目的たる女子の綜合大學の組織に進むるの時機に到達せるを示されたのでございます。

告別講演後，直に桜楓会は女子総合大学設立をめざし，百万円の予定基金中三十万円を桜楓会員によって集めることを決議。

託児所、バザー、夜間女学校、生活改善運動など、さまざまな形で活動してきていたし、第一次世界大戦後の社会不安に対応し、すでに三年前より社会事業関係の講座を開いていた。社会事業部は、児童保全科及び女工保全科の二科によって発足した。この学科の開設は社会的にも注目され、管轄の内務省より、奨励金の下付を受けた。

改めて一九二三年(大正十二年)、女子総合大学設立の募金趣意書を発表し、百五十万円を目標に運動を開始した。この運動は、次項にのべる関東大震災の影響で一頓座を来したが、翌年五月より再び募金活動を展開した。そして総合大学予科高等学部の建物（後の樟渓館）を竣工、一九二七年(昭和二年)よりまず高等学部を開部し、女子総合大学への第一歩を印した。

しかし女子総合大学の発足には、大きな問題があった。それは当時の大学令では、女子大学を認めなかったことである。この難題に対しては、大学とすることは成瀬校長以来の強い意志であること、女子高等教育の高度化が目的であり、大学令に拠ることを必ずしも必要としないという判断で、高等学部を発足させたのである。他の諸女子専門学校と共に、

此の時に當つて先生は後繼者を指示し、私共が相互に共同して其の實を擧げん事を期待せらるゝのでございます

力弱き婦人が此の大なる任務を繼承するといふことは、勿論所謂後繼者としての個人關係を以て繼承するものでないことはいふまでもありませぬ　先生の意志は普くわが婦人の向上を促し、婦人に自覺を與へ、今後婦人の地位を高めんが爲めの深慮に在ることを思ふのでございます

されば今此の後事を依囑されることは單にわが女子大學の發展そのものではなく、わが婦人の位置を進めんが爲めにあることはいふ迄もありませぬ

私共はわが行くべき道を拓き、わが使命を自覺してこれを完成することに依つて卽ち恩師に對する謝恩の萬分の一を盡し得るのでございます。これは女子大學に學び、直接先生の感化を受けたるものと否とを問はず、わが婦人わが姉妹のすべては師の意志の後繼者たるべき榮譽を擔ふと同時に又その任務を分ち持つものでございます

私共はもとより微力ながら、この感激の心を以てわが婦人の一大精神團體卽ち靈の殿堂の建設を意味するわが女子綜合大學の實現につとめ謝恩の一端をわが師の前に致さんとするのでございます

今この綜合大學基金募集の趣意はわが姉妹、わが有志の人々が我れ等教へ子の此の微衷を諒して、來つて此の企に同情し、我れ等教へ子をして教への慈父に孝を全からしめられんことを切望するものでございます

一、應募額一口を金壹拾六圓とし一口以上幾口にても應募し得るものとす
一、應募者は一時金又は向ふ三ケ年賦分納の方法を以て拂込むものとす
一、應募者は別紙申込書に應募額並に拂込方法を記入して申込まれたし

大正八年二月

櫻楓會

会員の懸命の努力の結果，先生御他界の３月４日には十万円，その一周忌には三十万円の寄金が，母校のために寄せられた。

樟渓館　総合大学設立への道は一様ではなかった。与望をになって樟渓館が竣工したのは，大正15年10月のことであった。

昭和3年4月20～30日，女性文化展が開かれた。図書館建設費の一助にと，入場は有料50銭。入場者は3万余人。

女性文化展覧会開催

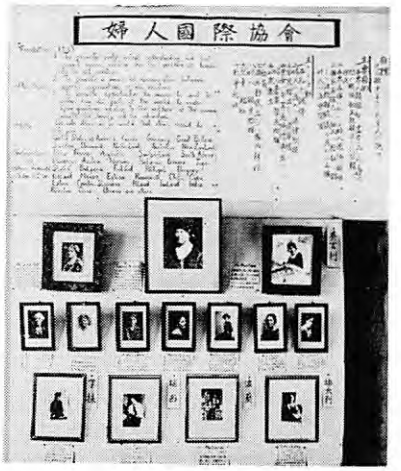
二年の準備期間を経て開催されたこの展覧会は，過去から現代に至る女性文化の集大成であり，女性発展の道しるべにとの意欲的なものだった。

女子大学の昇格運動をつづけたことはいうまでもない。

高等学部の修業年限は、文科・理科ともに三年で、大学本科に続く過程とし、前者に五十四名、後者に二十七名の入学者を迎えた。

高等学部の発足、創立二十五周年記念、併せて、昭和御大典を祝賀して、一九二八年(昭和三年)、四月二十日の創立記念日より十日間に及ぶ、女性文化展覧会を開催した。それは同時に総合大学に付設すべき図書館建設費の募金運動ともなった。内容は、多岐にわたり

(1)日本女子大学校創立二十五年史料　(2)世界及び日本の女子高等教育など教育問題の概況　(3)宗教と婦人の問題　(4)婦人参政権運動などの法律と婦人の関係　(5)婦人国際平和運動の状況　(6)社会施設と婦人の活動　(7)欧米の芸術　(8)欧米の文学　(9)我が国の文学　(10)著名な女性科学者の紹介　(11)婦人と経済の問題の十一項目をとりあげ、展示した。同時に、学生生活を紹介した映画『丘の春秋』も上映された。展覧会の入場者は三万余人に達し、以後、大阪、神戸、山口、広島、京都の各地でも開催した。この展覧会を通して、日本女子大学校の教育の精神と方法を示すと共に、女性文化の過去から現代に至る紹介と、未来



婦人国際平和運動の概略，各国のポスター，各国の婦人運動家の紹介など大正デモクラシーの名残りこく……

国情を反映してか，移民問題も取り上げられた。婦人の側からこの問題と取り組んだのはじめてのこと。

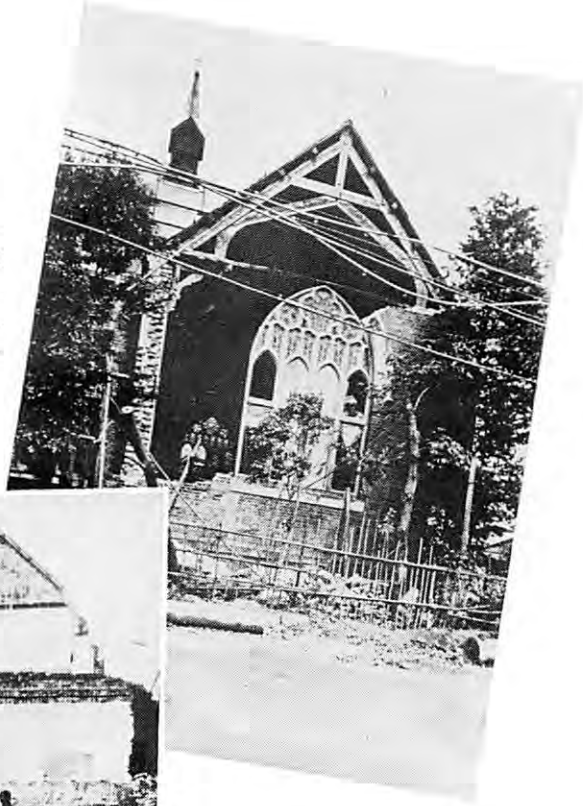
麻生先生と母の日会

大正十四年六月二十五日地久節の式辞の中で、「母恩感謝の日」を設け、「母の日会」を開くことの提案が麻生校長によってなされた。

ポケットに入るような小さな論語を、いつも身にしていた麻生先生は、生前に父を失い、母親の手一つで育てられたという。信心深く、子弟の教育に熱心であった母への敬愛の思いは、一層強かったのであろうか、翌年の先生の講演、「母の道、母の恩」はＪＯＡＫより放送され、多くの人々に感銘を与えた。

この言葉にうたれた学生桜楓会員の活動によって、年々「母の日会」は発展し、昭和七年より、現皇后陛下のお誕生日に当る三月六日を、母の日とすることが文部省によって定められた。

昭和八年には桜楓会が全国的運動を起し「母の道、母の恩」を全国中等学校に配布し、各支部で記念会を催し、母たるの道、子たるの道を提唱することになった。



日露戦争時，国家にその財産を寄付しようとした森村市左衛門氏に，「国家百年のため女子教育にこそ寄付を」と訴えられた成瀬先生に共鳴，寄贈された豊明館は壊滅，その姿を消した——

煉瓦造りであった豊明館，同講堂，家政研究館の三館は被害が著しく，修築不能であった。建物の被害総額は約30万円。

への展望を示すことが目指され、本校をはじめ、各地での展覧会は好評を博した。

一九三〇年(昭和五年)、高等学部の課程を終えた人々を中心に、大学本科が発足した。文科三十八名、理科十九名の入学者であった。しかしこの大学制度による入学者は、四回生で打ち切りとなった。様々に理由が重なっているが、女子総合大学に対する理解が一般的にみて未だ熟さず、時期尚早であったといえよう。

高等学部・本科卒業生の中から、従来にも増して、女子に門戸の開かれていた、国立、私立の諸大学に進学したり、その中で研究を続けていった卒業生が出たことは、特記してよいであろう。

2　関東大震災と学園

一九二三年(大正十二年)九月一日の関東一円を襲った大震災によって、本校も被災し、豊明館、同講堂並に家政研究館など、煉瓦造りの建物が大破し、他の建物にも被害が出た。大破した三つの建物は修築不能であることがわかり、講堂、家政館は木造に替えられることになり、後者は再び桜楓会員の手によって

「御大典記念の永久の建物，木造で焼けると困るから煉瓦で」の成瀬先生の一言で，煉瓦造りにした家政研究館だったが……

学生控室　教室不足解消のため，バラックが建てられた。

三類館の一階　応急処置とし，一時的に講堂として使用された。

寄付が集められ、建築費の一部とした。

学園関係者の死傷者も少なく、教室の不足を補ってバラックの教室が建てられ、状況がともかく落ち着くと、十月五日、豊明小学校、同月八日、同幼稚園、同じく十五日に附属高等女学校、同じく二十五日から大学部の授業が始められた。

一方、桜楓会を中心として本校生徒も協力して東京市社会局との協議の末、救援活動に入った。その一は児童救護部で、上野公園に天幕張りの救護所を設け、東京市から材料の提供をうけて、九月十九日より一日四百名内外の昼食と、二百名内外のお八つを子ども達にわけ与える活動を開始した。二は被服救護部で、全国会員からよせられた衣服、衣服地を消毒し、縫い返しなども行って東京市に寄贈する一方、社会局に集った衣類の整理と罹災者への分配を行った。

さらに十月には婦人職業部と児童診療所を増設し、十二月には内務省救護局から下付された三棟のバラックを用いて、児童栄養食の給与と乳児預り所、婦人授産所とその製品の販売所にあてた。

児童救護所と児童栄養給与所は、翌年一月、東京市社会局の所管に移ったが、桜楓会員は

未曽有の被害に，東京市は苦慮していたが，いち早く桜楓会は体制を整え市の救援活動に協力。上野の山で。

児童救護部，衣服救護部を設置。救護事業に参加した。救援物資を積んで学校を出るトラック。

その後も主任として活動をつづけた。

同じ月、震災善後会からの寄付を得て、児童健康相談所が本校内に開設されたのも、震災時の活動の余恵であった。

この未曽有の大災禍の中で、すみやかに救援態勢をとり、見事な活動を展開し得たのは、学園における長年の学生自治の訓練の成果であり、桜楓会員としても、常に協力態勢をもって、数々の社会的活動を重ねてきたからに他ならない。

◆関東大震災の時、一般の方々より数日前に帰校し、学校の託児所や市の配給のお手伝などをいたし、人間のギリギリの時の心境にふれ得たことは、社会勉強として忘れられません。（二十一回生）

◆早稲田より市電で神田橋まで乗り、後は歩いて両国の緑町を二人一組になって焼け出された人々の数を調べたことです。被服廠の焼け跡にはトタンがかけてありましたが下駄や髪の毛が見えました。（二十一回生）

◆日暮里の託児所にお手伝いに行ったこと。わずかな資金で、不遇な多くの子どもたちが少しでも仕合わせであるようにとの先生方のご苦労が身にしみ……（二十三回生）

関東大震災の思い出

私が女子大学の時は日本が平和にて、親も経済的にも豊かでありのんびりと気楽に暮らせました。関東大震災が四年の時だったので二学期は全然授業がなく、三学期に一寸勉強して卒業式を迎えたのが残念でした。

二学期より綿服となり、少しひきしまってきました。初めて入学した時、何と派手な学校かと驚きそのことに次第に慣れていたのが心身緊張し、それが幾分とも戦後の生活に役立ったように思います。

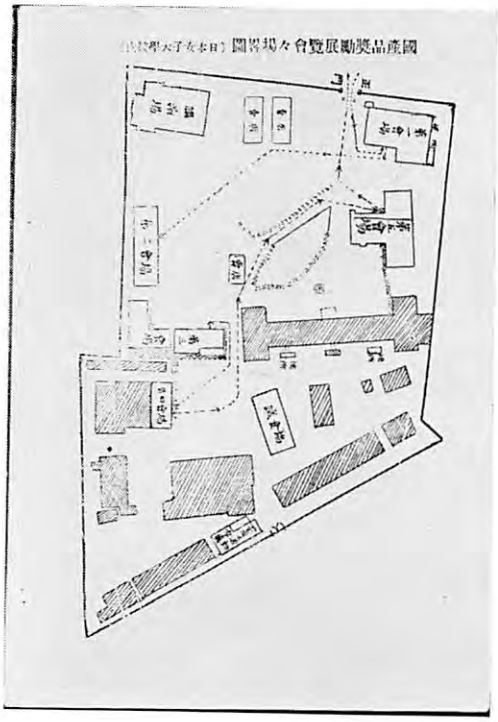
（二十一回生）

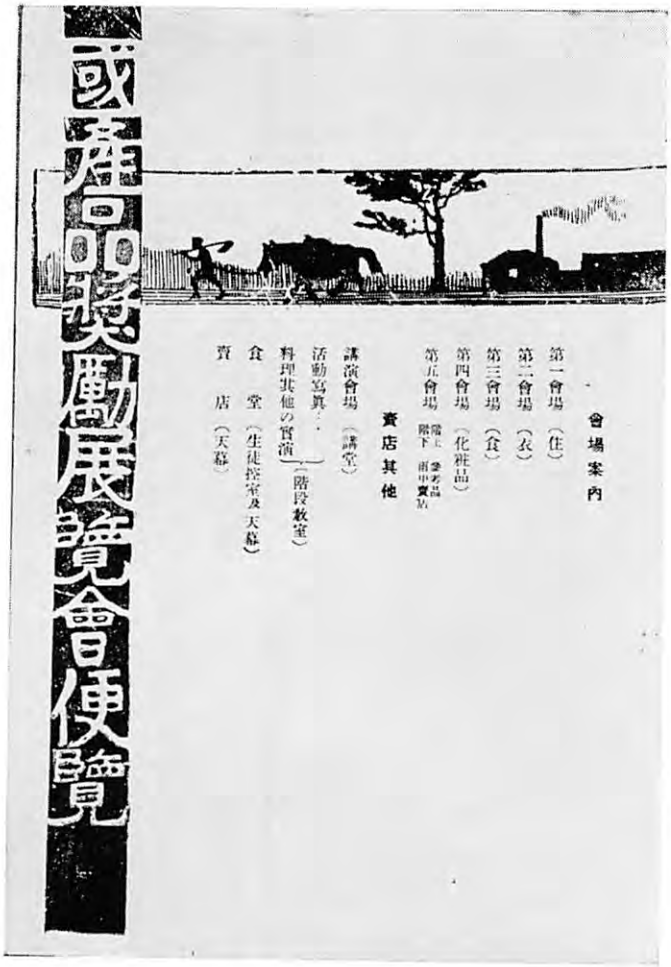
四年生の三泉寮生会の終りに関東大震災が起り、修養会の最中にゆれましたが、誰一人立つ者もなく、粛然として修養会の討論会を終了したことなど、鮮やかに印象に残っています。（二十二回生）

上野の避難民は全山で一万人。このうち七歳以下の幼児は一千名だったが，栄養不良の著しい四百名の児童のために，すぐに昼食の給食が開始された——

児童，被服両救護部に加えて，10月からは上野に婦人職業部と児童診療所が増設され，浅草にもその出張所が置かれた。桜楓会救護部は大車輪の活躍ぶりだった。

国産品奨励展　大正13年10月21日～27日までの一週間であったが，ほぼ一年間がその準備に費され，全校舎を使っての大展覧会だった。





この震災を一つの契機に、ますます広がる経済的危機に対応し、一九二四年（大正十三年）十月には、国産品奨励展覧会を一週間にわたって開催した。その目的は我国の輸出入及生産消費に関する知識の普及と国産品の奨励、将来の衣食住に対する生活方針の提示にあり、家政学部学生と桜楓会員の協力で、展覧会を行った。今回も皇后の行啓を迎え、一般の入場者も三万五千人を突破し、一般婦人への啓蒙にも資するところがあった。

第六日十月廿六日（快晴）

今日は開期中唯一の日旺日で、また絶好の秋日和とて、開会以来の大混雑を呈し、午前中に各館は身動きも出来ぬ程の入場者で、食堂なども他に急設して入場者の休憩所にあて番茶、汁粉等を供し、校庭にもベンチの数を増して入場者の便宜をはかった。参考館等は一時入場を中止するといふ有様であった。

桜楓会員も今日は珍らしく地方支部からわざわざ上京した人々も見受けた……

学校側でもこの展覧会を永く記念するため写真及び記録を残すこととした。

家庭週報より

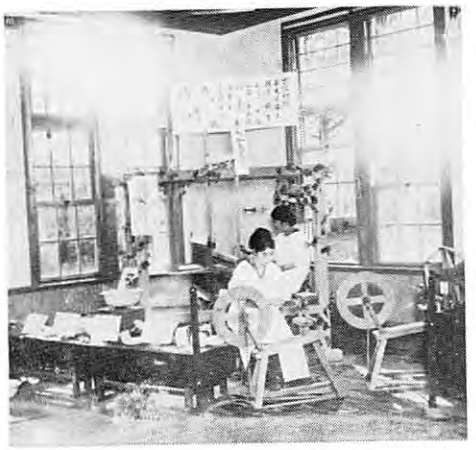
国産品奨励展に よせて——

国産奨励の歌

武島　羽衣

こその古枝の萩が花
こその軒端のつばくらめ
今年も咲きて巣作りて
在処かはらぬ様見れば
小鳥も草もおのづから
本を忘れぬ心あり。

（家庭週報　大正十三年十月）



衣，食，住，なかでも食がいちばん重視され，輸出入生産消費状況，国産品との比較研究が……

一般入場者三万五千人，文部，大蔵，国務大臣の来校もあり，話題をよんだ。

女子の学校の展覧会と高をくくっていた人々も，その企画の適切さに感嘆したという。

「老人がお灸をすえられたつもりで，暫くの間我慢して校長を……」ユニークな就任挨拶をされて半年，渋沢校長は逝去。

井上校長の就任は，女性史上一つのエポックをつくったものであり，本校と桜楓会の関係を，いっそう一体化させた。

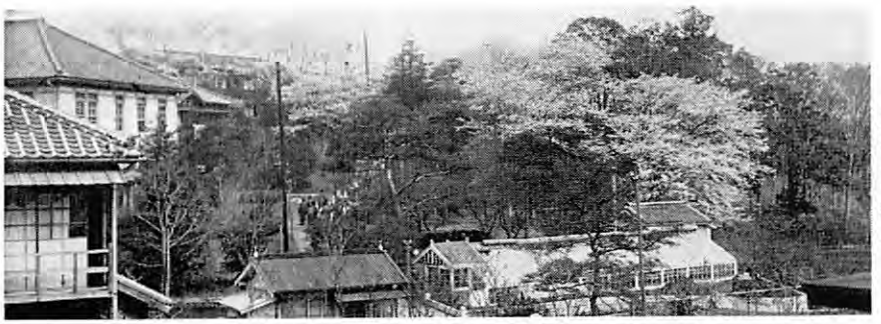
第四章　昭和前期の学園

1　制度変更と学園生活

一九三一年(昭和六年)度より、高等学部学生の募集を中止し、専門学部に再び一本化し、家政学部第一類(従来の家政学部)・同第二類(従来の師範家政学部)・国文学部・英文学部・社会事業学部の五学部で、新学制を構成することとなった。麻生正蔵校長は、高等学部廃止の責任をとって四月に辞任され、後任には創立当初から縁故の深い渋沢栄一氏が就かれたが、同年十一月逝去された。

ここに、第四代校長として、井上秀氏が就任されることになり、創立者成瀬先生の遺志通り、本校卒業生がはじめて校長の責任をとることとなった。女子高等教育機関において、理事会・評議員会・教授会の推挙を得た、卒業生の校長が誕生したのである。この間、理事及び評議員を充実し、評議員に桜楓会員の代表を常時、六・七名加えることとなった。

一九三三年度より、社会事業学部を家政学



「目白台も凡て桜の木の間，天主教会の桜，雲照寺の桜，それをすぎると女子大学校……門を開いて迎え入れられた構内も赤桜花瀾漫たる天地であった」
――『目白生活』より。

寮の桜
故郷おもへば山また山
はるけき理想の
花や紅葉にほへる下蔭
自治寮たてて
いく年をむすぶ
この友がき
――寮歌より

部第三類と改称、家政学的知識をより多く学ぶ学科に編成し、修業年限も三か年とした。

『日本女子大学校四拾年史』によれば各科の傾向は、家政学部第一類は将来家庭建設を目的とする者が多く比較的温和純真で、検定などの束縛等のないためか自由豁達に研究し得る特色があり、第二類は科学的気風が旺盛で、質実剛健であり、中等教員の無試験検定資格を得られ、子女教育に興味をもつ者が多く、研究生活を継続する人も少なくない。第三類は社会意識に目覚めた家庭婦人を養成することを目的としているが、社会事業家を目指し卒業後活動している者がある。他の部に比しアジアの留学生が比較的多数入学している。

英文学部は、英語を通じ広く世界の事情に通暁し、高邁な識見を養い、家庭人たると社会人たるを問わず、時代の先駆者としてその責務を全うすることを学生に求め、英語の基本的学力を培うことが重視されている。

国文学部は、家政学部の実践的傾向に対して、精神的形而上的方向の究明をその使命とし、国文学の研究を通じて、我が国の精神的、文化的特色を把握させることにつとめており、卒業後、家庭に入っても研究をつづける者が多い。

大正13年11月，桜楓会は児童健康相談所を建設，バンガロー風の建物で，総建坪30坪。

家政学部と関係の深いものに、桜楓会の託児所及び児童健康相談所の活動がある。

託児所は一九一三年(大正二年)以来、つづいている活動であるが、人事相談・母の会・子供会・活動写真会・健康相談・母子ピクニック・託児健康診断・クラブ会その他年中行事、給食、給米、牛乳や餅の配給、払下げ米の廉売など、さまざまの託児事業を行っており、かつその運営のために、寄付金の募集や度々の音楽会、映画会、舞踊会、バザーなどを催してその資金とするなどの活動を行っている。

従来乳幼児の死亡防止、体力の増進など児童の保護と健全な成長のために、家政学部で研究が行われていたが、桜楓会でもこれを重視して、児童問題についての科学的知識の普及を計るために、寄付を得て児童健康相談所を建設した。母校の正門より西側のバンガロー風の建物であった。中には身体検査室、歯科診療室、薬局、精神検査室、待合室、受付、係員控室などがあった。相談料は無料で、児童健康診査、保育相談、歯科診査で出発し、以後、出張健康相談、通信相談、赤ちゃんメンタルテスト、赤ちゃん表彰式、研究会、母の会、講演会など、事業を拡げていった。

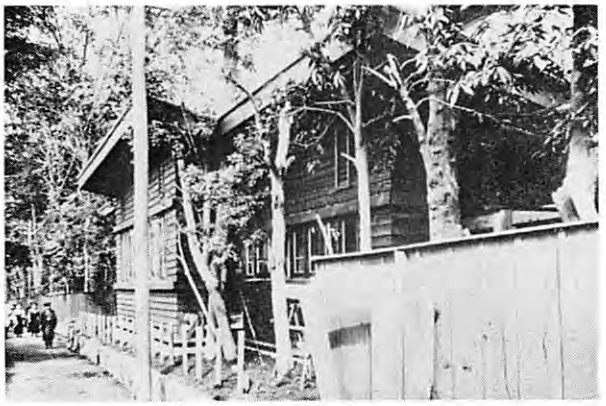
――託児所の誕生――

大正二年六月二十七日、桜楓会社会部の仕事として託児所が開始された。欧米視察旅行より帰られた井上秀桜楓会理事長の発案によるものだった。

当時、日本にはまだこうした施設は少なく、命名にあたって、はじめは保育所と名づけたが、母校評議員渋沢栄一氏によって託児所と命名された。今日、重要な社会施設となっている託児所の地位は大半、桜楓会託児所の活躍によって築かれたといえよう。

開所当時の規則、第一には、

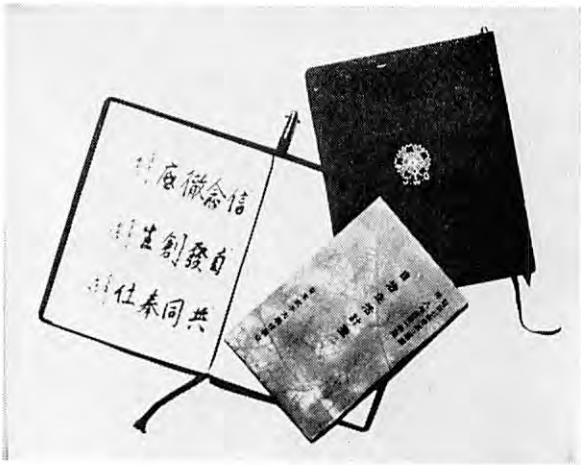
当所は女子大学卒業生の立てて居る桜楓会の仕事で、同会が監督し、児供が手纏の為に、働くことの出来ぬ人々の児供を預り、お守りをして上げる所です――とある。託児所では託児の他、親の会、講演会等も開き、父母にも働きかけた。



児童健康診査及び保育相談
毎週月木午後1時より4時まで
相談料は無料

桜楓会幼児保育所規則
◆預る児供の数は当分の内20名
◆年齢は満2年以上6年以下
◆夏は朝6時，冬は7時から……

さくらナースリー　本学教職員のために昭和45年6月開所。保育所設置で退職する者が減少している。



学生手帳　自治自動主義をとり，学生生活全般について，行事の立案の責任を負う学生たちは，手帳をつくってその結束をはかるようになった。

趣味係，体育係を中心に合唱を楽しみ，運動会に熱中し，青春を謳歌したころ……

学生の自治活動も活発で、毎年その年度の自治活動の目標がきめられ、自治計画発表会が行われ、学年末には同じく結論会がもたれている。

この頃の特記すべきこととして、一九三二年(昭和七年)、自治寮が成立したことがある。自治寮は二か月を一期とし、三年寮と四年寮があり、自ら定めた規則によって寮運営を行い、好結果を得た。軽井沢三泉寮の敷地にも林間に学生の設計による小さな分館が建てられ、翌年以後、各カテージを独立させ、修養生活に加えて家庭生活の実習を試みている。

係活動も活発であるが、研究係から独立した編輯係が一九三一年(昭和六年)からハンドブック(自治活動のための学生手帳)を作成し、さらに二年後からは、卒業アルバムの編集、自治生活記録、家庭週報の学生欄の担当などを行っている。

体育係は、係の成立当初から一貫して存続しており、その最大の仕事は毎年の運動会の運営である。年毎に様々の趣向をこらしての運営はなかなかのものであった。

また国文学部では、特に研究生活の充実をはかるため、研究係から図書係を分離し、中央図書室との連絡や学部図書の充実、読書の

沙翁劇　昭和10年度英文科卒業生が卒業週間の催しとして本校講堂で上演したことが，きっかけとなり今日に至る。

天心寮　「西方に遠く富士の雄姿を仰ぎ，波静かに渚清く気朗らか」な千葉県富津村に，昭和6年竣工。夏期寮。

初演は『真夏の夜の夢』，昭和12年からは九段軍人会館に於て一般公開し，大評判となった。

この清楚な夏期寮で，二年生が修養会を行い，三泉寮に劣らぬ有意義な日々を過ごしていた……夜の結論会。

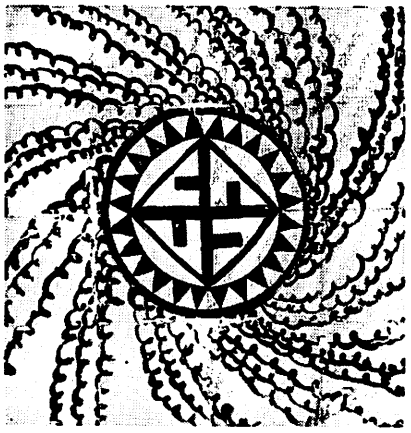
奨励、新刊図書の紹介などを行って、他の学部とは異った係活動をもっている。

その他、特殊な、付属的な活動事業を行うものとして、隣保事業係、国際聯盟協会学生支部係などがおかれた。前者は、家政学部第三類の学生を主体として、他学部からも参加し、子供会や母の会を行ったり、桜楓会託児所の手伝を行った。後者は全国二十六校に及ぶ学生支部の一つとして参加し、「世界人類の衷心の願いは此の地上に永久の平和が来ることであります」という書き出しで始まる、国際聯盟協会日本女子大学学生支部設立趣旨書を掲げて、国際親善活動を展開し、お茶の会や、平和のためのパンフレットを作成し、配布するなどの努力をしている。日本が、国際聯盟を脱退したあとは、日本国際協会学生支部係と改称をよぎなくされたが、国際問題の研究と学生間の親善の活動はつづけられた。

附属の高等女学校、豊明小学校、豊明幼稚園もそれぞれ、創立の教育理念を生かして活発であった。

一九二八年(昭和三年)、安田修徳会から児童研究推進のために本校に寄付があり、それを基金に児童研究所が設立された。開校時より自由な創造的教育を試み、大正期に広がっ

校歌　第35回創立記念日を祝うもので，昭和10年４月発表。詞は33回生，作曲は下総皖一氏。



昭和９年12月20日，校章が制定された。それは古くから成瀬先生が好んで書かれたモチーフである。

た新教育運動においても、先駆的な活動を行ってきた幼稚園や小学校、あるいは桜楓会の児童のための活動が注目されていたことによる。以後、貴重な分野の研究所として活動を続けてきている。

この間、桜楓会の努力によって、高村光太郎作成瀬仁蔵先生の胸像が成り、一九三三年(昭和八年)の創立記念日に除幕、翌年、山口の生誕地に、桜楓会山口支部の尽力により、記念碑が建立された。同じ年、先生の遺品保存会が設立され、記念展覧会が催された。この時の遺品が写真におさめられ、後に、桜楓会出版部から『成瀬先生記念帖』として刊行されている。

このような事業によっても本校の創立の精神を確認しつつ、教育の継承が進められ、実践倫理を中核とする、信念徹底・自発創生・共同奉仕の三綱領が生かされていった。軽井沢三泉寮もその重要な場であり、この時期には井上校長他、服部他之助英文学部教授、ついで、間宮英宗老師(禅宗)が学生の精神修養の指導にあたられた。

小さな鐘の音――

小さな鐘が授業の始めと終りを告げていた。小さな鐘の音なのにそれは遠くまで、よく響いたという。朝、予鈴が鳴ると老松町の先までその音は伝わり、目白通りはかけ足で校内を目指す女子大生でにぎやかだったという。

高い建物もなく、道には時おり通る人力車だけの、静かな、空気の澄んだよき時代だったのだろうか。

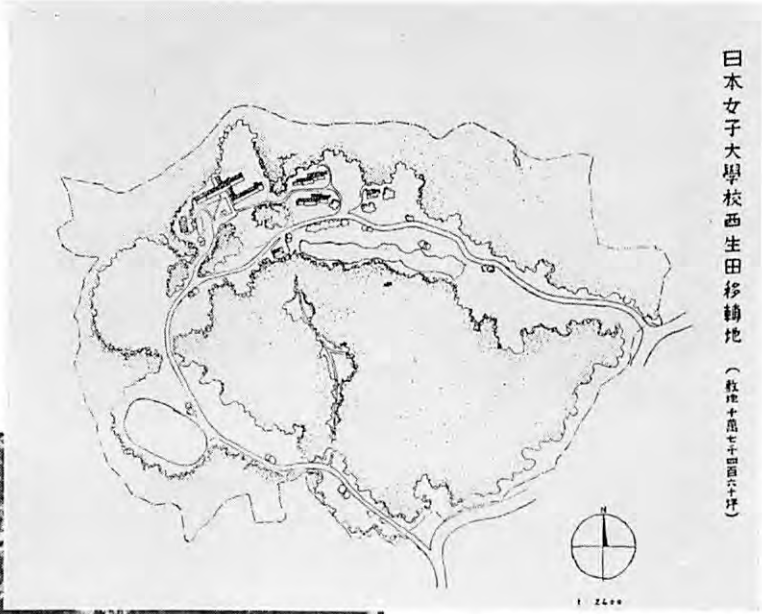
いま、小さな鐘は青くさびて、成瀬記念室に眠っている。もう鳴らない。かわりに、ベルが時を告げている。

鐘を鳴らすおじさん。

時鈴　教養館ののきに，鐘が下げられていた。

三泉寮　形を変えつつ，建学の精神は受けつがれている。

結論会　自治活動はいっそう組織化され，活発であった。毎年まとめの結論会は熱気にあふれていた。



西生田校地　いくつかの候補地の中から選ばれた，新しい校地。山あり，谷あり，外国の学園環境に似ていることが決め手であったという。

いはほをもおしのけて咲く花のごと
みこころつぎてつよくたたまし
茅野雅子
女子総合大学設立への祈願をこめて，西生田の地は決定された。

2　西生田校地の設定

創立当時の目白台の田園風景や樹林は次第に姿を消し、人家が稠密化すると同時に、東京市区割整理事業により、敷地はさらに狭められる状況にあった。女子総合大学を完成させるためにも、移転問題が当然おこってきた。

現在の附属中学校・同高等学校のある川崎市多摩区菅の十余万坪の地、通称西生田に決定をみたのは、一九三四年(昭和九年)九月であった。そして、一九三六年初めから小田急線西生田駅（現・読売ランド前駅）から、本校敷地までの道路工事が開始された。

具体的な移転地の決定によって、改めて、総合大学の実現と移転完成のための募金運動が始まった。一九三七年(昭和十二年)一月にその大綱が評議員会において決定され、桜楓会も活動を開始した。

附属校の父母会も募金委員会を結成して、援助をすることとなった。

この活動の開始は、重ねての皇后陛下よりの御下賜金授与ともなった。

募金運動の展開の一方で、広く海外の教育事情を視察するため、井上秀校長は、一九三七年五月から十月まで、欧米旅行を行った。

西生田駅付近
昭和11年1月，西生田駅から本校敷地に至る道路工事を開始し，11月完成。一時間に一本の電車が，二本になった。

昭和11年7月。敷地内の幹線道路工事開始，秋にほぼ完成する。山の木立の間をゆく，急勾配の道であった。

募金運動は当然学内の教育状況を刺戟した。式服及び校章の制定や、三十三回生による校歌の作成が行われ、学内に統一の気風がもり上ってきた。

家政学部・国文学部・英文学部の各部においても、それぞれ将来に向けての研究教育活動が顕著にみられるようになった。この時期に成立した研究会は数多い。

英文学部では新たに研究部をおき、まず、英文学史・文芸批評論・アメリカ文学・聖書文学・アリストトル史論・修辞学などのテーマによって教員が指導に当った。また、シェクスピア劇の上演が一九三六年以降行われ、島田重祐先生の島田賞論文発表会、英文学研究会なども定例に開催されるようになった。

国文学部の研究部としては、近世文学・近世文学の文体史・漢文学・和歌などの研究から始められた。一九三三年(昭和八年)以降、関西方面に研究旅行を行ったり、展覧会の見学、研究発表や国文学研究会（一九三六年成立）を開催していった。

家政学部では家政研究会を組織し、晩香寮を研究室にあて、衣服・食物・住居・児童・家庭管理・教育・技芸等に分れて研究発表を毎月一回ないし二回行っていった。

金物献納　「締切日までに108名，517点という取扱数を得…実に時局への正しい認識が…」家庭週報 昭和14年7月7日

腹巻き献納　日中事変一周年を記念して，寒冷の地，中国で戦う兵士のために，桜楓会員，学生がともに協力して編み棒を手に……

第五章　戦時下の学園

1　学園の戦時体制化

一九三七年（昭和十二年）七月、日中戦争が勃発した。満州事変以来の戦時体制はより強化され、国民精神総動員法の下に、戦争遂行のため国家をあげての組織化がすすめられた。

教育の場も例外ではなかった。献金、献品、慰問袋や千人針などの製作、戦意高揚のための講演会、映画会、防空演習や種々の勤労奉仕、軍病院や遺族の見舞、出征兵士の見送りなど、軍の援護活動が行われ、同時に戦時を生きぬくための錬成訓練が、それぞれの教育段階に応じて、種々の形で実施されていった。

本校の場合も大学部・附属女学校を主として次第に戦時色をつよめていった。日中戦争がはじまるとすぐ千人針と腹巻の製作があり、不用品の即売、献金、献品、陸海軍病院及び出征兵士の留守宅の慰問、勤労奉仕作業への参加がはじまり、一方、学校防護団を組織して、防空演習を重ね、時局認識を深めるため

慰問袋作り　手袋，くつ下など手づくりの品々が手紙といっしょに送られた。戦場の兵士と文通の長くつづいた生徒もいる。

千人針　一片の布に千人の女が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫玉を作り，出征兵士の武運長久を祈って贈ったもの。

1981年，戦場に送られるはずであった慰問袋が，地下倉庫から発見され，話題を呼んだ。その中に本校生徒のものもいくつかあった。

に軍人による講演会を催した。

一九三八年（昭和十三年）十月には、国文学部内に日本女性文化研究所を、開所した。同研究所は、文部省精神科学研究補助費を基礎として成立し、女性文化史の年表作成や、文献目録、史料カードの作成を行い、日本女性史の概説をまとめることを当面の目的として活動を始めた。

従来からある附属の児童研究所も、一九四〇年秋に、当時の国家的使命に対応するために改組し、これまでの児童心理部門の他に児童保健、児童教育、児童福祉の部門をおき、規約を改正し、活動を拡げた。

だが、平常の学園教育はさして変化がなく、家政学部では、家政学研究会、児童問題研究会、大陸生活研究会が、英文学部ではシェクスピア劇の上演、英文学研究会が開かれ、国際的な学生会議にも参加しており、国文学部では、関西への修学旅行、国文学研究会の活動がつづき、その他各学部で各種のグループ、クラブ活動があり、従来からの自治活動も活発に行われていた。

戦時体制の進展は、一九四一年（昭和十六年）一月に、井上秀校長が大日本連合女子青年団を吸収して新しく成立した、大日本青少

訓練参観　西生田での訓練勤労作業を，皇族，大臣がよく視察された。

防毒マスク　女子大学校で考案した手作りの防毒マスク。

救護訓練　訓練はよく西生田で行われるようになった。

年団の副団長に就任した時を境いに変化を来し、日本女子大学校報国団の結成に進んだ。学校報国団体制確立の文部省訓令が出される半年前のことである。

日本女子大学校報国団の目的は「肇国ノ精神及ビ本校創立ノ趣旨ニ基キ教育ノ全一的効果ヲ挙ゲンタメ教職員生徒一体トナリ教学ノ本義ニ基ク修練ヲ積ミ報国ノ精神ニ一貫スル校風ヲ樹立セントスル」にあった。報国団は全教職員及び生徒をもって組織し、六部にわかれて活動することとした。すなわち、総務部・文化部・生活部・鍛錬部・国防訓練部・奉仕部の六つである。国防訓練部は、防空・防火・救急・看護・炊爨（炊き出し）等の諸種の集団訓練を行い、国防的訓練の企画指導の他、本校特設防護団の常務をつとめる部であった。奉仕部は、銃後の国民としての奉仕は勿論、隣保及び有朋関係との協力事業、学内・共済事業などにも当ることとなっていた。

各部において諸種の会合が組織的に行われ、学年末に、主責任の学年全員及び他学年の委員の参加によって、次年度の計画立案のための協議会を開き、新学年のはじめに計画発表会を行い、毎週木曜午後は、報国団の計画の実行や修養会の時間にあてられ、年度末に総

救護訓練　救護訓練は忙しくても，また一方，沙翁劇の練習，関西地方の見学旅行も行われていた。

作業衣　三角布，白エプロンが作業時のきまり。小隊ごとにわかれ，太鼓の音で作業は開始された。

「1．我等ハ勤労を尊ビ心身ヲ鍛錬シ奉公ノ誠ヲ尽サン事ヲ期ス」信条宣誓より。誓ったあと，作業はつづいた。

心身鍛錬道場1. 附属高女の護身術と弓道の道場は六月初から開かれ，夏期の訓練期間にも開かれます。—家庭週報昭和14年

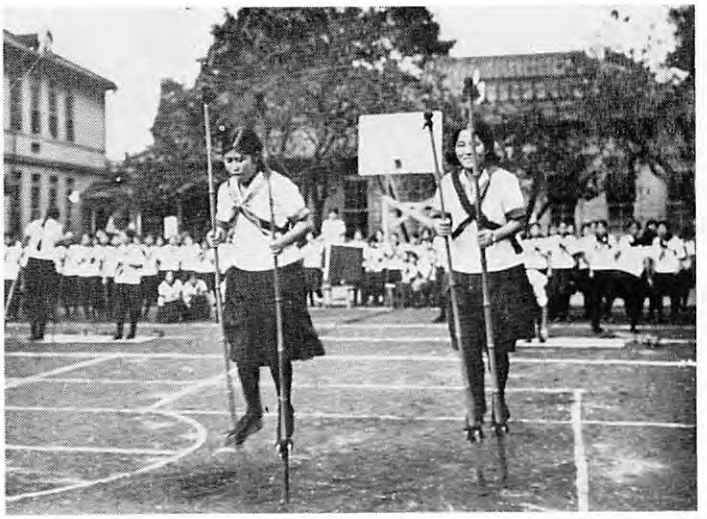
2. ……**護身術**，弓，水泳，テニス，ヴァレーボール，団体運動に柔道，習字をも加えて健康な心身を創り上げ　　—同上

会が開かれ、一年間の反省を行うのが例であった。

報国団体制をとることで、従来の学生自治生活の態勢とは自ら異なり、国家総力戦態勢に即応する集団活動になっていった。

同じ年の十月に「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」が勅令として出され、同年度は三か月の年限短縮、翌年は六か月の短縮が予定された。このため、該当する学年（第三十九回生）は十二月二十七日に卒業式を挙行した。すでに十二月八日には真珠湾の奇襲攻撃によって、米・英両国に対し、宣戦を布告し、太平洋戦争に突入しており、緊迫したものがあった。しかも当然のことながら、いつものような附属諸校と合同の式ではなく、専門部単独の卒業式であったから、特別の感が深かった。しかし、急な決定であったので、卒業後も研究科生として修学する形をとり、翌年三月に修了、各地に散っていった。

この間、アジア諸国との交流を深める目的で、井上秀校長、大橋広家政学部長他、諸教員が、当時の満州や北支那の各地に、開拓民の実状や教育状況視察及び中国の状況を知るために出張したり、学内では、「大東亜共栄圏



竹馬　日本式バスケットといい竹馬といい，体育への取り組み方は斬新だった。

3．終業式を14日にくり延，其の前後二期にわけ夏期心身訓練を行う。第一期７月10日～15日 第二期７月12日～22日――同右

一本歯の下駄でバランス感覚を養う――これまた見事なアイディアである。

の友の集い」「新中国の教育視察団の歓迎会」「留学生交歓会」を開いたり、「南洋講座」を継続的に設けるなどの動きがみられる。

戦時体制化の中で、注目すべき二つの行事についてみてみよう。

一つは「山の集い」である。これは従来から毎年行われてきた運動会と、国家的政策となってきた勤労奉仕と、西生田移転運動の三

日輪舎　土間に面し両端に簡易な机が10ずつ並び土間には２つの自在鉤が吊されていた。真中の柱には農夫の鉈入れが花瓶がわりにかけられ，山中でつんだ草花が生けられていた。

木植　西生田の斜面に，記念日ごとに木を植えるようになり，桜，楓の若木が…

持鉢食事法　ナフキンに包まれた５つ揃いの椀を使い，懐紙を左に置いて頂く食事法。

者を一つにして行われた行事である。

例えば第一回の一九三八年（昭和十三年）十一月のプログラムは、第一部が運動競技（午前十時より十一時半まで）で、君が代斉唱、国旗掲揚、宮城遙拝に始まり、会長挨拶があって、幼稚園から大学までの体操、球技、リレーなどの競技が行われ、愛国行進曲による行進で終っている。第二部は昼食、第三部は敷地案内及び勤労作業（午後一時より二時二十分まで）で、芝まき、草とり、大根引き、開墾並にさやえんどうまき、堆肥づくり、薄とり、芋堀り並に苞つくり、薪たばね、ベンチ制作、松笠ひろい（幼稚園）、ハイキングにそれぞれわかれて参加し、第四部はコーラス並に行進（午後二時二十分より三時まで）で、大学部による皇軍祝勝の行進と愛国行進曲、大日本の歌、日本青年の歌のコーラスで終っている。

「山の集い」はこれ以後、同じようなプログラムでつづけられ、次第に組織立っていった。この集いの中心となった、日輪舎の建物は敷地内の山林から集められた木材で、先生方の指導の下に生徒の勤労奉仕によって建てられたものであった。

二は戦時家庭経済展覧会の開催である。戦

山の集い　グランドいっぱいにくり広げられる体操。

行進　運動会の最後を飾る見事な行進。プロミネード。

生徒もお芋のおみやげを載いた。太ったお芋をぶら下げて歩いている様子は仲々楽しいものである。家庭週報。昭和11年11月30日

争が国民生活経済に大きく影響してきている時であり、家政学部を中心に、大蔵省・商工省・文部省・厚生省・朝日新聞社・桜楓会の後援を得て、一九三八年十二月、三越本店で開催した。その後、仙台・大阪・神戸・京都・名古屋・福岡・熊本・岡山・静岡・浜松・新潟・広島・札幌で開催し、大好評を博した。

この展覧会は非常時の家庭予算立案のために、生活費の予算、生計調査の総括から、食物費・住居費・家事運用費・教化費など個々の

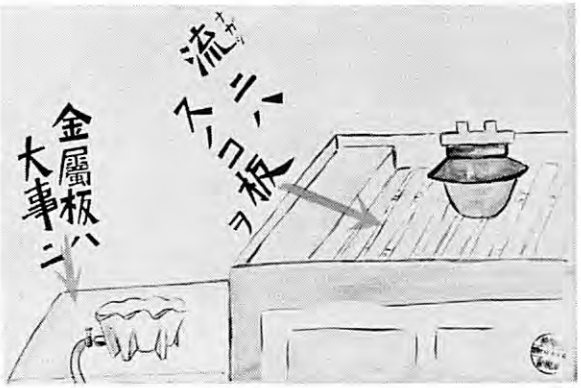
山の集いをむかえて——

過日私達は最善を尽せと教えられました。最もよき機会が今与えられたのです。始めての催し故に色々と不備な点もある事と思いますが、西生田の地に我等の楽園、理想の花園を作り上げようとしている私達の意気を御覧になって下さい。

紅葉の美しさは眼を奪うものがあるでしょう。しかし更に美しいものは大地をしっかりと踏んだ学生の頼もしい姿であらせたいものです。

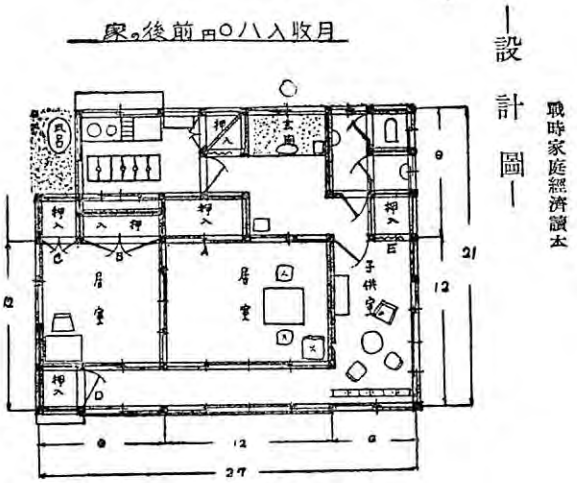
（家庭週報、学生欄より）

大人紙芝居　種目は14，9箇所での上演に備え，書き上げた画面は1935枚。これをわずか2日間で書き上げたという。しかも，会期中の入場者は58,173人。各地から上演の申し込みが殺到。話題をさらった。



運用についての検討もされ、理論と実際の両面から解説し、図表や模型なども用いて魅力ある展覧会とした。展覧会の会場の一角には、「家庭経済相談所」を設けて質問にも応じた。この展賢会の内容は『戦時家庭経済読本』及び『戦時家庭経済料理』の二つのパンフレットにもまとめられ、パンフレットは好評でよく売れた。翌年六月にはいわゆる百億貯蓄運動政策に際して、戦時家計・生活刷新相談所を東京のデパート九か所で開き、同時に学生の脚本と作画による「大人紙芝居」も行ったが、各方面から実演希望が殺到した。さらに、一九四〇年（昭和十五年）には、東京府社会教育課・国民精神総動員運動本部よりの懇望で、「生活刷新・上手なくらし方指導」にあたったのをはじめ、「配給物資の合理的使用法講習会」などを開いていった。

家政学の草わけが本校であるという自負のもとに、桜楓会と共に社会的活動を積極的に展開したといえよう。



戦時家庭経済展覧会　「時局に鑑み，私共学窓の者も亦いささかながら奉公の微力を致し度き念願にて…以て私共の教育報国の実を挙げたく…」——案内状より。

戦時家庭経済展より

月収八十円前後の生活を標準に、食物費、住居費、被服費、教化費、家事運用費、常備費の六項目にわけ、非常時予算の立て方、その工夫を詳細に実物を作り、図解し、立体的に発表したもの。

①食物費　二八円八〇銭を当てる。
- 冷凍魚を使おう。
- 小児の間食について考える。

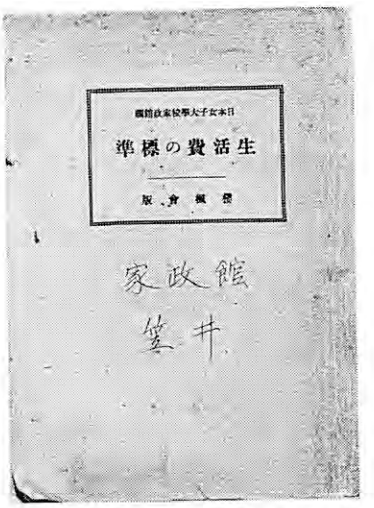
②住居費　十六円を当てる。
- 良い間取りで広く使う。
- 改良押入れの紹介。

③教化費　七円二十銭を当てる。
- 子供に高等教育を受けさせるための貯蓄分を含める。

④常備費　一六円八十銭
- 貯金、公課の予算化。

⑤被服費　四円八十銭を当てる。
- 平時の半分に、手持を上手に大事に使い、買わない。

⑥家事運用費　六円四十銭余。
- 照明、燃料を節約する。



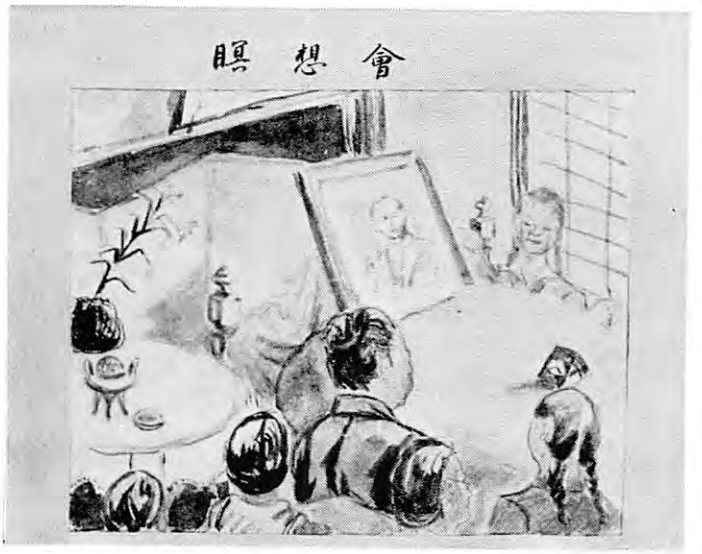
生活費の標準　昭和3年度の物価を対象に，家政学部の研究によってつくられた標準生活費の決定版。戦時家庭経済展覧会の基礎となった出版物である。

4時～5時　自由時間。5時　夕食　5時30分～6時　増産。6時　帰寮。

5時　起床。6時　朝の瞑想。6時20分　朝の掃除。6時30分　朝食。

6時30分～8時50分　夜の自習。8時50分～9時　夜の瞑想。9時終礼。

7時～8時　朝の自習。8時50分　登校。12時　昼食。



9時30分　消燈。消燈後　乾布摩さつ。

修練生活の一つとして，瞑想会があった。

各寮のあけくれである。

寮のあけくれ——

寮取りこわしの際、寮日誌とともに発見された絵日記で、水彩で淡く色づけされている。「寮舎生活時間」と「修練生活」の二つにわかれる。作者はわかっていない。

「修練生活」によると、寮のその活動は、

1　防空訓練　　待避　救急
2　日旺ノ朝　　蒲団干シ、参禅会
3　兼習　　茶ノ湯、生活
4　係及び班会
5　瞑想会
6　墓参

寮舎防空本部、ポンプ訓練、梯子操作にわかれていたらしい。貴重な資料である。

この頃の係活動には，隣保との共同をうたう係がある。その表れが農繁期託児所であり，当時としても新しい地域との結びつきであった。そのため，皇族も多く見学された。

菅の農繁期臨時託児所　西生田一部移転が完了するや，地元からの要請もあり，田植，春秋に多忙な菅に学生，桜楓会員の協力による託児所が開かれた。

2　勤労動員の強化

一九四二年（昭和十七年）には、日本女子大学校創立四十周年を記念して、五月十日に西生田校地において、新校舎落成の披露を兼ねて祝賀会が行われた。この四月から家政学部第一類及び第二類の四年生、国文学部と英文学部の二年生が西生田で学んでおり、西生田に女子総合大学を設立する一歩がここに始まったのである。

式後、校内特設防護団の訓練と学生の勤労作業を行う畑などの巡覧と、四十周年記念映画の上映、同資料の展示などがあった。

なお、四月には『日本女子大学校四拾年史』が刊行されている。

西生田の開校によって、これまで西生田校地の整備を中心とした勤労奉仕はより広げられることとなった。地元菅部落から農繁期託児所の開設と菅町公会堂通俗図書館新設の指導を依頼され、戦時下の銃後の農村の援助として報国団活動に組み入れ、経験のある桜楓会員の応援を得て実施した。秋には菅部落・細山部落に託児所を開き、細山部落では共同炊事の指導をし、同時に児童問題の研究をも行った。以後、戦時期を通じ、春、秋の農繁

昭和17年6月17日，菅の臨時託児所開き。南武線稲田堤下車5分，公会堂が当てられた。

児童は男女あわせて70余名，4歳～6歳で泣いたり騒いだり，にぎやかな開所風景だった。

期に両部落で活動をつづけた。

戦局の不利が目立ってくるのと対象的に、教育政策の戦時色はますます強まっていった。

一九四三年（昭和十八年）四月、高等女学校規定が改正され、教科の重点的編成と修錬を課すことが決定され、修業年限も四年に短縮された。翌年には、女子専門学校も道義・人文・家政・体錬の四科目を共通科目として設定することとなり、年限も三年に短縮された。すでに「女子勤労動員促進ニ関スル件」の発令によって女子代替の職種が指定されていたが、「決戦非常措置要綱」（二月）で、中等学校以上の学生生徒の一か年の常時動員と、学

――農村の子供と暮す――

家庭週報より

よい母となって、子供を導いて行き度いと毎日を努めて来たが、一人だけ最後まで自分の名前を云はない、よれよれの汚れた着物を着て、何時すいたか分らないボーボーの頭をした子供がいた。私はその子と話をして見たいと思って「どうしたの」、「さあさあ遊びませうよ」と、元気づけた。

……それからその子は、何となく私達の傍によって来るようになり、ハンカチ取り遊びを見ていて、翌日汚れたハンカチを差し出して遊ぼうと後を追ってきた。

―もっともっと子供の一人一人の心に深く入り込みたかった。一日がだんだん短くなって、やっと心にゆとりが出来るようになった頃はもう限られた日数の残りは僅かであった。生活訓練を主にしたが出来なかった仕事も多く残念に思う―

国文学研究叢書　昭和17年12月に卒業した39回生卒業論文の中から優れたもの3点を選び，国文学科が出版したもの。

英文学部の島田賞に対し，国文学部学生の研究奨励の意味を持つもので毎年刊行を予定したが，戦争がきびしく第一集のみで終った。

エプロンモンペ姿の教室風景

校の軍需工場化が容認されていた。六月には十時間の勤務延長、一週六時間の教育訓練時間も停止し得ることになり、教育体制そのものが崩壊する段階に立ち至った。八月には「学徒勤労令」「女子挺身勤労令」が出て、動員も徹底化し、一九四五年(昭和二十年)の四月よりは、国民学校を除きすべての教育機関は授業停止となった。

以上のような異常な教育状況の中に、本学園もおかれたのである。

学園組織としては、高等女学校の改組につづき、大学部も新学制をとった。家政学部は育児科・保健科・管理科・家政理科を含む家政科となり、文学部は、国語科・歴史科（新設）・外国語科（英語）を含む、文科と名称を変更した。

学徒動員はさらに本格化していった。

随時、本校や西生田校で、校内外の清掃作業や畑の勤労増産に、様々な軍人援護の活動に励むと共に、文部省その他の指定によって勤労作業に出動した。例えば、附属高等女学校は、葛原工業・理研電具・金門金属・被服本廠・凸版印刷・鶴岡計器・理化工業などに出動した。

大学部では、平常の勤労奉仕活動の他に、

学徒勤労動員として―

戦いの中の青春　昭和50年6月5日発行。43回生の卒業30周年記念として出版される。

あのむごい歴史を生きてきた重さをここにとどめ，正しいあすへの橋渡しとして，その責任の一端を果たせることを祈って――あとがきより。

戦時色濃厚な様々な研究と展覧会、講習会などを教員の指導や桜楓会員の助力を得て行った。その他附属高女と同様に軍需工場等へ勤労動員に赴いた。特に家政学部一類、二類の三十三名による「日本女子大学校生徒満州開拓農家生活建設協力隊」が組織され、一九四三年八月の約一か月間、吉林省舒蘭県小城の郡上開拓村で作業に従事し、中国東北部や朝鮮の見学をも行った。同年末には、学校工場が他の学校にさきがけて準備され、電波兵器の部品製作を行うこととなった。

一九四三年十月、文部省主催の学徒出陣壮

――「戦いの中の青春」より――

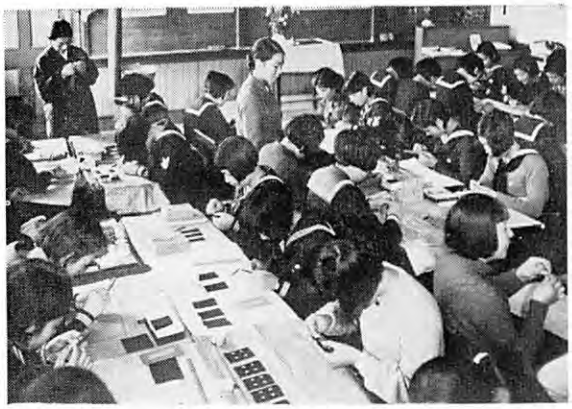
◆勤労動員による工場にいる間、友人から本を借りて、昼休みや帰寮後、とにかく機会をみては本を読んだ。トルストイ、ドストエフスキー全集……

◆空襲が厳しかった時に、大井みのぶ先生が、「これだけはいつも持って逃げるのよ」とおっしゃって、風呂敷包みの原稿や資料を防空壕で示されたこともある。

◆母校の香雪化学館二階の化学実験室で、硫酸マンガンの精製が住友化学工業株式会社配属のもとに始まった……乙女心を満足させるもののない中で、いつも流れた歌があった。

　薔薇花咲く　陰に伏して
　歌を枕に　仰ぎ見れば……

◆近頃、私自身の死を怖れはしないが、人生への夢は捨てきれない



学校工場　ノートをとることよりも，まず国のために出来るかぎり働くことが先だった。

学生援農隊　農繁期の農村へ手伝いに一。

勤労作業　作業場へ出発，モンペ姿にゲートル，毛糸編みのターバンが日常の服装だった。

行会が秋雨のそぼふる中で行われ、全学生が、学徒の門出を見送り、残る者をふるい立たせたが、先述の「決戦非常措置要綱」にもとづき、学徒動員の組織の細目化が計られ翌年四月には第一次の出動動員命令が下った。

第一次出動第一隊は家政科第一、二類の四年生が海軍技術研究所・日本無線・住友通信工業に、第二陣は国文学部三、四年生が陸軍第一造兵廠へ、英文学部四年生が日本赤十字社へ赴いた。

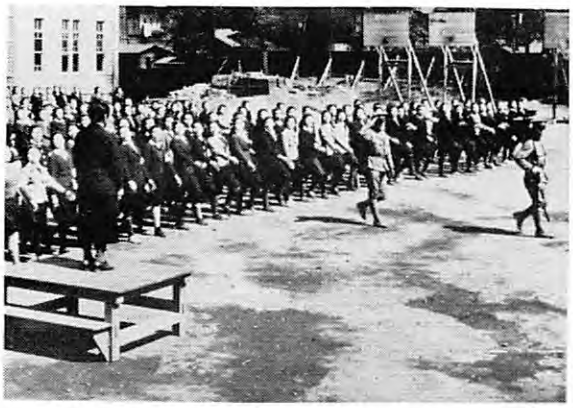
六月、第二次の動員命令が下り、残りの二年生以上の生徒が、おもに航空機関係の軍需工場に配属された。七月には附属高女五年生も出動した。上級生の出はらったあとの下級生は、学校工場その他の活動にまい進していたが、九月、家政管理科の一年生が陸軍兵器補給所に動員された。

いずれの動員にも厳粛な壮行会が行われ、勤労意欲をもり上げた。

学徒動員によって、学業よりも動員生活が中心となり、作業能率をあげることが第一とされたため、目白の各寮は寮生を移動し、動員先別としたり、動員先に寄宿舎を設置することもあった。卒業時を迎えた学生も、国民皆働態勢の中で、殆どの者が卒業後も何らか

ズキン　「夜はズボンや靴下をはき，オーバーを着たまま，枕元に防空ズキンを置き寝る」……

防空演習　校庭でも寮舎でも，消火操作のさまざまな訓練がくり広げられた。



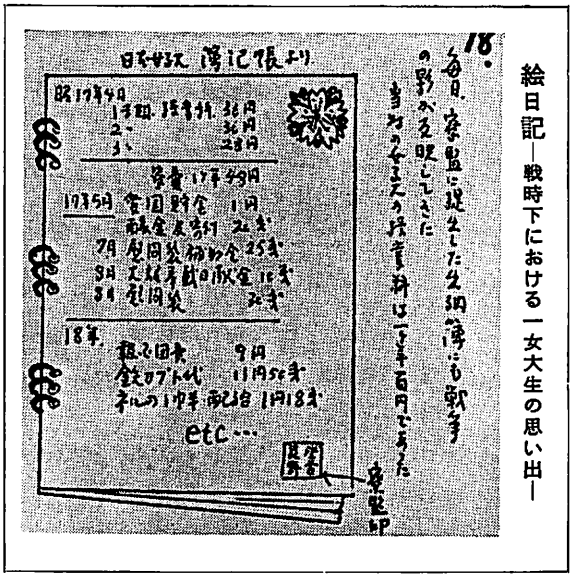
教練　昭和18年３月16日，学徒良兵教育の軍事教練が行われた。目白の春は教練たけなわ。

校庭の植え込みの陰に，あちこちに，大きな穴が掘られ待避壕に。バケツリレーも盛んだった。

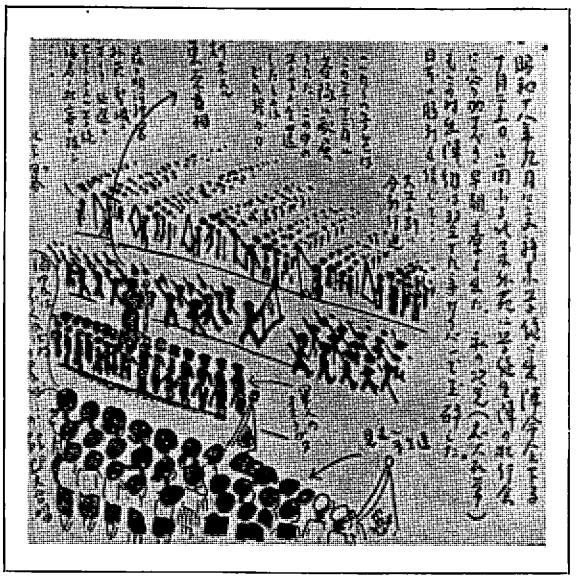
の形でひきつづき就業し、戦力増強に一役買うことを決定し、中には作業の都合上、これまでの現場に止るものもあった。卒業式に動員先の会社の幹部が来賓として出席したのも、戦時下らしい光景であった。

しかし動員はもともと不馴れな仕事であり、次第に昼夜をわかたずに発令される空襲警報や機銃掃射をも、受けるようになり、不足勝ちの食糧と疲労が重なって、帰郷する者、病気になる者が増え、一人二人と欠けていった。戦局が絶望的になるにつれ、動員先も材料不足や焼失で生産ストップの状況に追いこまれていった。度重なる空襲の中で目白の寮舎近くに焼夷弾が落ち、学監、寮生、近隣の人々の協力で、かろうじて消しとめ得たのは不幸中の幸であった。

昭和18年3月，学生の工場への勤労奉仕が始まり，下谷凸版印刷へ行く。一日中の立ち仕事は身にこたえる。西生田での農業作業も強化された。西生田は山の中，時にはもぐらも顔を出す。手が豆だらけになった。



昭和17年3月末のある日，田舎出のニキビ面の一女学生は生れて初めて故郷を離れ，おそるおそる女子大の門をくぐった。家政科一類に入学，満16歳也。……毎日提出した簿記帳には，慰問袋30銭と戦時色を反映する。



昭和18年10月21日。小雨ふる代々木外苑に学徒出陣の壮行会が開かれ参加。12月には冬休返還が決定される。学業をやめて国のために働きたい，という学生もでてきたが，大橋広部長は「待て」と訓示された。

当初，まだ英語の授業はつづけられていた。英文館の教室より目白の舗道を見おろし，外国行きを夢みていた。早稲田鶴巻町にバクダンが投下され，大騒ぎになった。白い三角布をかぶり，目立つと注意されショゲかえる。

昭和19年，３年に進級するとすぐ大森の海軍被服廠に挺身隊として従事，厚いラシャの軍服にボタンホールをするのが仕事。この年７月，サイパン島玉砕，敗戦の色は日増しにこくなっていた。

慰問袋作りも始まった。物資不足の折から，手作りの品などを入れた。19年９月，ビルマ全滅，フィリッピン沖海戦，神風攻撃隊…そして終戦の時，私は学業半ばで故郷で俄か軍人と結婚した――戸田聡子。『戦いの中の青春』より。

――『戦いの中の青春』より――

◆この頃、寮では、警報がでない夜は、動員先が別々の幾人もが、疲れたからだで図書室へ集まり、読み分けや朗読をする。「シラノ・ド・ベルジュラック」には感激したし、「桜の園」の時は見事に盛りあがった。

◆「マルテの手記」を非常な期待をもって慎重に読みはじめる。今朝はいつものように七時十分に目白の寮を出たのに、警報に阻まれて十一時近く、東生田の研究所に着く。

◆何もかもが焼けてしまった頃「家は焼けても俺たちの意気は焼けない、エーゾエーゾ」という、震災の時流行した歌が巷に歌われ始めた。その底ぬけな明るいメロディに、もう私達はついて行けないやりきれなさを覚え、「戦争が終った時の死に方」を考えていた。

◆誰かが三類のポータブル蓄音機を運んで来て、私はヴェートーベンの「田園」のレコードアルバムを持って行った。工場のバラックの二階の作業場で、交替で手回しで聞く「田園」は、昼休みのひと時、煤煙の工場も忘れさせ…

冬，子供たちは“火のないこたつ”を考案した。机の上にふとんをかけ，足を入れお互いにこすり合う……水道も凍り，ツララに指先をぬらしてプルン，洗顔にかえる軽井沢の冬，その発明はなんと切ない知恵だったろう。
でも，みんな元気で，“楽しかった”といま，口をそろえていう。

軽井沢学寮　疎開した児童は約100名。泣き泣き上野を発った児童も多かったという。

「零余子（むかご）」会という会が，当時をなつかしんでつくられている——

3　軽井沢への疎開

一九四四年（昭和十九年）六月から政府は段階的に学童疎開を奨励し、翌年三月には、「学童集団疎開強化要綱」を決議した。東京都も同様な通諜を発し、私立校も各区単位で、縁故疎開の出来ない者を集団疎開させることとした。本学園は宮城県が疎開指定地であったが、軽井沢三泉寮の施設を利用することにし、特例が認められ、一九四四年九月より「日本女子大学校附属豊明初等学校軽井沢分教場」が設立された。

約百名（開設時三年十四、四年十三、五年三十三、六年四十一）前後の疎開児童が翌年十月まで、けなげにさびしい一年余を送ったのである。軽井沢は夏の避暑地であり、九月に入れば長袖のほしい高冷地であり、食糧事情もよいとはいえず、いたどりの入ったご飯をたべ、わらびをつみ、じゃが芋やかぼちゃもつくった。翌年五月よりは一年生、二年生も加わった。

学徒動員先が灰燼に帰したり、家が罹災したり、郷里が長野地方であったりした学生に対し、三泉寮を拠点にする開墾生活をよびかけ、同じく五月より大学寮が始まった。空襲

まき拾い、いっぱい拾った人がたきびの時、いちばん火のそばに。

除夜の鐘のかわりに警戒警報が鳴りました――日記の一節より

＊日記の上段には　その日の献立が書き込まれている。

――軽井沢疎開日記――

大橋　美佐子

昭和20年1月2日

雪がふぶきのように降りました。いっぱいつもって五、六センチつもりました。起床が十時でした。二食でした(朝と晩)。お昼はありませんでした。

〃　1月3日

今日も二食でした。とてもおなかがすいてすいて、たまりません。

〃　4月18日

「午前中、全体でおせんたくにいきます。まくらカバーやふとんカバーを洗います」と先生がおっしゃいました。川の上流に行って洗いました。先生が「もう池袋も全めつですよ」とおっしゃいました。

がなく夜は安心して寝られるはずであったが、ノミやシラミに悩まされた。食糧もさつまいもの茎など食べられるものは何でも食べた。周辺の農家や協同組合などに援農隊として入った時だけは、白い御飯にお目にかかれた。

東京空襲が頻繁になると、目白もあぶないとの事で、学園の貴重な図書や重要書類を軽井沢へ疎開させた。荷造りの苦労があったが、戦後再び送り返されて、今も保存されている。

一九四五年（昭和二十年）八月の敗戦の前後は目白も西生田も軽井沢も情報が混乱した。特に占領軍に対する恐怖があり、急ぎ家族のもとへ帰るよう促したが、外地に家族のある人々は、不安な日々の連続であった。

大橋広先生，校長に　大学昇格の記念式において，先生は「今や混乱せる社会は，聰明なる女子の指導者を要求しております。諸子は真の自由と正義の下に雄々しく立って，大学生活を展開せられん事を」と述べられた。

家庭週報の復刊　戦後の婦人解放のよび声のなかで，日本女子大学校関係ばかりでなく，広く啓蒙的活動を行うことを，目標としていた。

第六章　日本女子大学の発足

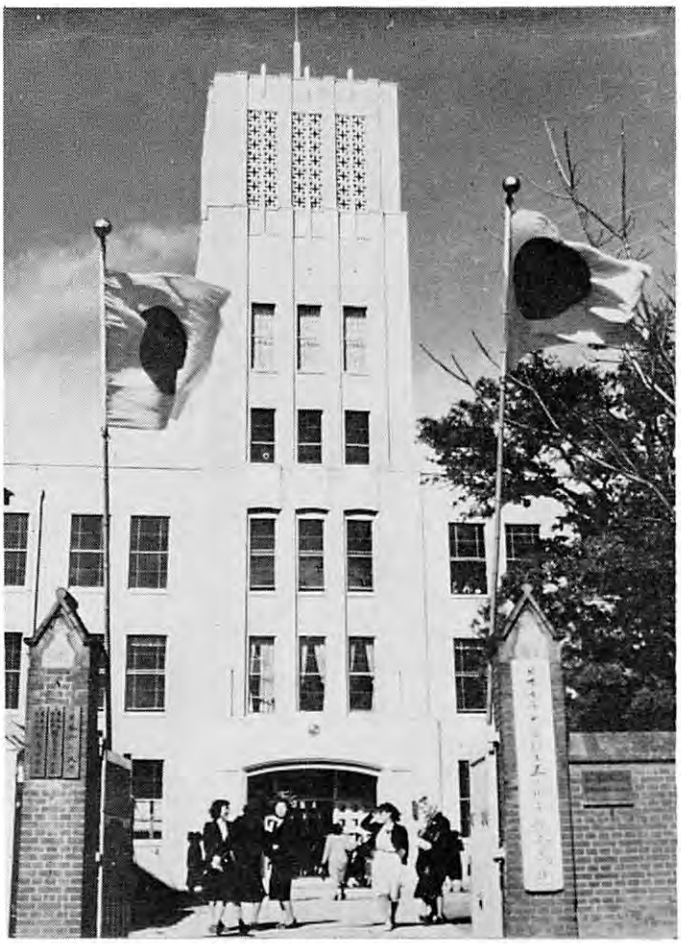
1　日本女子大学の誕生

第二次世界大戦が終結し、日本はアメリカを中心とする連合軍の占領下に入った。アメリカの初期の対日政策の基本は、平和的、民主的な日本政府の樹立であり、間接占領の形をとりながら、従来の軍国主義、超国家主義をくつがえし、新しい諸改革をすすめることにあった。十月の五大改革指令がそれをよく示しているが、その一つに「婦人の解放」がある。翌年四月、初の婦人参政権が行使され、次第に男女平等の施策がひろがっていった。

桜楓会の機関紙『家庭週報』の復刊第一号は、婦人と政治特輯であり、新しい時代の動きを語っている。

日本国憲法が公布され、教育に関しても、基本的人権の尊重にもとづく民主主義的な教育体制がとられ、教育基本法・学校教育法など新しい教育法規が出され一新が計られた。

女子教育についても、従来の男女別の学校



創立50周年記念式　昭和26年11月1日から6日間にわたって行われた。記念式に続いて2日以降は桜楓会，PTA，附属校園，学生，一般の人々と共に創立以来の念願であった女子総合大学の設立と，その発展を祝った。

女子大学校から女子大学へ――長い長い苦難の道であった

体系が一本化し、六三三制の確立と義務教育年限が九年間に延長されると共に、男女の同一内容、同程度の教育と共学が容認され、戦前とは全く異った状況となってきた。教科の中では、社会科と家庭科が新しく成立し、家庭科は男女共に学ぶ教科となった。男女教育の機会均等は女子教育の高度化を約束するものであった。

本校においては一九四七年(昭和二十二年)より、法律にもとづき、豊明幼稚園の再開、豊明小学校への名称の復帰、高等女学校の新制中学校への切りかえ、翌年には、高等学校の設置と体制が変えられていった。

だが、戦後における日本女子大学校の最大の問題は、戦前からの強い希望であった、大学への昇格であった。

井上秀校長は、新大学への日本女子大学構想をのべ、前期四年、後期二年以上の六年制大学を考え、前期四年は教養、専門性の両面によって女子高等教育の完成教育を目指し、後期二年以上のコースは、前期の総合的教育の上に専門性のつよい純研究的教育を行うとした。

この運動が緒についた時点で、井上秀校長は戦時中の活動のため、教職追放となり、校

通信教育　新しい大学の開放の課題である通信教育は昭和24年設置された。家政学の通信教育は唯一のものであった。上はスクーリング風景。

目白祭にも，参加。学生間の理解も深まっていった。

長を退任した。

ついで、第五代校長に大橋広先生を申請し一九四七年(昭和二十二年)四月より、校長その他の附属関係機関の長に、大橋広先生が就任されることとなった。

女子大学設立の運動は、他の女子専門学校と連携して、文部省や占領軍関係機関に働きかけることとなり、同じ四月に十六校をもって女子大学連盟を成立させ、国内外、主としてアメリカの女子高等教育関係省との交渉を深め、積極的に推進していった。そこで翌年四月より、他の四つの女子大学と共に、本校は最も早期に、新制度の女子大学として、誕生することを得た。

日本女子大学は、目白の校地に家政学部と文学部によって構成され、家政学部は児童学科・食物学科・生活芸術科・社会福祉学科・家政理学科一部(物理・化学専攻)・家政理学科二部(生物農芸専攻)の六学科、文学部は国文学科・英文学科・史学科の三学科であった。

ここに創立者成瀬仁蔵先生以来の長年の希望であった、女子大学が文字通り成立するを得たのである。五月には昇格記念式及び記念祭が五日間にわたって、盛大にくりひろげられた。

目白祭　本学全体の「研究熱の昂揚」をめざす自治会主催の学生の祭典だった。現在は目白祭実行委員会が主催。参加は自由参加であり，学部の参加は，以前のように多くない。

目白祭のプログラムは，年ごとに紙も印刷もよくなっていく，祭の内容も多様化をみせている。

さらに翌年には、日本女子大学通信教育部（家政学）を開部、桜楓会も小規模ながら、桜楓学園を開設した。戦後における大学拡張運動の再開が早くも実現したのである。

次の年、一九五〇年（昭和二十五年）四月には、文学部に教育学科が増設され、文学部は四学科となった。

新制大学発足は、当然、名実共に大学にふさわしくあるために、内容の整備が求められたが、それは同時に、創立五十周年記念に向かっての様々の計画と活動となった。一つは教育施設の充実である。これまでも建物の補修や増築や小規模の新築が行われ、特に体育館を改造した開架式図書閲覧室は、重要な施設であった。さらに五十周年を記念して、正門の前に鉄筋コンクリート三階建の泉山館が落成した。こうした建造物の設立には、一九四九年（昭和二十四年）に成立した、泉会の役割が大きい。泉会は日本女子大学の「学校教育施設の整備と学生指導の連絡を図り、日本女子大学の使命達成に寄与する」ことを目的に、保護者を主な会員として発足したもので、泉会の活動を背景に、日本女子大学建設会が結成され、助力するところが大きかった。

創立五十周年にあたって、財団法人から学

日頃男子学生の訪れることの少なかった当時だけに，その日のにぎわいは，はなやかだった。

学部別に内容を検討し，まとめていく——上級生，下級生，縦の会あげての参加だった。

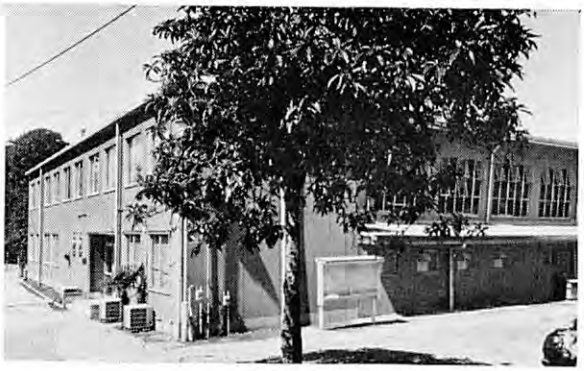
学部の発表のほかに，クラブ別の参加も多かった。夜を徹して準備にふける日もあった。

八角形の学生食堂

学長の理想的な教養の殿堂とする主旨にのっとって、いづみ会館は単なる学生ホールではなく、食事も外部よりの職人は一切使用せず、料理実習として本学の学生アルバイトから選ばれている。井原、小川、伊藤の諸先生の御指導の下に一日三人のアルバイト学生に依って調達されている。献立は大衆的一般家庭的なものでカロリーも考え、現在ランチ（三十円）でその外にスープ（十五円）、牛乳、アイスクリーム等がメニューである。

館の収容人員は現在の処百六十人に過ぎないが、居心地が良いため一旦席を得た人は仲々立たず、入れ替えがよく行われないために御料理は七、八十人位はける程度で純益もわずかであり整理の必要がある。

——学生新聞より



体育館　昭和30年秋開館。それまで他校のコートを借り歩いていた運動部系の各クラブにとって，待ち望んだその日。

学生食堂　珍しい八角形の食堂は，法隆寺の夢殿にあやかった設計だという。木々に包まれた食堂だった。

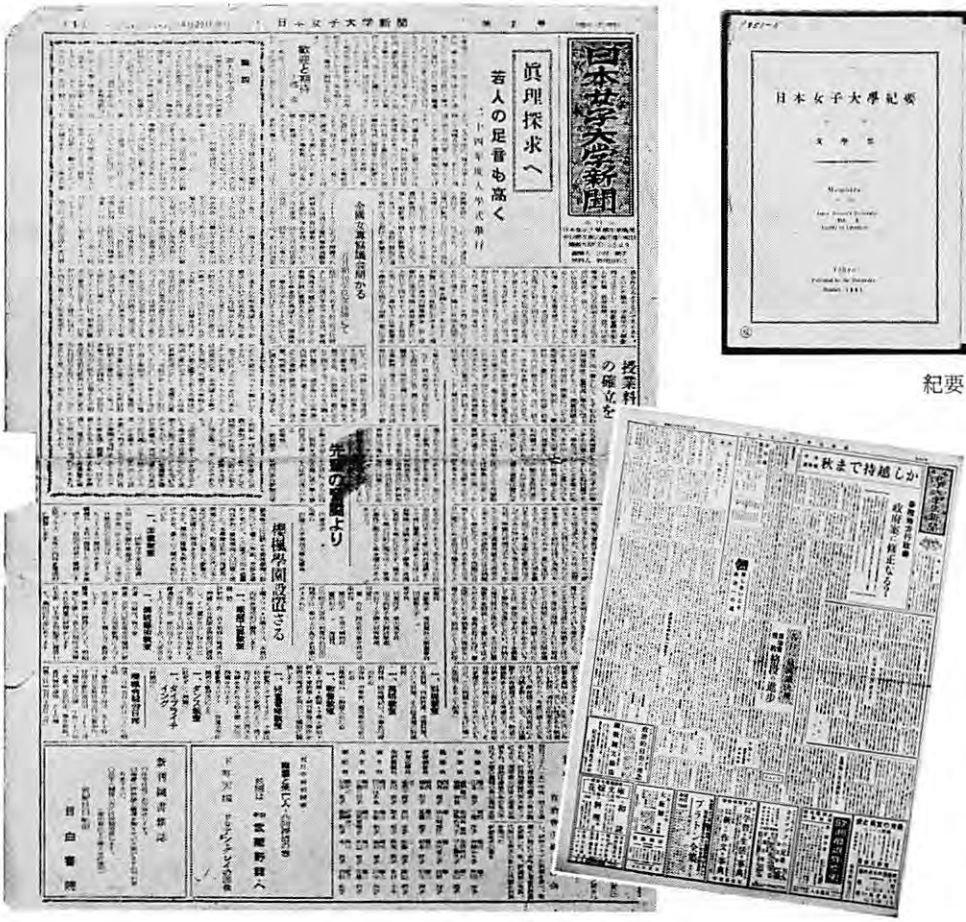
校法人日本女子大学に改組した。記念出版として、大橋広・仁科節編著『成瀬先生のおしえ』写真集『日本女子大学とその附属校』が刊行され、この年から日本女子大学紀要（家政学部と文学部の二部）が刊行されることとなった。秋には記念行事が華々しく行われ、各学科、各附属校、園においても、それぞれに、次の五十年に向けて意義ある出発を意図した。桜楓会の機関誌もこの年、『桜楓新報』と改題された。

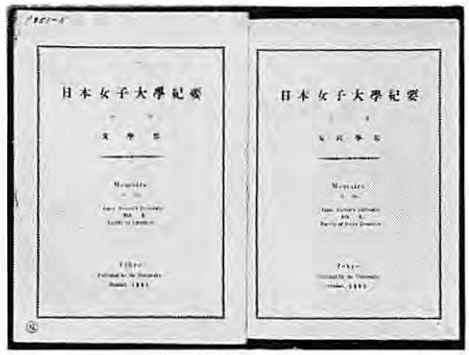
この間、一九五〇年の朝鮮戦争勃発を契機に、日本経済も次第に上向き、日米間に平和条約締結の気運が生れ、戦後状況から次第に脱してきた。

学園もいろいろな面で活気を帯びていった。一九五二年（昭和二十七年）には本学の附属研究所として新たに、日本女子大学農家生活研究所が設置され、毎年の調査研究のほかに、生活改良普及員の講習会を行うなどの活動を、家政学部の教員の協力を得て展開していった。

各学部学科においては、学会をつくり、機関紙を発刊するところ、様々の学会を本学が主催するところ、研究交流を行うところなど研究活動も活発化していった。

目白の校庭にはさらに法隆寺夢殿にあやか





紀要

学生新聞　昭和24年創刊された日本女子大学新聞は，昭和29年日本女子大学生新聞と改名。昭和43年学園騒動のあおりで廃刊。現在に至る。

って、八角形の建物の学生食堂が落成して、いづみ会館と名付けられ、体育館も新築された。附属各校でもようやく、戦後を脱し、大きな建物がたてられるようになった。

学園祭も開かれるようになり、一九五二年には高等学校で第一回もみじ祭が開かれ、翌年には大学で第一回目白祭が開催された。当時の日本女子大学新聞は、目白祭を学生の自治生活に有用ならしめるため、アンケート調査を行っているが、家政学部は九三％、文学部は八二％の学生が何らかの形で参加しており、その意気あるところを知ることができる。

この年の学生自治会は「信念徹底」を本年度の目標にかかげ、学務・教養・図書・体育・福祉・整理・企画・渉外・研究・新聞・経済各係にわかれて活動しており、クラブには、成瀬研究会・国連女子大支部・映画研究会・ソ研究会・YWCA女子大支部・歌舞伎研究会・社会科学研究会・コーラス部・聖書研究会・日文協女子大支部・バスケット部・ピンポン部・テニス部・バレー部・スケート部などがあった。

軽井沢の三泉寮の夏季寮が再開されたのも五一年からである。

上代先生学長に　「根強い国際不信と恐怖を払拭し，人類共有への大きな目的を実現するため，強く正しい世論が世界至るところに生れなければなりません」平和希求の言は力強い。

中央図書館
現在，全学蔵書数約29万冊。その半数が図書館の開架図書である。1日の利用者数約700人，貸出冊数は1日平均200冊あまり。

2　学園体制の刷新と拡充

一九五六年(昭和三十一年)四月、上代タノ先生が、第六代の日本女子大学学長に就任された。

長年の希望であった女子大学となることが果たされた今、次には大学をもつ教育機関にふさわしく、同学園が学問的あるいは教育的にレベルアップされることは勿論、制度、運用、施設などについてもより整備されることが重要な課題として登場してきた。

戦後十年、民主主義教育の中で成長してきた生徒、学生は、学内、寮とも自治的活動を活発化しクラブ活動も増えてきており、ゆれ動く社会現象にも敏感に反応し、全日本女子学生会議など、他大学との交流も盛んになってきていた。

旧専門学校時代から慣習としてきた従来の方法を墨守するのではなく、新学制にふさわしく、改善と脱皮と創造を、組織的に、計画的に合議によって進めることが必要であった。すでに学園内には、学園機構合理化委員会も発足していたが、上代学長はその推進者として、身をもってあたられた。

具体的には、学長はじめ学監・学部長・主

図書館内部　冷暖房，複写設備など完備され試験期は特に満員。夏期はまた，通信教育スクーリングで利用者が多く，にぎわう。

大学院　まず家政学部に，ついで文学部に大学院が設置された。現在2学部，8学科が設置されている。

事などに任期制、教職員に定年制を導入し、学部長・学科長の選挙制を定め、教授会の機能を再検討し、学科を編成がえし、大学院を設置し、学生の自主的研究活動をすすめ、自立意識と国際感覚を養うことに意をはらうなど、大小の改革が、学内外の助力を得ながら、次々と行われていった。

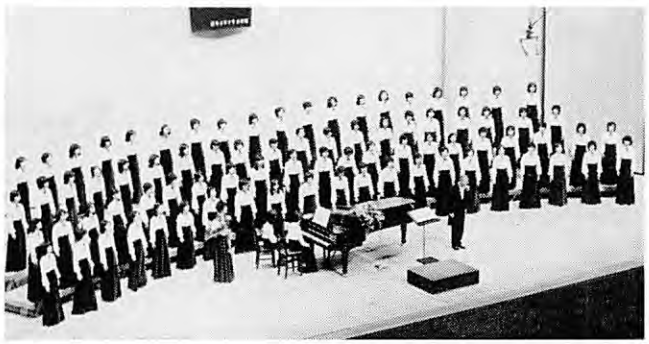
学園制度の変化としては、アメリカのウエルズ・カレッヂと姉妹校となり(一九五七年)、社会福祉学科が家政学部から文学部に移行し(五八年)、高等学校は目白校が閉鎖となって、西生田校に一本化し、社会福祉学科にセツルメント（現在の家庭福祉センター）が発足し(六〇年)、生活芸術科が、住居学科と被服学科の二学科にわかれて、より専門化し（六二年)、家政学部に家政経済学科が新設され、家政理科一部の物理・化学・数学の三系列の分化がなり、日本女子大学女子教育研究所が設置された(六四年)。

いずれも、時宜を得た、学園充実の措置であるが、重要な変化は大学院の新設である。アメリカのロックフェラー財団より、大学院設置のための特別な援助を得て、一九六一年(昭和三十六年)四月より、まず、家政学部に児童学専攻と食物栄養学専攻が設けられた。

はなひらくクラブ活動

バスケット部　一部リーグ3位，全日本学生選手権に2年出場と，少ない部員，部費の悩みにうちかって大健闘をしていたころ。

バレー部　同じ悩みに苦しみながら，関東リーグ一部3位と黄金時代。体育館が完成するまで，やはり宿かり練習の毎日だった。



コーラス部　昭和32年秋，はじめて日本青年館で公演を開く。同34年，全日本合唱コンクール大学の部で一位入賞。

ここに大学院をもつ大学として、教育研究の実をあげる第一歩がなったのである。私立大学では最も早い、大学院家政学研究科の設置であった。

学生指導のあり方も、学内相互の意志疎通を充分に計るために機構が変えられ、各学科に指導主任を、各学年に級ディーンをおき、各学科間の連絡、学生の学習補助、身上生活の補導、保健衛生、賞罰、保護者との連絡、会合、クラブ活動、自治活動、渉外事項などの相談にのることとした。学生相談室（現在のカウンセリングセンター）も設置され、個個の学生の問題にも対応するようになった。

一九五七年（昭和三十二年）は成瀬仁蔵先生生誕百年にあたっており、六月二十三日の当日には成瀬仁蔵先生生誕百年記念式を挙行した。以後、毎年生誕記念日として祝うこととなった。また、六一年（昭和三十六年）は本学創立六十周年であり、この二つを記念して、唐澤富太郎『日本の女子学生』、西原慶一『ものがたり少年成瀬仁蔵』、成瀬先生研究会編『今後の女子教育――成瀬仁蔵女子大学論選集』、『創立六十周年記念アルバム』など、創立者や本学園関係の出版物が刊行された。また、『日本女子大学校四拾年史』につづく学園

インジラ・ガンジー夫人は昭和32年10月父ネール首相と来日，22日本学を訪れて全学生に講演，平和のための人間相互理解は，教育を受けた女性の任務であると講演。

昭和35年足立区興野町に発足した家庭福祉センターは，39年みどりの家と改称，実習機関の機能も果し，地域に根ざした活動を続けている。みどりの家開園の日。

史の編集も始められた。（一九六九年に『日本女子大学学園史二』発刊）

長年続けられてきた、実践倫理の講義は、学内外の先生方を加え、講演が行われるように変ってきており、五九年度より、国際問題を主とする木曜講座も設けられた。

教育施設についても、幼稚園から大学まで増改築や新築（下浦海岸寮・大学寮・豊明小学校校舎・高等学校理科室・体育館・香雪館など）を重ねていったが、その中で特記すべきは、中央図書館の開館である。この図書館について、上代学長は「欧米先進国でもまだ比較的新しい学生中心の図書館を建設し、学生が真に自主的に研究することを体得するとともに、この図書館を中心とする学園の共同体生活によって、真の自己を発見し、自由人として創造の喜びと社会奉仕の貴さを自覚し、何ものにも動かされない固い信念を養うことに大きな期待がかけられております」と述べられているが、全館開架式の新形式の図書館となっており、学生の勉学を促進する、現在でも注目すべき大学図書館として機能している。

大学セミナー・ハウス設立にあたって……

国公私立の大学が、何等の差別なく、真理の探究と人間形成という共通の理想に向かい、力をあわせ、有無相たすけ、特に選ばれたすぐれた指導教授の下に教授も学生も互にひざを交えて相談の機会を与えられることは、今後の日本の大学教育の上に大きく深い影響を及ぼすのである。

大学セミナー・ハウスの構想を育てた最大の保護者は、上代たの・大浜信泉・茅誠司の三先生であり

……――セミナー・ハウスNo 41

（在・東京都八王子市）

有賀先生学長に　日本社会学会などの重鎮である先生は，豊かな趣味人で，「皆さんが歌をうたうときは，私も仲間に入れていただきたい」と，温顔をもって，その第一声を結ばれた。

3　学園変動の諸相

一九六五年（昭和四十年）四月より、七三年（同四十八年）三月まで、有賀喜左衛門先生が、学外より迎えられて、第七代学長に就任された。

一九六〇年代後半から七〇年代にかけては教育政策から教育現場に至るまで、大学紛争を中心として教育問題が噴出し、改変の嵐がふきまくった。これは世界的傾向でもあったのだが、国内では戦前教育の復活から戦後教育の飛躍的な改造を求める提言まで、様々な論議と運動が展開した。この時期の課題が短期的に解決をみたわけではなく、現在まで影響を与えていることは言うまでもない。

この時期の教育紛争の中心は大学にあり、一九六五年に二十数校の大学紛争は、六八年には一一五校に広がり、学生の授業ボイコット、校舎の占拠そして機動隊導入という事態がみられたが、六九年には「大学の運営に関する臨時措置法」が出て、紛争を刺戟し、紛争は高等学校にまで広がっていった。

こうした学園紛争の状況は本学においても例外ではなく、一九六七年頃からそれは顕著にあらわれてきた。大学の学部・学科のあり

社会福祉学科の学生から，教育方針およびカリキュラムに関し，疑問が提起された。

大学立法反対デモ　教授会，教職員組合の一部は，初のデモを目白駅まで行う。(6月27日)

社会福祉学科一科の問題ではなく，全学的なかつ学生運動の波にもかかわることであった。

安全保障条約の改訂と沖縄問題をとりあげて，自治会も活発に動きだした。

方や学科目編成・履修方法にまで及ぶ問題を、長期的展望で検討するため、教授会に教科審議会が設けられ、活動を始めていたが、翌年には教育組織特別委員会となって、検討を発展させた。学生の動向に対応して、学生指導部を学生部に改組し、寮運営も学寮審議会を設置して、寮監制を廃止、以後、学寮委員会制をとることとなった。

一九六九年(昭和四十四年)には学生自治会が、大学立法反対のストライキを決議し、六日間の授業放棄を行った。教授会も反対声明を出した。六月、七月には、大学立法反対のデモが、教授会、学生自治会の名で行われた。こうした状況の中で、社会福祉学科のカリキュラム編成に発して、問題がこじれ、解決が延引、四年次学生の卒業をひかえた二月十八日にようやく授業再開となった。こうした問題を含め、大学内での深刻な状況がつづき、特記すべき年度となった。

教職員組合が成立し、生活協同組合が設立されたのもこの年であった。

有賀学長は「全体としてみる時、それは本学外部の大学問題の状勢に影響をうけたとはいえ、本学内部に内在していた諸問題の解決への動きでないものはなく、この一年間にお

テニスコート開設　しっとりした和風寮のあとは，テニスコートに姿をかえた。

木植え　実践倫理は「教養特別講義」へとかわったが，木植えはいまも新入生の行事としてつづく。

新学寮　家族寮として設定され，長い伝統をもつ寮舎は老朽化のため取りこわされ，寮監制度も廃止された。

いて、いかに多くの問題が生じたかを知ることができるのであります。これは恐らく本学にとって終戦以来の最大の変革期であったと考えてよいでありましょう」と述べられ、その困難であった一年の概観をしておられる。

その後も、各学科のカリキュラム編成を中心とする検討の継続や、学生部を教授会による学生委員会制にするなどの改変がなされたが、学費や寮費の増額問題や七十年館の使用問題など、学生との話合いができず、学生も幾つもの派に分裂、対立し、混乱を重ね、学園紛争の状況がつづいた。

しかし一方、教育内容の向上もはかられた。一九六六年(昭和四十一年)には大学院文学研究科(修士課程)の日本文学専攻と英文学専攻が設置され、従来の実践倫理は「教養特別講義」として新しく開講し、その内容は毎年『日本をみつめるために』と題して刊行されている。六七年には、食物学科に食物学専攻と管理栄養士専攻と二専攻をおくこととなり、ソフト・ウエアーに関する研究の機関として、計算研究所が設置された。六九年には保健管理センターも発足した。

創立七十周年を迎えた記念事業としては、

(1)『成瀬仁蔵著作集』全三巻、大学紀要の記

念号の刊行がきめられ、(2)図書館の増築と、七十年館の建設　(3)日本女子大学学園基金の拡充が発表されて、実行に移されていった。

教育施設は、附属園、各校及び大学にいたるまで、さまざまな形で充実されていき、また、学生の勉学奨励のための奨学金も色々の方の助力で設定された。

70年館　学生食堂，生協，クラブ室，5階に保健管理センター，6階に調理関係研究室，実習室。

桜楓会と共に歩んできた実業部もこの館で活動していて，訪れる卒業生も多い。

成瀬賞受賞式　多くの賞が学生に，勉学への励みを与えている。

日本女子大学教養特別講義第一集

『日本をみつめるために』

芸術コース

西洋音楽と日本音楽　国立音楽大学教授　村田　武雄

日本演劇と西洋演劇　早稲田大学教授　河竹登志夫

思想及び宗教コース

原始キリスト教　東京工業大学助教授　八木　誠一

原始仏教の思想　東京大学教授　中村　元

国際事情コース

インドネシアの動向とアジア情勢　朝日新聞社外報部次長　斎藤　吉史

アフリカの情勢　国立国会図書館外務調査室主幹　西野照太郎

現在の中国　朝日新聞社調査研究室　蔵居　良造

最近のイギリスの政治社会情勢　東京都立大学教授　関　嘉彦

日本の研究コース

日本の近代文学　大岡　昇平

日本の社会と文化　日本女子大学学長　有賀喜左衛門

最近の物理学の進歩　東京大学教授　霜田　光一

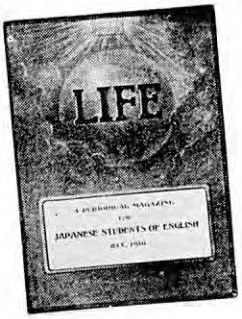
科学と人間　東京大学名誉教授　茅　誠司

人間について　東京大学教授・脳研究所所長　時実　利彦

日本人と宗教　日本女子大学学長　有賀喜左衛門

出版あれこれ——明治から現在まで——

〈大学出版〉



ライフ

女子大学家政講義　ひこばえ

日本女子大学校　学報

日本女子大学学園史

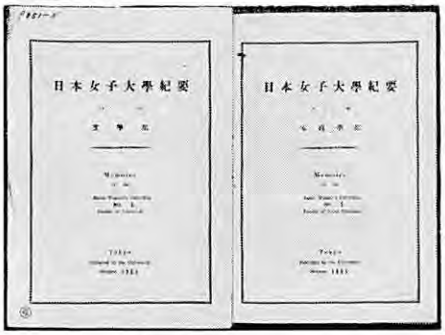
日本をみつめるために

日本女子大学とその附属校

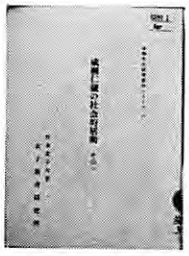
〈成瀬先生研究〉

成瀬先生記念帖

泉

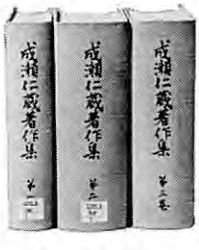


日本女子大学紀要


成瀬仁蔵の社会的活動

日　記

成瀬先生伝



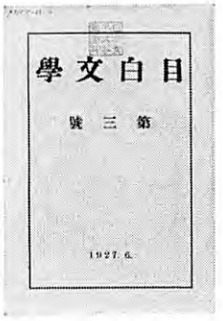
成瀬仁蔵著作集

The Mejiro Tatler

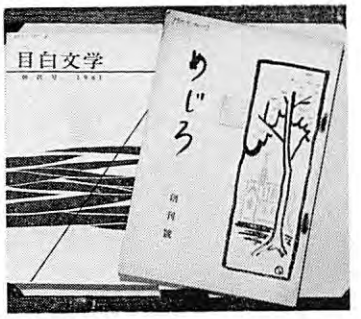
英文学科70年史

英米文学研究

国文目白



目白文学



めじろ・目白文学

Veritas

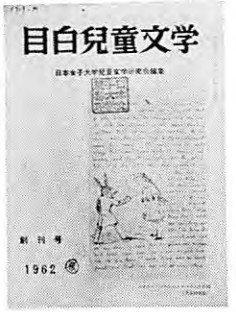
日本女子大学
社会福祉学科五十年史

社会福祉

史　艸

会　誌

海　賊



目白児童文学

人間研究

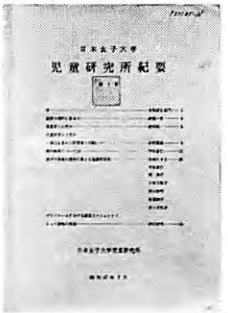
大学教育とカウンセリング

家政経済学論叢

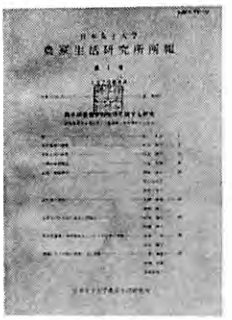
わらべうた

〈附属研究所関係〉

計算研究所情報



児童研究所紀要



農家生活研究所所報

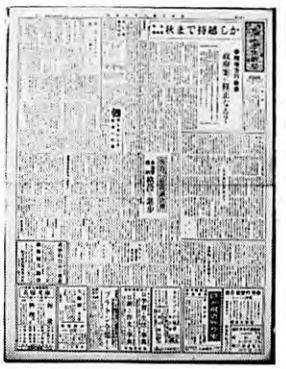
女子教育研究双書

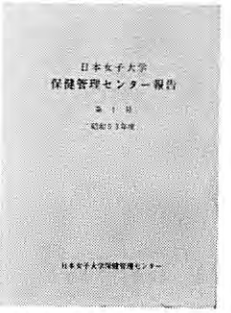
〈通信教育部〉

いづみ

〈学生自治会〉

学生新聞





保健管理センター報告

〈桜楓会出版〉

桜楓新報

家　庭

家庭週報

三つの泉

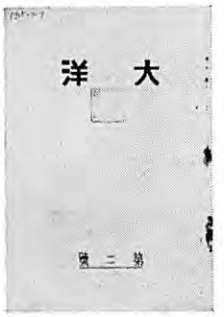
〈学生同人誌〉

蒼　空

〈図書館関係〉

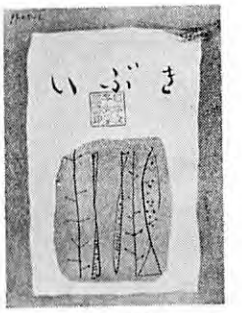
図書館友の会　会報

図書館だより



大　洋

丘の光・丘



いぶき

〈附属校〉

さくらナースリー

さくらかえで

わかたけ

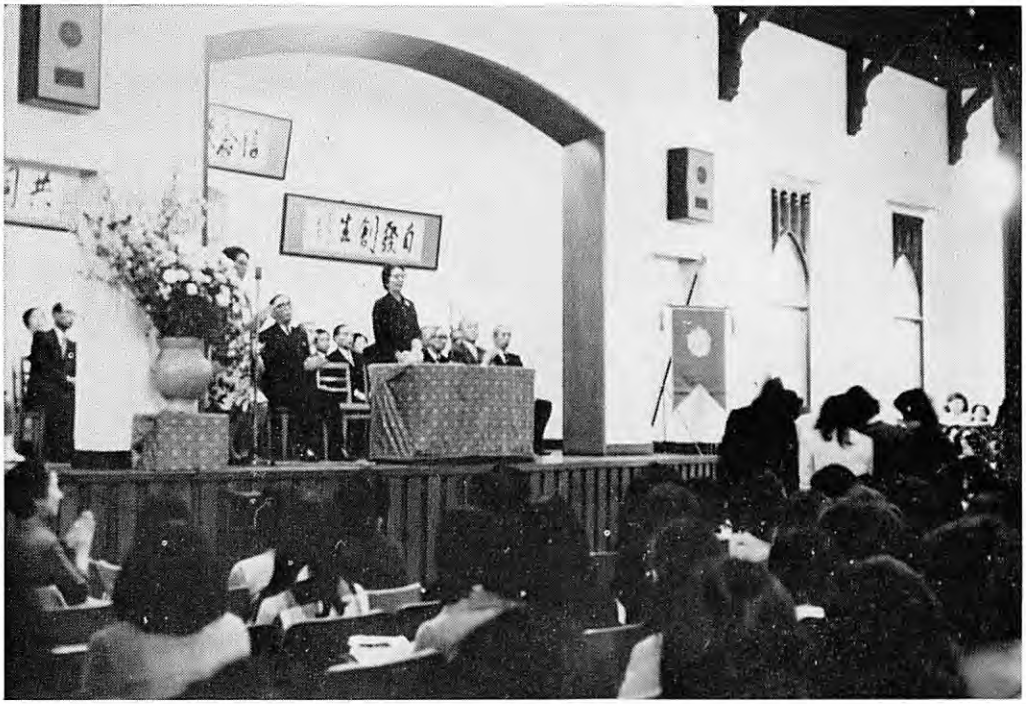
あゆみ

機関紙・同人誌のこと

学内で発刊された、機関紙の類は、多量にのぼる。ここにあげたものは、その主なものであり、それも創刊号にほぼ限定した。勿論三号雑誌ならぬ一号雑誌で消えたものもあるが、また、さまざまの苦心？を重ねて、赤字財政をのりきり、のりきって発刊を続けているものもある。活字ばなれの世相もあるが、やはり教育の場では、年毎に機関誌が増加してきているのが現状である。学生や生徒も研究や創作の発表の場をつくって、活動してきている。

図書館に収蔵されている学内関係出版点数は、約百種類にのぼる。

第七章　学園の現状



道先生学長に
就任後初の入学式にあたり，「学問は世界や人生のための真理を探究することを目標とするといわれます」と，自然科学者らしく，真理探究と人間形成について述べられた。

1　大学の現状

創立八十周年を迎えた大学部には二学部、十二学科があり、入学定員は次の通りである。

家政学部

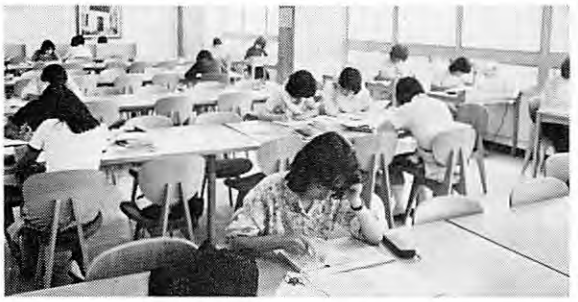
児童学科	八〇
食物学科（食物学専攻・管理栄養士専攻）	七五
住居学科	七五
被服学科	七五
家政理学科一部（物理系・化学系・数学系）	一〇五
家政理学科二部（生物農芸）	五〇
家政経済学科	六〇
通信教育課程	（在籍者五千～六千）

文学部

国文学科	一一〇
英文学科	一二〇
史学科	八〇
社会福祉学科	八〇
教育学科	九〇

図書館　試験期になるとどっと利用学生が増えるのは，昔も今も同じこと……

調理実習　理論的かつ技術的手段の修得をめざして——



障子を通してさす日ざしが，なごやかな閲覧室。

細胞学実験　透過電子顕微鏡，走査電子顕微鏡も実験には登場する。

この大学入学定員が定まったのは、一九七三年(昭和四十八年)に道　喜美代先生が、第八代の学長になられてからである。

道学長は二期八年間の学長の任期の間に、研究、教育の質的充実を目指し、同時に教育施設の改善と教職員の待遇改善及び学園財政の基礎を確立することにつとめられた。

大学院の充実はこの間積極的に進められ、家政学部は、一九七八年(昭和五十三年)に住居学専攻と被服学専攻を加え、現在、児童学専攻・食物栄養学専攻の四コースの修士課程がある。文学部は、七五年に日本文学専攻と社会福祉学専攻が、七八年に英文学専攻が博士コースを設置し、その他に教育学専攻の修士コースが、七八年につくられた。英文学と社会福祉専攻の大学院は、他大学の大学院との単位の互換制が導入されている。

本学は二つの学部から成っているが、家政学部は、人間生活の基礎的な生活科学的知見を得るために、自然科学的探究を基本として、人文的、社会的知見をもとり入れて生活探究を行うことで、家庭生活に、ひいては人間生活における豊かな価値の実現と社会に貢献することを目的とするに比し、文学部は人間の精神文化や人間社会を、精神的、思索的に究

学生食堂　カレー150円，Sランチ330円，ごはん60円，みそ汁20円，なんといっても人気はサラダ100円。

生協会員には，会員割引き価格がある。時々にぎり寿司などの特別メニューがあって，長い列ができる。「席とり禁止」「食事の間禁煙」のカードがテーブルに置かれて，人目をひく――。

明することで、人間性の真実や価値を見出し、将来を担うに足る知性を身につけることを目的としている。新制大学として発足してから三十年、各学科は、各附属研究所などとともに、年毎に研究態勢が整備され、レベルの向上を見てきている。戦前、卒業生が海外に留学し、本学に帰って研究や教育にあたることは特記すべき事であったが、今や海外に、調査研究に渡航する教員も年々多くなっている。

本学創立以来の人間としての教育、人格形成のための教育の観点は、研究、教育の為の教科の充実と不即不離の関係で、伝統として連綿としてつづいてきている。専門教育の他に一般教育課程があり、さらに本学の特色として、教養特別講義Ⅰ・Ⅱがおかれているのもそれ故である。教養特別講義ⅠはAコースとBコースにわかれ、学生の教養を深めるための必修講義である。昨年度は次の通りであった。

Aコース（芸術・思想・宗教）

「キリスト教と教育」
上智大学学長　ヨゼフ・ピタウ

「江戸っ子と歌舞伎」
成城大学教授　西山　松之助

「世界の映画」

いこい　昼休み，ベンチはにぎわう，そして放課後，他大学の男子学生がクラブへの勧誘によくやってくる。

スクールバス乗り場　目白駅から学校まで100円也，「割り込みをやめて」そんなビラが提示板にあった。

目白駅前　学習院，川村，独協，本学と，目白は学生の町，その割に本屋が少ないという人もいる……

岩波ホール支配人　高野　悦子
「敦煌の洞窟壁画と日本文学」
大東文化大学教授　川口久雄
Bコース（社会〔国際事情を含む〕・自然）
「生活文化と伝統」
学習院大学教授　加藤　秀俊
「カーター・ドクトリンと私達」
外交評論家　小幡　操
「研究の誤りと科学の進歩」
東京大学名誉教授　松井　正直
「日本の祭り」
立教大学教授　松平　誠

同IIは、主に一年生を対象に、講義・パネルディスカッション・軽井沢夏季セミナーを行って、大学生活の導入としている。

軽井沢三泉寮は、七六年（昭和五十一年）にセミナーハウスが竣工し、従来、畳にひざをかかえていた状況から解放され、さらに三年後には、泉会の全面的な援助を得て寮全体が改築された。廊下のぎしぎし鳴る建物にいささか愛惜の感があるが、新しい建物はすがすがしい。年毎に周辺の木立も落ち着いて新しい建物になじんできている。この変化の中で背後の小山の大もみの木の下は、伝統をひめて静寂である。

からだを動かすことの好きな子に――そのためには多少の危険にも挑戦する勇気が必要。

楽しい自由遊び――登園すると園児たちは，好きな遊びで一時を過ごす。そして，遊びがいつか保育へと導入されている。

遊びの中からお互いのよさを認め合い，仲よく協力できるよう，自由遊びにも細心の注意が，さりげなく注がれている。

2　附属校(園)の現状

附属校は、幼稚園・小学校が、目白の大学の地に近接しておかれ、中学校・高等学校は西生田の地に設けられている。

豊明幼稚園

豊明幼稚園は創設以来六十余年の伝統があり、現在の園舎は、併設のさくらナースリー(保育園)と共に、一九七一年(昭和四十六年)に竣工した。二年保育と三年保育があり、男子と女子園児が通い、在園者は約二百名である。

学園最初の教育の場であり、人間形成の基礎づくりの時であるので、

- 健康で、明るく、元気な子
- いきいきとした新鮮な心で物事に接し、工夫したり、つくり出すよろこびが感じられる子。
- お互のよさを認めあい、仲よく協力していく子
- 自分のことは自分でし、自立的な生活態度を身につけ、最後までやりぬく子

を心がけ、少人数の組編成をして、一人一人の可能性をのばし、調和のとれた健康な心と

少人数のクラスなので，みんなすぐ仲よくなるし，先生ともすぐ友だちになれる。

四季おりおりの行事を，いっしょにいつくしんでいこう，楽しんでいこう……先生も園児も大きな声で歌い，おどる。

身体の発達を促すことに力が注がれている。遠足・運動会・祭りなど、平常の教育を通しての指導の他に、行事がさまざまに組みこまれている。

年少組は『ばら』、もも組、みず組、年中組は『かえで』みどり組、きいろ組、あか組、年長組は『さくら』、むらさき組、あお組、白組のクラスわけ。

かえで組は、もみじの葉の色づくさまにあわせて、みどり、きいろ、あか、と並ぶ。

手づくりの保育——

目白の丘の上にたつ豊明幼稚園、新しい保育室からは、はるかに富士の姿もながめられます。ここの教育は、ひとりひとりの可能性の芽を伸ばしていくために、少人数の組編成に特長があります。

三年保育　50名
二年保育　100名

男児もいっしょに仲よく通園しています。

行事の1、夏まつり

幼稚園生活最後の年に、夕方から集まり、たのしい夏まつりが行われます。子どもたち手づくりの品々を売る夜店、親子合作のカレーライス、スリルいっぱいのおばけ屋敷、花火やフォークダンスと盛りだくさんのプログラムに、楽しいひと時を過ごします。行事、遊びに手づくりの味がにじみます。

目白通りに面した表の運動場と，裏の運動場があり，高学年が表，低学年が裏にわかれる。うらは，休み時間いつもにぎやか!!　である。

創立時より自然観察には重点が置かれていたが，今もその姿勢はかわらない。

昭和20年疎開地の学寮で演じられて以来，音楽劇が創作され，演じられている。

豊明小学校

豊明小学校は、幼稚園と同じ年に設立された。現在の鉄筋コンクリートの校舎は、一九六〇年（昭和三十五年）に新築され、七四年（昭和四十九年）には、豊明講堂（図工室・図書室・音楽室などを含む）が落成した。一学年約一二〇名、全学で七百余名の在籍である。小学校では三綱領をやさしくくだいて、

「正しいと考えたことは、さいごまでやりとげましょう」

「自分から進んで考え、くふうして、実行しましょう」

「おたがいに心を合わせ、みんなのために仕事をしましょう」

を目標にして教育が展開している。一般教科に加え、特別活動として、児童委員会・部活動・クラブ活動・週番がおかれ、学校生活での経験を広く豊かにしている。部活動は、美化部・図書部・科学部・運動部・保健部・家庭部・視聴覚部の七部があり、四年生以上が研究と奉仕活動を行う。

クラブ活動は五年生以上で、バドミントン・バレー・テニス・バスケット・体操・卓球・手芸・音楽・絵画・理科の十クラブがある。

日本式バスケット発祥の地だけに，ボールの運びも軽やかで，速い。

整備された家庭科室での，楽しい料理実習。リンゴの皮むきも生徒たちは器用にこなす。

毎月一回，児童委員会が開かれる。学校生活についての話し合い，反省が行われる。

遠足・軽井沢三泉寮の夏の学校・西生田の実地学習などの行事も多い。

毎夏、軽井沢で行われる夏の学校では朝に夕に、「学寮あしたの歌、ゆうべの歌」がうたわれる。それはかつて軽井沢に疎開した学童たちがうたったなつかしい歌だ。

学寮あしたのうた

一、鐘がなるなる　りりりんりりりん
　寮によあけの鐘がなる
　からまつばやしきりはれて
　空に希望の日がのぼる

拍子木と週番と——

毎日の生活では各部が週番として一週間の責任をもち、学校生活のきまりの実践指導にあたっています。朝礼の責任、下校の校内放送と見まわりの仕事をします。

今では珍しい拍子木をカチカチたたいて、週番の先生と戸じまりを見まわり、居残りがいないかをたしかめます。拍子木をたたいてまわるのも、下校の校内放送も、児童たちにとっては責任ある仕事であるとともに、楽しい仕事の一つです。

広い廊下，モールは授業の場にも，おしゃべりの場にも，いろいろの顔を見せる

モールでの授業は楽しい。授業がとても身近かに感じられるという社会科の授業。

理科の実験室は広い。授業のあと実験で内容を確認する，ていねいな学習がつづく

附属中学校

附属の中学校及び高等学校は、川崎市多摩区菅、通称西生田にある。豊かな自然環境の中に、新築されたばかりのすばらしい新校舎がひろがっている。中学は七八年に目白から新校舎にうつり、翌年には、高等学校も西生田の旧校舎から移ってここに中等教育の一貫教育が容易となり、その方法と課題等についての研究が始まった。

中等教育の各段階に応じて、信念徹底・自発創生・共同奉仕の精神を生かし、併設校の長所を充分に発揮して教育が展開している。

中学校では新校舎の教育の実際を紹介する「二十一世紀への学校」という記録映画を製作したが、生徒自治会も活発で、興味や関心のもとにクラブ活動にも自主的に参加し（現在二十四のクラブが活発に動いている）、学校行事にも、行事委員会を設けて、生徒に運営を体得させている。校外授業・宿泊旅行・軽井沢夏季寮・運動会・十月祭・音楽会などが行われている。

ギリシアの屋外円形劇場をしのばせる，もみじ劇場。学園祭には花の舞台になる。

創立時にも教室は学科別だった。ロッカーに荷物をしまい，教室を移動，気分を一新する。

人工芝を敷きつめた屋上ガーデン!? で昼食，自由でのびやかで，そして楽しげだ——

私達生徒一同は、行事委員会を中心として何か社会参加の道はないかと考えました。そして出た答は〝福祉〟です。……今年は、カンボジア難民を生徒全員で理解し、私達にできることで協力しようということになりました。学用品や英語の本などは、すばらしいおくりものとなるので、みなさんもご協力ください。

十月祭の呼びかけより

第19回十月祭—彩夢

「さいむ」この言葉を聞いて、皆さまは、どんなイメージが浮かびますか？

私達の希望は夢のように限りなく広がっています。私達が一人一人持っている沢山の夢を、全員が協力してどこまでかなえることができるでしょう。遠い存在だった大きな夢に近づくよう、生徒一人一人の個性をいかした様々な色を出して、素晴しい彩りの十月祭にしたいと思います。

夢を彩どる——「彩夢」が十月祭のテーマです。

プログラムより

旧講堂　丘の上に郷愁の旧講堂がひっそりと立つ。パンパスが昔とかわらず，穂をのばす。

調理実習　調理するだけではなく，テーブルセッティング，マナーもともに学習する。

体育館　3面の広いコートをもつ。

附属高等学校

高等学校では、一般の教育課程の他に、情操教育を重視する意味で全員音楽を必修（第一学年）とし、フランス語の選択科目を設けて生徒の興味に対応している。教科以外の教育活動もホームルーム・生徒自治会・生徒全体集会・クラブ連盟・兼習・校外合宿など、多様にあり、生徒自治会は、もみじ祭・運動会・音楽会・講演会・競技会などの学校行事の運営も行っている。クラブは学芸クラブが十八、運動部十四があり、対外活動も行って、好成績をおさめているものもある。

その他、遠足・軽井沢セミナー・高校生活研究セミナーなども実施されている。

各校・園において教員の研究活動も活発であり、紀要その他の刊行物があり、一方その熱心な教育活動は、校内報などによっても知ることができる。

幼稚園から大学まである本学は、常に一貫した教育理念で教育を行うことが特色となっており、これまでも、各校（園）の間で、検討されてきたが、一貫教育の強化のため、各

歌をうたう，しゃべる，もみじ祭ではバザー会場でにぎわう。モールはなんでもや。

図書館　中学と共有，図書の係が一切の管理，保存，貸し出しの責任をもつ。

楓寮　かつて大学寮であったが，今高校寮として遠距離通学生のための学寮に——

食堂　中学生よりも，利用者は多い。昼食時間も中学とはずれている。明るくて清潔。

校において教育及び運営の自主性を高める必要性から、一九七二年（昭和四十七年）に校・園長制を発足させた。その上に中等教育段階の統合化もあって、より具体的な交流を含め、一九八〇年（昭和五十五年）より、幼稚園から大学までの責任者による「一貫教育研究委員会」が定期的に開かれるようになった。

DO IT AS WE LIKE——NOW IS OUR AGE!

もみじ祭という名の由来は、この西生田の山が紅葉によってたいへん美しく色づき始める季節であることからつけられたものです。そして今年私達はこの紅葉に囲まれて、晴れであっても雨であっても（晴れであったら一番いいのですが……）ここに一年間の総結果である「我らの時代」を築きあげます。私はそれが今年限りではなくもみじ祭の歴史の中での「我らの時代」となったら素晴しいなあと思っています。

思いのままに—表現しよう
思いのままに—研究しよう
思いのままに—今我らの時代

——'81　もみじ祭プログラムより——

青木先生学長に　1981年4月8日，創立時より数えて81回目の入学式が行われた。この日青木学長は学長就任後，初の式辞を「明日への飛躍を共に……」と結んで，新しい門出への決意を述べられた。

3　学園の四季

学園の四季は、春四月からはじまる。その年の寒暖によって、成瀬記念講堂（一九七四年、東京都文京区の文化財となる）のそばの桜の開花が左右されるのであるが、創立八十周年を祝う本年は、大学の入学式当日が満開の花のかすみであった。

目白の校地には成瀬記念講堂をはじめとして、泉山館・一号館・樟渓館・香雪館・七号館があり、中央に、大学図書館と七十年館がある。今、図書館の前は創立八十周年記念行事の一つとして、八十年館の建設がはじまっている。正門前の道をへだてて、通信教育部・豊明幼稚園・豊明小学校・桜楓会の建物があり、裏門の側には、体育施設と寮舎地区がひろがっている。五棟の寮はすべて鉄筋コンクリートの建物に変った。八十年間の変貌はめざましいものがある。

西生田の校地は門から五分ほどのところに、完成したばかりの建物が豊かな緑の中にあり、奥には旧高等学校の校舎と寮や、大学グラウンド・テニスコートがある。西生田の校地は、広い敷地と自然に恵まれて、清浄な空気と共に、折々の季節の彩がそえられていつも美し

軽井沢に息づく建学の精神にも，ふれることができる貴重な一時でもある。

軽井沢セミナー　本学の教授陣によって，人文，社会科学，自然科学のセミナーが開催。

個別ゼミ，公開講座，パネルディスカッションを通じて，自由に自己を究めていく。

い。

緑の季節は勉学や自治会活動の基礎づくりのときであるが、それをすぎると、新入生も、進級生もそれぞれに落ち着いて、夏休みを迎える。学園の夏休みには二つの顔がある。一つは、通信教育部のサマースクーリングに参加する学生が全国から集ってくる。一九七八年(昭和五十三年)から、小学校教諭一級普通免許がとれることになり、学生数が増加した。本年度は二千三十名の受講生であった。もう一つは、軽井沢三泉寮である。小学校から大学、桜楓会まで、びっちりと予定が組まれ、有意義な日々が、高原の冷気の中ですぎていく。

秋には、目白地区も西生田地区も学園祭やその他の行事に賑わう。

年があけると期末試験であり、大学では、卒業論文の発表会が終えると、新しい入学者を迎えるための入学試験が行われる。

三月は卒業式の月である。附属の園や各校のほとんどの生徒が、そのまま上級校に進学するが、大学の卒業式では多くが社会へ飛翔する日となる。黒いスーツと胸につけた生花(コサージュ)が、知的な姿を映えさせる。

戦後、女子高等教育は飛躍的な伸びをみせた(巻末の付表参照)。従って、創設期の日本

震災にも焼けのこったステンドグラス。明治39年来，何を見てきたことだろうか。

成瀬記念講堂　ここに学んだ者にとって，忘れることのできない，シンボルである。

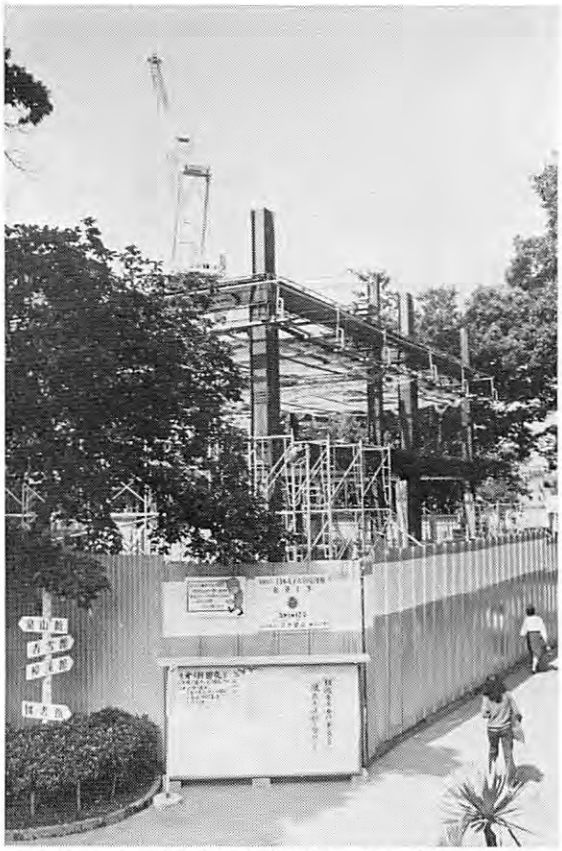
女子大学校が、女子高等教育の大方を担っていたような状況ではないし、男子系大学で学ぶ女子学生も増加している。しかしながら、女子高等教育の拡大といっても、進学率は、三十三・一％であり、男子の四十一・五％には及ばないし、女子の場合は、短期大学が二十・九％をしめ、四年制大学へは十二・二％に止っている(文部省「学校基本調査、一九七九年度)。四年制大学進学者は未だ少数であり、高等教育をうけた者としての責任も重い。女子のみの大学として、その教育と研究を高め、女子の能力を存分に練磨する意義は大きいといわねばならない。

現在、本学の卒業生は、三万六千人をこえており、社会に家庭に、国内外に、在学中にうけた生涯教育の理想を心として活動し、桜楓会はその核となっている。

本年四月、第九代学長として、青木生子先生が就任された。大学部の入学式において、「八十周年の記念すべき年に当たり、これを記念して、研究、教育施設の一層の充実をはかるために、二棟の八十年館が今建設されつつあります。その建設の音をききながら、皆さんと一諸に新しく歩み始める喜びに、私は胸をときめかしております。女性の自立と、

向上をますますめざして、わが学園は、創立当初の原点に立ち返り、明日に飛躍をと、切に念じています」と述べられた。

本学創立以来の自立した人間形成の重視と創造的能力の涵養、協力しつつ社会的貢献を果してきた教育的伝統の上に、新しい季節の扉がまた一つ開けられたのである。



80年館　いま，80年館の建設のクレーンの音がひびく，80年前，槌音とともに本学が開校したように，その音は次代への暁鐘である。

――創立80周年記念祝歌――

'81, 11, 16　記念式典に寄せて

〈一般の部〉

作詞・山田　裕美
作曲・黒鳴　千恵
編曲・坂　敏子

(一)

この学び舎を　讃えよう
八十年の伝統を　我らの力ある限り
受け継ぎ　さらに新しく
栄えあれ　日本女子大学

(二)

青春の日を　讃えよう
ゆりの木のもと　つどいあい
　我らの瞳　輝かせ
師の御教えを　心とす
栄えあれ　日本女子大学

〈児童の部〉

作詩・桐谷　優子
作曲・菊地　美香
編曲・柳沢　浩

(1)

花　花　花　があふれて　うれしい日
光が　満ちて　満ちて　輝く日
胸はずませて　わたしたち
手をとりあって　うれしい日

(2)

時　時　時　が流れて　うれしい日
光が　満ちて　満ちて　記念の日
未来につづく　この庭に
手をとりあって　うれしい日

編集後記

図書館長　福田　陸太郎

二十世紀の幕開けと時を同じくした日本女子大学校の創立から、第二次大戦後の新制日本女子大学の誕生、それから現在に至る八十年におよぶこの学園の歴史が、ここに貴重な写真資料によって再現されている。この記念の〈図説〉が出来上るまでの経過をかいつまんで記録しておくこともむだではあるまい。

創立以来、学内各所を転々としていた成瀬仁蔵先生および校史関係の資料を、図書館に収集する仕事を始めたのは、昭和四十五年からであった。昭和五十一年以降はこれら資料のうち、写真などの整理作業および成瀬先生旧宅の整理を、木下けい(以下文中敬称略)に依頼した。更に昭和五十二年からは、本学図書館友の会の援助を受けて、司書資格をもつ友の会事務局員により、成瀬先生関係の書簡類の整理作業に着手し、現在も継続している。

最近に至り、昭和五十五年十月二日に開催された創立八十周年記念事業実行委員会で、記念事業案が採択され、五つの分科会が発足した。すなわち、八十年館、出版、行事、成瀬記念館設立準備、資金計画というそれぞれの分科会である。このうち、出版分科会は、青木生子を委員長とし、副委員長に中嶌邦、福田陸太郎、更に委員・幹事として約二十名が依嘱された。

出版分科会の第一回会合は、昭和五十五年十一月五日に行われ、『図説　日本女子大学の八十年』の計画案が提出され、承認され、それ以後、実行委員を組織して作業を開始した。編集には左記の全員が当たったが、更にこまかい仕事の分担は次の通りである。――

〔本文執筆〕中嶌邦。〔年表〕石川ムメ。〔写真解説〕木下けい、石川ムメ、相馬文子、斎藤令子。実務については斎藤令子が担当した。

なにしろ〈女子大学〉と称するものでは、本学は日本最古の学園であるから、いろいろ珍しい写真や資料が残っている。それは本学にとってだけでなく、日本の女子教育の発展を跡づける意味でも、貴重なものである。従って、この図説では、単に一つの女子大学の

歴史を回顧するにとどまらず、広く日本の教育や社会に目を配り、なるべく巨視的に、この大学の果して来た役割を示すことをも心がけた。だから、単なる校史以上の意義をもつ出版物であることを確信するものである。

今、八十年の歳月をふり返ってみるとき、本学の創立者成瀬先生の教育に対する先見の明、時代を先取りしたその考え方に、改めて驚かざるを得ない。こういうしっかりした教育方針のもとに、発展を続けている本学は、誠に仕合わせだと感ずる。この図説は、かなり早急に企画され、刊行されたため、不備な点もあると思うが、その本質的な意義をお汲み取りの上、本書をごらんいただけたら幸いである。この図説の刊行に当たり、お世話になった桜楓会及び本学内外の多数の方々に、深い感謝をささげるものである。

昭和五十六年十一月

■幹　事

小林黎子
合田信子
牛頭栄子
石塚昌子

■編集委員

青木生子
中嶌邦
福田陸太郎
菅支那
村山リ
麻生ウ誠
湯浅明
伴琢磨
柴崎武夫
木下けいヨ
辻キ子
相馬文メ
石川ム子
村岡全枝
門倉芳光
正木平
浅野三美
田端光晶
塚野千
髙橋憲子(故)

レイアウト
中野　博之
カメラ
久米　たかし

年月日	事項	備考
1979 (昭和54)	附属高校新校舎竣工。 附属中学，高校全校舎落成式。 泉会の寄附により軽井沢三泉寮改築竣工。 家政学部通信教育課程開校30周年記念行事。 農家生活研究所報第1号刊行。 12月20日前学長。理事長有賀喜左衛門逝去，55年1月27日合同告別式。 日本女子大学ＦＮ賞(家政学部食物学科)設定。 附属中高校舎神奈川県建築コンクールに最優秀賞を受く。	
1980 (昭和55)	ヴェリタス賞(紫崎武夫奨学金による)設定。	
1981 (昭和56)	Ｐ．Ｔ．Ａの寄付により附属高校クラブハウス竣工。 道喜美代学長。理事長退任。 青木生子学長・理事長就任。 「日本女子大学社会福祉学科五十年史」	

1981. 11. 16　創立80周年記念式典挙行。

年月日	事項	備考
	教職員組合結成。 生活協同組合設立。 森オフデ記念奨学金設定。（改称日本女子大学寮生奨学金）	
1970 （昭和45）	附属校園の副校長，副園長制を実施。 附属高校クラブ室新築。 梅花寮竣工。	
1971 （昭和46）	教授会に通信教育審議会を設置。 学生部を廃し学生委員会を置く。 附属豊明幼稚園園舎竣工。 さくらナースリー開所。 創立70周年記念式典挙行。 吉田登志記念奨学金設定。（高校）	
1972 （昭和47）	附属校園長制を実施。 通信教育部の学則を改正，日本女子大学家政学部通信教育課程と改める。生活芸術学科の教科目を改訂，一般コース，被服コース。住居コース制となる。 児童研究所紀要第１号刊行。	沖縄復帰
1973 （昭和48）	図書館増築。 ２月20日元学長大橋広逝去。３月３日大学葬。 「井上秀先生」（第４代校長）桜楓会刊行。 有賀学長の任期満了に伴い，学長選考規程により道喜美代教授が学長に選出される。 有賀喜左衛門学長，理事長退任。 道喜美代学長，理事長に就任。 新泉山寮竣工。	
1974 （昭和49）	70年館竣工。 附属豊明小学校増築。 「成瀬仁蔵著作集第１巻」刊行。（昭和56年全３巻完結） 成瀬記念講堂文京区文化財に指定さる。 「大橋広遺稿集」大橋広遺稿編纂会刊行。	
1975 （昭和50）	大学院文学研究科に社会福祉学専攻，同日本文学専攻博士課程を設置。 学園総合計画委員会設置。 桜楓館別館竣工。「大正の女子教育」（女子教育研究双書５）刊行	
1976 （昭和51）	入学定員1000名に増員。 附属中学を西生田に移設，中高一貫教育の方針により附属高校と併せて校舎を建設する方針を決定。 泉会の寄付により三泉寮セミナーハウス竣工。 西生田楓寮を附属高校寮に所属変更。 「英文学科70年史」刊行。 桜楓会，スライド「日本女子大学75年の歩み」を制作。	
1977 （昭和52）	附属豊明小学校創立70周年祝賀記念式。 附属豊明幼稚園創立70周年記念の集り。 中島武雄奨学金，上村悦子奨学金設定。	
1978 （昭和53）	附属中学校西生田に移転，開校。 大学院家政学研究科住居学専攻，被服学専攻に修士課程，文学研究科教育学専攻に修士課程，英文学専攻に博士課程後期を設置。 児童研究所創立50周年記念行事。 河上サワ記念奨学金，高橋憲子奨学金，松本武子奨学金設定。	

年月日	事項	備考
(昭和40)	附属高等学校体育館新築。 上代タノ学長・理事長，附属各校園長退任。 有賀喜左衛門学長・理事長，附属各校園長に就任。 「日本の女子教育」(女子教育研究双書1)女子教育研究所より刊行。 家政経済学科機関誌「家政経済学論叢」創刊。 日本女子大学図書館友の会発足。 上代タノ奨学金，国文学科奨学金(久松潜一記念奨学金)，佐山記念奨学金，桜楓会奨学金，家政理学科1部奨学金設定。	
1966 (昭和41)	大学院文学研究科(日本文学専攻，英文学専攻)設置。 「教養特別講義」開講(実践倫理廃止)。 英文学科機関誌「英米文学研究」創刊。 泉山館増築。 西生田に総合グラウンド並にテニスコート造成。 附属高等学校新館竣工。 附属中学校増築。 西生田楓寮竣工。 附属高等学校若葉寮竣工。 附属豊明幼稚園創立60周年の集い。 附属豊明幼稚園同窓会結成。 日本女子大学教友会発足。 大岡蔦枝記念奨学金設定。 大学教授会に教科審議会を設け教育組織を検討。	
1967 (昭和42)	計算研究所設立。 食物学科に食物学専攻，管理栄養士専攻の2専攻を設置。 附属高等学校創立20周年式典。 附属豊明小学校創立60周年式典。 全学園合同体育祭西生田グラウンドで挙行。 教養特別講義「日本をみつめるために」第1集刊行。 「日本女子大学国語国文学論究」刊行。 「明治の女子教育」(女子教育研究双書2)刊行。 第2学生控室泉会から寄贈をうける。 附属高等学校特別教室竣工。	
1968 (昭和43)	常務理事制実施。 学生指導部を学生部に改組。 「日本女子大学学園史(コ)」刊行。 「女子の生涯教育」(女子教育研究双書3)刊行。 寮の運営につき学寮審議会を設置，検討に当る。 日本女子大学合唱団創立50周年記念演奏会。 大橋広奨学金，柴谷クニ奨学金設定。	
1969 (昭和44)	香雪館5階増築。 屋内温水プール完成。 水田米氏より玉川野毛町の土地約800坪の寄贈を受ける。 寮監制度廃止。 保健管理センター設立。 成瀬仁蔵先生生誕地山口市の史蹟に指定さる。 成瀬先生50年祭山口吉敬にて行われる。 「女子の高等教育」(女子教育研究双書4)刊行。 社会福祉学科カリキュラム問題につき学生より抗議が生じ，9月より閉講，翌年2月授業再開される。	大学紛争ひろがる

年月日	事項	備考
(昭和32)	泉山館4階増築。 アメリカのウェルズカレッジと妹姉校となる。 インディラ・ガンジー夫人来学。 月田カン学監就任。 成瀬奨学金設定。丹下記念奨学金設定。日本女子大学育英奨学金設定。	
1958 (昭和33)	家政学部社会福祉学科，文学部へ所属変更。 学部長，学科長選挙制となる。 附属中学校開校10周年記念音楽会。 附属高等学校開校10周年記念運動会。 日本女子大学学園ＰＴＡ連合会結成。 学園総合計画特別委員会設置。 新桜楓館竣工。 日本女子大学定年制実施。 成瀬先生生誕記念として唐沢富太郎著「日本の女子学生」刊行。	
1959 (昭和34)	木曜講座開講。 国際大学協会へ加盟。 学生指導部設置。 成瀬先生生誕記念として西原慶一著「ものがたり少年成瀬仁蔵」刊行。 日本女子大学合唱団全日本合唱コンクール大学の部で一位入賞。	
1960 (昭和35)	ロックフェラー財団より大学院設備援助として48000ドルの寄付を受ける。 附属高等学校目白校閉鎖。 附属豊明小学校校舎落成。 附属高等学校理科特別教室落成。 「学園ニュース」発刊。 附属豊明小学校同窓会(ふたば会)再発足。 社会福祉センター「みどりの家」(足立区興野町)発足。	日米新安全保障条約調印
1961 (昭和36)	大学院家政学研究科(児童学専攻，食物栄養学専攻)設置。 史学科機関誌「史艸」創刊。 泉山館増築。 創立60周年記念式。記念出版「今後の女子教育」，「記念アルバム」，「家政学部・文学部記念紀要」。祝賀音楽会。 第1回寮祭「いずみ祭」。 「目白文学」発刊。	高度経済成長政策ひろがる
1962 (昭和37)	生活芸術科を住居学科と被服学科に分立させる。 「国文目白」(国語国文学会会誌)創刊。 教職員厚生基金制度をつくる。 教職員に給食をはじめる。 井上奨学金設定。	
1963 (昭和38)	大学院第1回学位記授与。(児童学専攻1名，食物栄養学専攻3名) 「日本女子大学学園史二」編集委員会発足。 7月19日元校長井上秀逝去，9月21日大学葬。 第1回中学校10月祭。	
1964 (昭和39)	家政学部に家政経済学科増設。 女子教育研究所設立。 家政理学科1部に物理，数学，化学の3系列をおく。 新図書館開館。 教育学科機関誌「人間研究」創刊。	
1965	香雪館竣工。	ベトナム戦争はじまる

年月日	事項	備考
	学科，家政理学科1部，同2部，文学部＝国文学科，英文学科，史学科。 大橋広，日本女子大学長に就任。 附属高等学校創立。(目白校，西田校) 校歌制定。(古田夏子作詞，一宮道子作曲) 日本女子大学通信教育部設置認可さる。	
1949 (昭和24)	桜楓学園開講。 日本女子大学泉会発会。 日本女子大学学生新聞創刊。 11月28日第2代校長麻生正蔵逝去。12月4日校葬。	私立学校法公布
1950 (昭和25)	全学園合同卒業式。(合同卒業式の最後) 上代タノ学監就任。 文学部に教育学科増設。 10月13日前校長井上秀追放解除。 日本女子大学学園建設会成立。(学債発行)	朝鮮戦争はじまる
1951 (昭和26)	財団法人日本女子大学校を学校法人日本女子大学に改組。大橋広学校法人理事長に就任。(理事9名，監事2名) 新制大学第1回卒業式。(卒業生家政学部210名，文学部97名) 大学本館(泉山館)落成。 井上秀桜楓会理事長に就任。 「桜楓新報」(「家庭週報」改題)創刊。 「日本女子大学紀要(家政学部・文学部)」創刊。 創立50周年記念式挙行。記念出版大橋広・仁科節編著「成瀬先生のおしえ」，「日本女子大学とその附属校」。	対日講和条約 日米安全保障条約調印
1952 (昭和27)	農家生活研究所設立。 国文学科機関誌「会誌」創刊。 第1回附属高校もみじ祭。	
1953 (昭和28)	通信教育部第1回卒業式。(卒業生63名) いづみ会館(学生食堂)落成。 ルーズヴェルト夫人来学。 第1回日白祭。 フィリップス記念奨学金設定。	
1954 (昭和29)	附属豊明小学校講堂竣工。 附属中学校校舎落成。 社会福祉学科機関誌「社会福祉」創刊。	
1955 (昭和30)	大学体育館落成。 桜楓会創立50周年記念式。 筒井・関根記念奨学金設定。(高校)	
1956 (昭和31)	大橋広学長および理事長，附属各校園長退任。 上代タノ学長・理事長，附属各校園長に就任。 学校法人日本女子大学寄付行為一部変更。(学長，校園長の任期を定める。理事9名を13名に増員) 学園組織規程実施。 月刊誌「泉」創刊。 英字新聞「メジロタトラー」創刊。 下浦海岸寮竣工。 日本女子大学合唱団第1回公開演奏会。	国際連合加入
1957	成瀬先生生誕100年記念式。	

年月日	事項	備考
	第1回「山の集い」西生田で開催。 戦時家庭経済展を三越本店で開催。仙台，大阪，京都，名古屋，札幌等を巡回展示。	
1939 (昭和14)	井上校長，大橋家政学部長満州開拓民の実状並びに教育状況視察のため，満州および北支出張。 市内10か所のデパートで，戦時経済教育，生活刷新を目標として「大人紙芝居」を実演し，戦時家計生活刷新相談所を開く。京都，大阪，神戸，名古屋，仙台，札幌等でも開催。 「成瀬先生講演集1～10」刊行始まる。	
1940 (昭和15)	高松宮同妃秩父宮妃ほか，西生田視察。 紀元2600年奉祝式典に井上校長参列。 井上校長女子高等教育に関する功労により勲五等瑞宝章受章。	日独伊3国同盟締結 大政翼賛会成立
1941 (昭和16)	西生田新校舎地鎮祭。 井上校長大日本青少年団副団長に就任。 日本女子大学校報国団結団式を行う。 附属豊明小学校，国民学校令により附属豊明初等学校と改称。 創立40周年記念式挙行。 卒業繰上げにより12月卒業式を行う。	大日本青少年団結成 国民学校令公布 太平洋戦争おこる
1942 (昭和17)	西生田校舎落成，家政学部第1類，第2類の4年生，国文学部，英文学部の2年生の授業を西生田校舎で行う。 「日本女子大学校四拾年史」刊行。 卒業繰上げにより9月卒業式を行う。	大日本婦人会発足
1943 (昭和18)	川崎市菅・細山農繁期託児所施設に学生参加，(昭和19年まで) 満州開拓村に勤労奉仕隊として家政学部4年生33名参加。 新卒業生皆働配置につく。 国文学部，英文学部全学年西生田に移転。 附属高女修業年限4年に短縮。	東京都制実施
1944 (昭和19)	新学制により家政科を育児科，保健科，管理科，家政理科（物理化学専攻，生物農芸専攻）文科を国語科，歴史科，外国語学科(英語)とする。修業年限3年。 学校工場開始。全学生皆働配置につく。 附属豊明幼稚園臨時閉鎖。 附属豊明初等学校学童約100名軽井沢に集団疎開。 桜楓会児童健康相談所を児童研究所に合併。	学徒動員令下る 児童の疎開促進決定
1945 (昭和20)	10月大学部学生に授業開始を通知。疎開等のため出席不能者多く，授業開始は予定より遅延。 附属豊明初等学校集団疎開から帰京，11月12日授業開始。	ポツダム宣言受諾 女子教育刷新要綱決定
1946 (昭和21)	アメリカ教育使節団婦人代表ホートン博士来校。 大学部，附属高等女学校，附属豊明初等学校合同卒業式。 井上校長日本女子大学設立に関する報告を桜楓会総会において行う。 11月6日，教職追放により井上校長退任。 大橋広，附属豊明幼稚園長，附属豊明初等学校長，附属高等女学校長に就任。	女子大学連盟成立 日本国憲法公布
1947 (昭和22)	大橋広，日本女子大学校長に就任。 附属中学校創立。 附属豊明初等学校を附属豊明小学校と改称。 附属豊明幼稚園再開。	教育基本法公布
1948 (昭和23)	3月日本女子大学(新制)設置認可。 4月日本女子大学発足。家政学部＝児童学科，食物学科，生活芸術科，社会福祉	

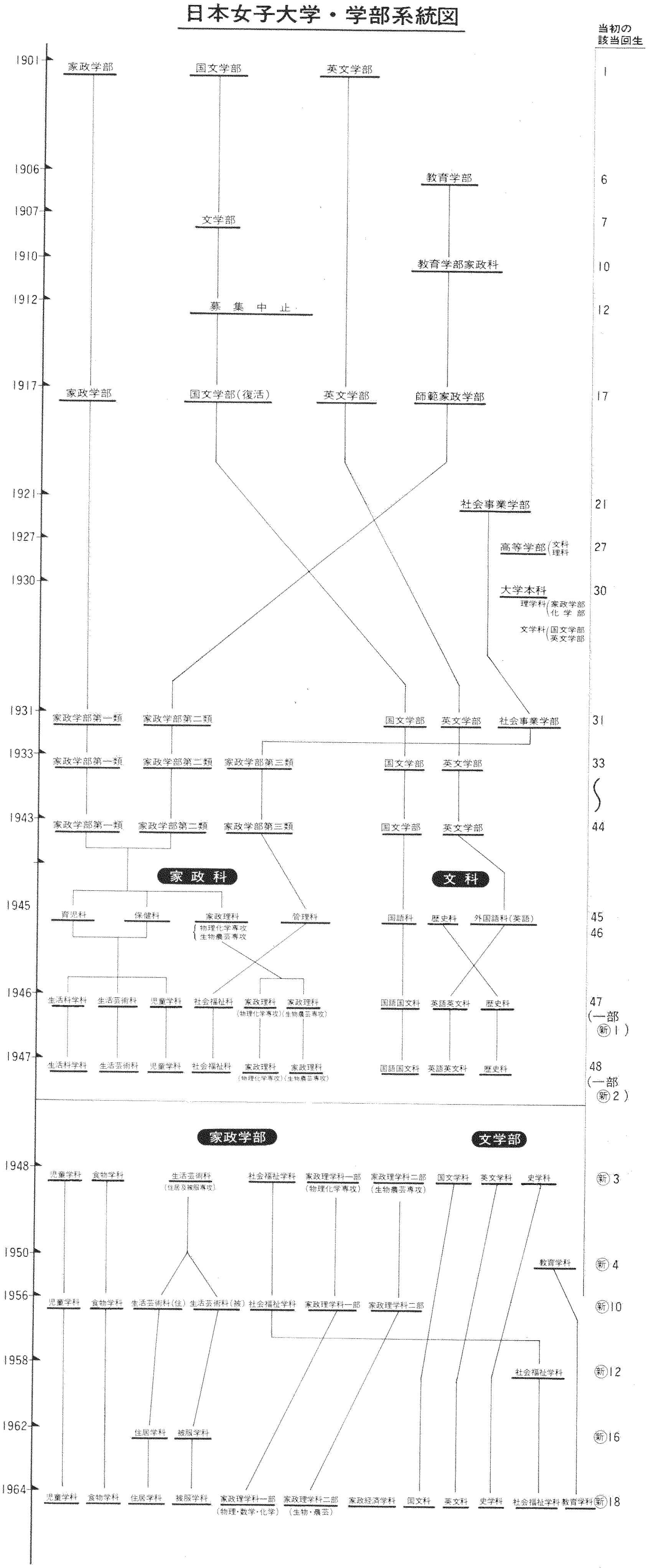
年月日	事項	備考
	関東大震災のため豊明館，家政研究館大破。 震災に際し，東京市社会局に協力，桜楓会児童救護所を上野公園に開設。	
1924 (大正13)	安田修徳会から児童研究所費として10万円寄付。 国産品奨励展覧会開催。皇后陛下行啓，来会者35,000余，大阪，神戸，京都，名古屋，福岡，横浜各地を巡回。 桜楓会児童健康相談所開設。(地域社会のため)	
1925 (大正14)	桜楓会夜間女学校開設。	普通選挙法公布
1926 (大正15)	総合大学予科高等学部教室竣工。(現樟渓館)	昭和に改元
1927 (昭和2)	高等学部開設。入学者理科27名，文科54名。(修業年限3ヵ年)	大日本女子青年団創立
1928 (昭和3)	国文学部卒業生に国語中学教員無試験検定資格認可さる。 創立25周年祝賀式。女性文化展覧会開催，皇后陛下行啓。大阪，神戸，山口等を巡回。 仁科節・渡辺英一編著「成瀬先生伝」，第25回生による「成瀬先生追懐録」刊行。	
1929 (昭和4)	児童研究所設立。(所長松本亦太郎) 軽井沢三泉寮の成瀬先生胸像(三井高修作)除幕式。	
1930 (昭和5)	高等学部第1回卒業式。(卒業生理科17名，文科33名) 大学本科開設，入学者理科19名，文科38名。(修業年限3ヵ年) 日本女子大学校学生歌作成。(作詞本校学生，作曲信時潔)	
1931 (昭和6)	高等学部学生の募集を中止。専門部学制一部改革，家政学部を第1類，師範家政学部を第2類とする。 麻生正蔵校長辞任。渋沢栄一校長就任。井上秀学監就任。 定款を変更して従来の理事1名を理事7名とする。(渋沢英一，阪谷芳郎，三井高修，江口定条，森村市左衛門，塚茂太郎，井上秀) 天心寮(海岸寮—千葉県富津村)開寮。(昭和15年廃止) 11月11日渋沢栄一校長逝去。井上秀校長に就任。	満州事変おこる
1933 (昭和8)	大学本科第1回卒業式，(理科7名，文科22名) 社会事業学部を廃し家政学部第3類をおく。 創立第33回記念式に成瀬校長胸像(高村光太郎作)除幕式を行う。	国際連盟脱退
1934 (昭和9)	成瀬校長生誕地(現山口市吉敷)に桜楓会により記念碑建立。 本校移転地西生田(神奈川県川崎市菅，約107,000坪)に決定。 校章制定。	
1935 (昭和10)	校歌作成発表。(33回生作詩，下総皖一作曲)	
1936 (昭和11)	本校移転地西生田道路地鎮祭。	
1937 (昭和12)	総合大学実現のため皇后陛下より金一封御下賜。 英文学部シェイクスピア劇公演「御意に召すまま」軍人会館において。 英文学部奨学金「島田賞」設定。 井上校長欧米視察。(5月から10月まで)	日中戦争おこる
1938 (昭和13)	附属豊明小学校保健食の給食実施。 西生田において学生勤労作業。 日本女性文化研究所を国文学部内におく。 「日本女子大学校四拾年史」編集開始。	国家総動員法公布

年月日	事項	備考
	村市左衛門氏北越地方講演旅行。	
1911 (明治44)	創立10周年記念式挙行。「日本女子大学校の過去現在及び将来」を出版。 幼稚園園舎新築。高等女学校寮(氷香寮)開く。 本校創立10年記念講演のため，成瀬校長，渋沢栄一氏，大隈重信氏，森村市左衛門氏関西へ旅行。	
1912 (明治45)	附属豊明小学校第1回卒業式，卒業生20名。 本年度から国文学部大正5年まで一時廃止。 「家庭週報」再刊。 婦一協会創立。 成瀬校長欧米旅行に出発。(8月から翌年3月まで)	大正に改元
1913 (大正2)	桜楓会託児所開所。(小石川久堅町)	1914(大正3)第一次世界大戦に参加
1915 (大正4)	桜楓会託児所巣鴨宮下に移転。(昭和3年日暮里託児所に合併) 成瀬校長勲五等に叙せられ瑞宝章を授けられる。	
1916 (大正5)	本年度入学者から宣誓式を行う。 ラビンドラナート・タゴール来校。ギタンジャリ朗読。タゴール，三泉寮で5日にわたり学生を指導。 桜楓会員修養会「天心団」結成。	大正デモクラシー高揚
1917 (大正6)	学制改革を行い撰択科目制度を採用。 教育学部を廃し，師範家政学部を設置。 桜楓家政研究館落成。皇后陛下行啓。校旗制定。 三泉寮夏期寮で成瀬校長「軽井沢山上の生活」10回講義を行う。 暴風雨災害に際し，桜楓会臨時託児所を穴守，大島町，猿江町，石島町に開く。	臨時教育会議設置
1918 (大正7)	桜楓会主催で格安実用品バザーを開く。 成瀬校長「女子教育改善意見」刊行。	第1次世界大戦終る
1919 (大正8)	成瀬校長臥床，肝臓癌の診断あり。 評議員会開催，成瀬校長の意見により後任校長の件を協議。 1月29日，成瀬校長告別講演(我が継承者に告ぐ)を行う。 皇后陛下より病中見舞を賜わる。 2月，成瀬校長本校の三綱領「信念徹底」「自発創生」「共同率仕」を揮毫。 桜楓会から高村光太郎氏に成瀬校長胸像製作を依頼。 綜合大学資金として皇后陛下より金1万円を御下賜。 3月4日午前8時20分成瀬校長永眠。享年60歳。従五位に叙せらる。 教育関係者「成瀬氏哀悼女子高等教育問題講演会」開催。総合大学達成援助の決議を行う。 3月9日，成瀬校長葬儀。 麻生正蔵日本女子大学校長に就任。	国際連盟に加入
1920 (大正9)	附属豊明小学校校舎新築。 総合大学基金募集に桜楓会員の応募額30万円に達し，成瀬前校長の霊前に報告。 桜楓会組織変更，社団法人となる。 桜楓会第2託児所落成(日暮里)。(昭和20年戦災で焼失)	私立大学認可
1921 (大正10)	社会事業学部設置。 桜楓会アパートメントハウス落成。(有職婦人のためのアパート)	
1922 (大正11)	雑司谷墓地の成瀬校長墓碑除幕式。(碑文撰および書渋沢栄一，題字西園寺公望)。	
1923 (大正12)	女子総合大学設立募金趣意書発表。 大正12年度以降の英文科卒業生に対し英語科中等教員免許認可さる。	関東大震災おこる

日本女子大学学園年表

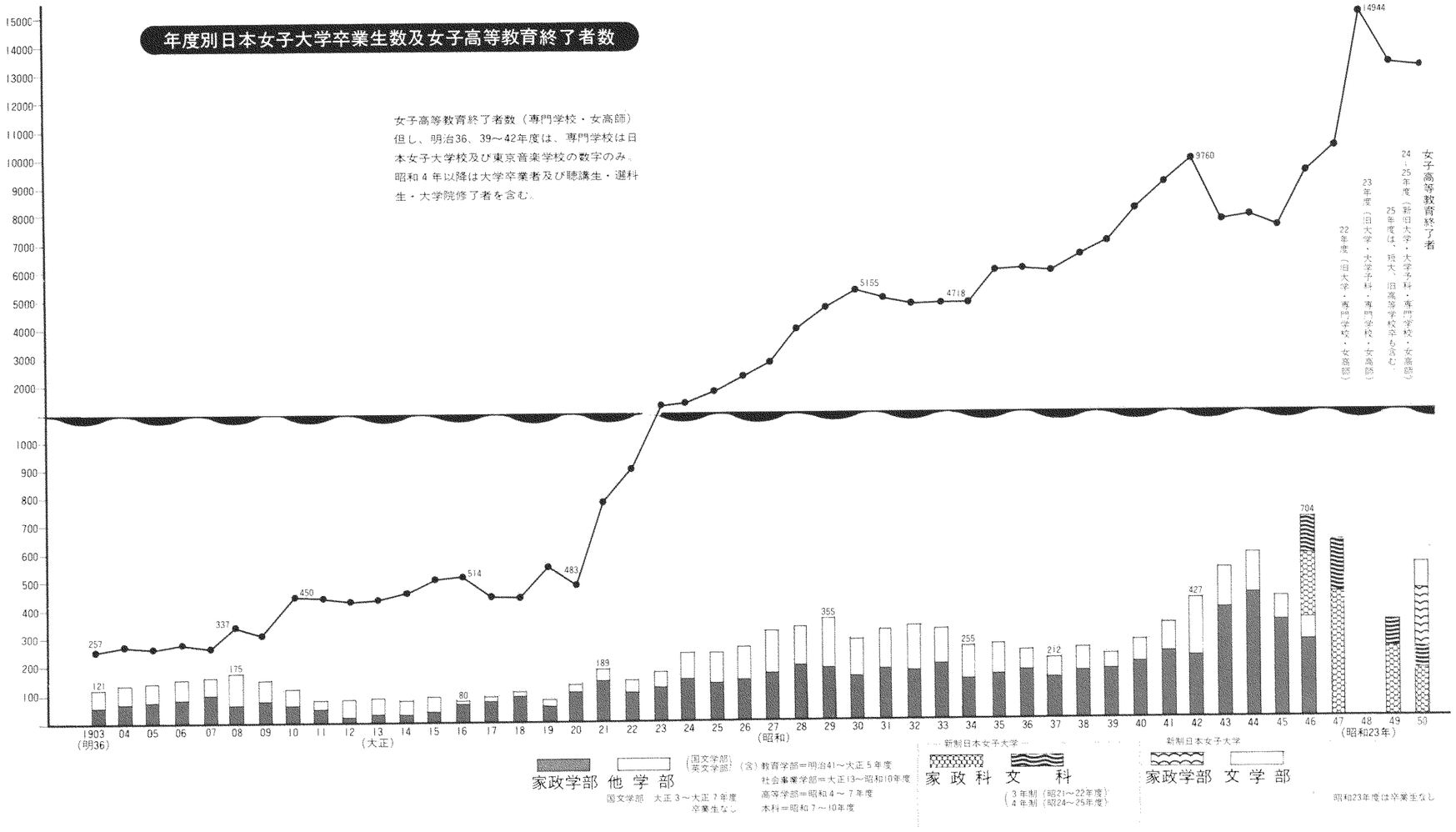
年月日	事項	備考
1896 (明治29)	成瀬仁蔵「女子教育」刊行，女子大学創設運動この年から始まる。 この年，設立趣意書作成。	
1897 (明治30)	第1回発起人会開催，東京および大阪において創立披露会を開く。 神戸にて女子教育演説会開催。	
1900 (明治33)	女子大学建設地を東京に決定。翌年4月開校を予定。三井家から学校敷地として目白に約5520坪の寄贈を受ける。 岩崎弥之助他29名の名で日本女子大学校設置認可願を東京府知事に提出，12月24日認可。	1899(明32)高等女学校令公布 私立学校令公布
1901 (明治34)	成瀬仁蔵，日本女子大学校長を東京府知事から認可される。 4月20日日本女子大学校開校式。第1回入学者510名（家政学部84，国文学部91，英文学部10，英文予備科37，高等女学校全学年288）教職員数53名，校舎2棟，寮舎3棟，教師館2棟ほか。 皇后陛下より御下賜金2000円を賜わる。 第1回運動会を飛鳥山渋沢男邸で開催。	
1902 (明治35)	附属高女第1回卒業式。卒業生82名。 第2回運動会を校庭で開催。	
1903 (明治36)	桜楓会結成。 「学報」1号発刊。(明治37年4号で終刊)。 第3回秋季大運動会開催。来会者約5000名。	専門学校令公布
1904 (明治37)	私立日本女子大学校専門学校令により認可。 本校第1回卒業式。卒業生120名。 「日本女子大学校週報」(謄写版刷)発行。 桜楓会発会式。実業部開設。 「家庭週報」発刊。(桜楓会発行)	日露戦争おこる
1905 (明治38)	本校財団法人となる。 三井寿天子氏の寄付により桜楓館落成。 寮舎共同購買会開設。	
1906 (明治39)	教育学部設置。附属豊明小学校，附属豊明幼稚園開校。森村豊明会の寄付により豊明館(教育学部校舎・講堂—現成瀬記念講堂)，小学校，幼稚園の校舎落成。曙寮(小学生寮)開寮。 金山に約5000坪を購入。寮舎2棟，病室1棟を建設。 三井三郎助氏の好意により軽井沢三泉寮開寮。 本校と桜楓会主催の文芸会に4内親皇他各宮妃来校。	
1907 (明治40)	国文学部を文学部と改称。 桜楓会主催で，図書館完備資金募集バザーを開く。 若葉会発足(附属高女同窓会)。 渋沢栄一氏寄贈の晩香寮開寮。	
1908 (明治41)	第7回創立記念日に藤田伝三郎氏寄贈の香雪化学館開館。 井上秀家政学研究のため米国に留学。 桜楓会により日本女子大学通信教育会設立。「女子大学講義」発行。	
1909 (明治42)	家庭週報一時発行中止。	
1910 (明治43)	教育学部に家事科中等教員無試験検定認可さる。 英文雑誌「ライフ」発刊。(明治44年第6号終刊) 女子教育反動時代に際し，女子高等教育普及のため，成瀬校長，渋沢栄一氏，森	日韓併合なる 実科高等女学校設置

日本女子大学・学部系統図

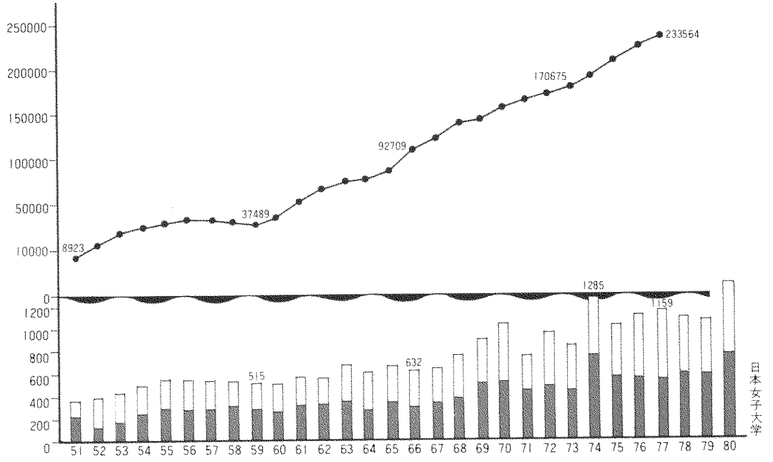


年度別日本女子大学卒業生数及女子高等教育終了者数

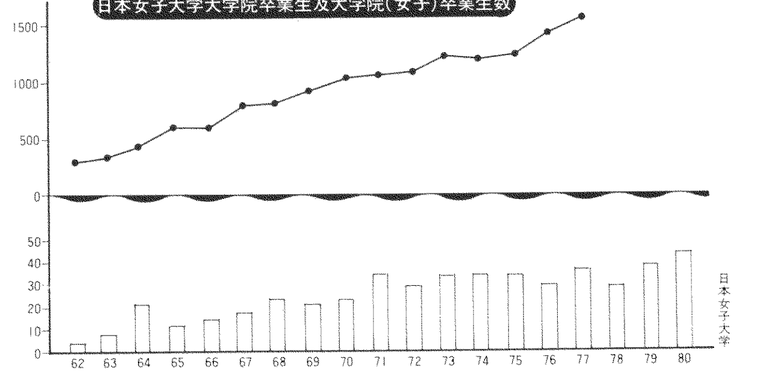
女子高等教育終了者数（専門学校・女高師）
但し、明治36、39～42年度は、専門学校は日本女子大学校及び東京音楽学校の数字のみ。
昭和４年以降は大学卒業者及び聴講生・選科生・大学院修了者を含む。



日本女子大学卒業生数及大学・短期大学女子卒業生数



日本女子大学大学院卒業生及大学院(女子)卒業生数



図説　日本女子大学の八十年

昭和五十六年十一月十六日　第一版発行
昭和五十七年　四月　十日　第二版発行

発行者　青木生子

発行　日本女子大学
112 東京都文京区目白台二―八―一
電話・東京(〇三)九四三―三一三一
振替口座・東京　五―三〇六〇九
学校法人・日本女子大学

印刷　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一

© 1981年 JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY